

# 冬の魔法使い

すすむと春香の7つの旅



作：  
塚越広治

地上に舞い降りた寒気の固まりが、人や建物にかき乱されて、鋭い切っ先を持ったつむじ風に分岐した。少女の肩に掛かる長い黒髪が、つむじ風に弄ばれるように靡いているのだが、本人はこの世界に心を閉ざすように、気にする気配がない。

ここは地元に着したこじんまりした商店街だが、取り囲む住宅地に恵まれて、店にも行き交う人々にも活気がある。ハンバーガーショップのウィンドー越しに見える店内に、賑やかにはしゃぐ彼女と同世代らしい高校生の少女の一団がいる。一瞬、視線が合った一人は窓の外の少女から目を逸らし、少女もまた無関心を装って別の対象を求めて視線を移動させた。

時々、少女は歩調をゆるめて、豊かな商品が陳列された周囲のショーウィンドーを覗いたが、その視線は定まらず、彼女は求めるものを得ることが出来ていない事を窺わせている。事実、彼女は歩きつつ、無表情でため息をつくことがある。

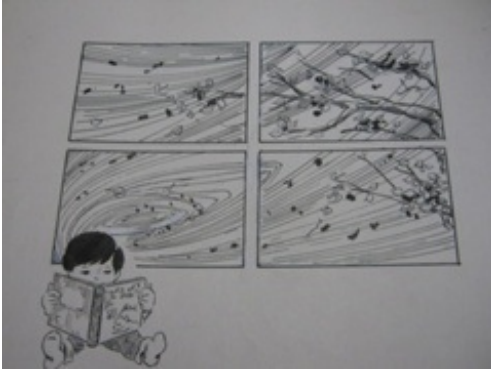
商店街の中央の広場の時計は4時半を回っており、この季節、あと一時間もすれば空は赤黒く変じて急速に闇に包まれる。少女は学校の後、図書室にとどまるわけでもなく、友人と楽しく交わるわけでもなく足早に帰宅した。そこにも居場所がないように、スケッチブックを抱え、小物が入ったバスケットを手に提げてここにいる。少女は街の景色の一部にすぎず、彼女に特別な注意を払う者はなく、彼女に流れ込む人々の意識は、北風が吹き抜けてゆくように彼女の存在とは関わりがない。

彼女には特別な目的地があるわけではなく、スケッチのネタを

探すと言うことを心の中のいい訳にして、時間や人から逃げるように背を向けて、小さな町を彷徨っているのである。

彼女は広場の時計台を囲む花壇の縁に腰をかけて、携行にはやや大きすぎるスケッチブックを抱え直した。そのスケッチブックに注ぐ視線が柔らかく、彼女の心の拠り所らしい。この僅かな空間だけに彼女の居場所がある。





すすむは全てのものに背を向けるように絵本を見つめた。

すすむの意志に従う所有物は、すすむの目の前の5冊の絵本だけ。おばあちゃんが部屋を去るのを待って、すすむは5

冊の絵本を腕に抱えて部屋の隅に配置して回った。部屋の四隅に一冊ずつ。

残った一冊は、部屋の中央に。

さきほど、おばあちゃんに絵本を散らかしてはいけないと注意された状況だった。すすむの仕草が少し遠慮がちだったのは、罪悪感と言うよりも、自分の遊びをどう説明して良いかわからなかったからである。

そして、すすむが自分の遊びを説明する言葉を持ちたいとも思わなかったのは、大人の言葉が嘘を重ねて塗りつぶされているのを知っているからに違いなかった。

すすむはパンダの絵本を抱えて、部屋の中央からやや窓よりを、背中を丸めてころんと転がっててみた。

続いて、畳の上をごろごろと転がってみた。すすむはつまらない表情のまま。別に、深い意図はない。すすむがたった一人で退屈をまぎらわせる遊びの一つである。

この遊びを中断させたのは、さっき、おばあちゃんが持ってきたホットケーキである。この聖域に遮断したい違和感のある雰囲気

気を拡散させる。

すすむは転がるのを止めて、うつぶせに寝転がったまま、ホットケーキを眺めた。ホットケーキは二枚重ねで、幼い彼にとってボリュームがありすぎる。すすむはホットケーキから目を逸らして、抱えた絵本を開いた。そして、お母さんの口調を再現しながら声に出して読んだ。

「しんしんと こなゆきが そらに まう やまおくの むらのことでした」

すすむは、字が読める年齢ではない。ただ、幼児の素直さで、母親が読み聞かせてくれた語り口を記憶していて、口調を真似て繰り返しているのである。

熱いシチューの香りが漂う丸木小屋の中で、母子のパンダがお父さんパンダの帰りを待つ光景が、絵本のページから溢れるように広がった。すすむはこの描写に、ホットケーキの記憶を重ね合わせて覚えている。

お母さんはホットケーキを食べるすすむに寄り添って、この絵本を読んできたのである。すすむはシロップが滴る一枚目を食べながら、お母さんの声を聞いた。お腹が一杯になったすすむが、二枚目を意味もなくつつき出すと、お母さんは食べ物を粗末にするすすむを叱る。

ただ、叱り方は優しく、あらかじめ定められた台本どおりのように、残りのケーキを自分が食べてしまうのだった。すすむは、お腹の脂肪を気にしながら遠慮がちにシロップをかけるお母さん

の姿や、ホットケーキの咀嚼のために中断するお母さんの声のリズムが好きだった。

しかし、今、すすむの目の前には冷めかけたホットケーキがあるだけだ。

すすむは記憶から目を背けるために、くるくると頭を動かして部屋の中を見回した。おばあちゃんが几帳面に掃除をしていて、僅かにタンスの上には、博多人形や小さな額縁に入った写真や何冊かの本が置いてあるのだが、彼が手を伸ばしても手が届かない。変化があるように見えながら、彼のような幼児には殺風景な空間だった。

ふと、手の届く場所にあった白い毛糸のマフラーが目に入った。すすむはそのマフラーをしてこの部屋から公園に逃げ出すことに決めた。

マフラーを外出の目印にして台所へ行くと、おばあちゃんはセーターの上からジャンパーまで着せて、すすむをまん丸にした。風邪をひかないことが、一人で外出させてもらうための条件だった。

「ご飯の準備が終わったら、ついて行ってあげるのに」

「いいの」

すすむは玄関に向かってかけだした。おばあちゃんは、教師の目つきをして鋭く指摘した。

「車には気をつけるのよ」

そして、くどく付け加えた。

「道路に飛び出しちゃダメよ」

「はい」

すすむはよい子の返事をして、青い小さなプラスチックのバケツの中で、黄色の柄の付いた赤いスコップをカチャカチャ音をさせてアパートの部屋を飛び出した。

おばあちゃんはそんな孫を見送りながら、孫の心を考えた。  
(今日一日は、平穩に過ごせるかもしれない)

そして、息子と嫁、すすむの父母の関係にため息をついた。

部屋のドアから駆けだしてアパートの階段を降りると、そこは隣のアパートに挟まれた路地である。さっきまで、すすむが窓から観察していた樹木があって、すすむは彼に敬意と親愛の情を込めて『モクモク』と名付けている。

すすむは立ち止まってモクモクの幹をこんこん叩いて挨拶に替え、自転車にぶつからないよう駆けだした。小さなバケツの中でスコップがからからと寂しく賑やかに鳴っている。

すすむの幼い体でようやく駆けることの出来る狭い道を通り過ぎると、前方から車のエンジン音が聞こえ、絶え間なく続く大小のエンジン音は、交通量の多さを想像させた。

すすむは遮るよう現れたガードレールで足を止めた。片側二車線の黒いアスファルトの道路と、左右に行き交う車が、すすむの行く手を遮ったのである。すすむには激しく流れ下る大河にも見えた。

道路の向こうに目をやると、夾竹桃が並ぶ壁がある。壁の高さは、すすむの背丈の倍はあり、ブランコやコンクリートの白い山の頂上が、夾竹桃の壁の上にはみ出して見えていた。去年、すすむがおじいちゃんちに来た時に、夾竹桃の赤い花を見たことがある。

しかし、目の前の生け垣に花はなく、その緑は車の排気ガスやほこりや泥にまみれてくすんでいる。

立ち止まったすすむの左15メートルばかりのところに、白く描かれた横断歩道は、アスファルトの川に架かる橋のよう。その



橋を渡り終えたすぐ向こうが、公園の入口である。

すすむは入り口にめがけて横断歩道を駆けた。

「いやん」

突然、すすむは驚いて悲鳴を上げた。北風よりもずっと質の悪いつむじ風が、この幼児の鼻先を撫でて行ったのだ。一瞬の間をおいて、車のクラクションがすすむの耳を貫いた。運転手が窓から顔を出し、すすむを振り返って何か怒鳴っているが、よく聞こえない。

すすむは放り投げてしまったバケツとスコップ拾い上げ、今度こそ信号が青になるのを待って道路を渡った。

以前は、住宅地の中であって、遊び回る大勢の子供が居たに違いない。しかし、今はオフィス街や町工場に飲み込まれかけた公園である。間もなく夕方を迎える公園にいるのは、すすむ一人だけだ。

しかし、寂しくはない。すすむは大人から切り離されて、開放感すら感じているのである。

すすむがその周囲をまわれば僅かに数分という手ごろな大きさの公園である。四方をぐるりと夾竹桃の生け垣に囲まれている。西と東の右の隅が入口として開いているだけで、夾竹桃の枝も、細長い葉も、余り密ではなく、側に立つと向こう側が透けて見えるほどだ。

しかし、公園の中において、回りをぐるりと緑のカーテンに囲まれていると、ここが回りの人や建物から隔離された土地のように感じられるのである。

すすむの砂場は、公園の入口近くにあって、すぐ側にペンキの

剥げたシーソーがあるのだが、その支柱はさび付いていて鈍い音を立ててきしむ。シーソの横には鉄棒があって、すすむは自分の背丈より少し高い鉄棒をくぐって遊ぶことがある。

公園のまん中には、水の止まった小さな噴水。ずいぶん長く水が止まっているらしく、もともとの役割を忘れてしまったように乾ききって、風に埃が舞っている。その横にはブランコ、冷たく凍り付いたようで、すすむはこのブランコが揺れるのを見たことがなかった。

その斜めにコンクリートの小山。中にはトンネルがあって、頂上からはぐるりと螺旋状に滑り台がついていた。すすむは人々に忘れられた滑り台を滑り降りて、積もった埃で衣服が汚れるという経験をしている。

公園にもう一つある入り口の側には、木の切株に似せたコンクリートの円柱の腰掛けが5つ、曲線を作って並んでいるが人の姿はない。すすむはその切り株が冷え切って腰を下ろすとお尻が冷たいという経験をしていた。

公園として、ひと通りの遊具がある。ただ、楽しく遊び回る子ども達だけがない、すすむ一人の遊び場だ。贅沢すぎる寂しさがある公園だった。

すすむは、いつものように砂場のまん中に居座って、砂を盛り上げて山を作り始めた。しばらく夢中になって、砂を盛り上げたり、山腹を手の平で叩いて固めたりしながら、寂しさを忘れた。忘れるために、その作業をした。

すすむの構想通りの砂山が出来上がってみると、それは、すす

む本人もほれほれするような代物で、彼が側に立つと、すすむの膝より少し低いくらいの高さがあり、その直径は彼の歩幅に換算して2歩分近くもある。その山腹は滑らかで、でこぼこ1つない。山頂がなだらかに丸いのは、彼が手の平で丁寧に整形したからだ。

芸術家が自分の納得の行く仕事が出来た時の仕草で、すすむは作品からちょっと離れて、立ったりしゃがんだり、砂山の回りを回って視点を変えてみたりして作品を丹念にチェックした。

やりがいのある重労働に、すすむは少し額に汗をかいた。彼はマフラーを外してシーソーの端っこに掛け、手の甲で汗を拭いた。

木々をすり抜けて来る風の冷たさが心地よく、この時だけは北風が彼に好意を抱いているように思われた。すすむはちょっとお腹を突き出して腰に手を当てたり、頬に手を当てて考え込んだり、一通りの満足の仕草をした。

少し間を置いて、彼は辺りを見回した。自分の作品に同調してくれる人影を捜したのである。

公園の中では強い風が生け垣の夾竹桃の葉を揺らし、すすむの周囲から押し寄せる葉擦れの音が不安をかき立てただけだった。

すすむは小さくため息をついた。作品に向き直って、赤いスコップを握った。作品に手を加えるつもりだ。すすむは短い思案の末、手前の方からトンネルを掘り始めた。少しづつ慎重に掘りすすむめる。山を崩さないように、小さな世界の安定感を崩さないように。

ふと、すすむは硬直したように手を止めた。

しばらく、何かを考えるように全身の動きも時を止めた。誰かが、自分を眺めているような気がしたのである。顔を上げ、おそるおそる視線を正面の道路から右の方にずらすと、夾竹桃の緑のカーテン、続いてブランコが視界の端に入った。

彼は視線を戻してトンネルを掘る手を動かし始めたが、不思議そうに首を少し傾げたままだ。

が、やがて、すすむはまた手を休めた。人の気配が強まって明確に存在感を増している。すすむの動きを止めさせたのは、優しい女性の雰囲気だった。彼女の視線は、すすむのためだけに注がれている。唇は閉じてはいるが、微笑む表情に変化することのない安定感がある。彼女の腕は今にもそっと動いて、すすむを背後から包み込みそうな気配を感じさせる。

しかし、その表情の目の奥に少し寂しさが混じるのはどういうことだろう。そんな明瞭な姿が、暖かな雰囲気にも包まれて、すすむの背中の方から伝わってくるのである。すすむは見えない後方に、若い女の人の存在を確信した。しかし、その確信がどこか儂い、変わらない優しさと不安感が入り混じって、今にも消えいりそうなのである。

すすむはその人が消えてしまう前に、一目、姿を見るために慌てて左の方に振り返った。あんまり慌てたので、振り向きざま、彼は小さく尻もちをついてしまった。その様子がおかしかったの

かもしれない。

(うふふっ)

女性の柔らかな笑みが伝わってきた。微妙な表情を判別するには距離がありすぎるはずだ。しかし、すすむには好意がこもった感情が伝わってくるのである。

すすむに伝わる表情が、肉眼で判別したものではなく、女性が発する雰囲気によるものだ。すすむもつられてはにかむように笑った。女の人とは距離が20メートルくらいある。なのに、女性のすすむに対する好感は、直にすすむに伝わって、すすむはその女性が自分のすぐ側で微笑んだ様に見えるのである。

すすむは砂場にお尻を着けたままの格好で、不思議な女性を見た。シーソーの向こう、木の切株の腰掛けのところ。年齢は、すすむよりずっと年上だが、すすむのお母さんに比べれば若くて少女と呼んでもいい年頃である。首にはふかふかの顎まで覆う赤いマフラー、長い髪が方の後ろに伸びている。それから、象牙色の柔らかなセーターと青いジーンズ、そろえた足の先には白のスニーカー。腕は胸の所でX字に組んで大きな本を抱え込んでいる。隣の切株にはクリーム色の籐のバスケットが置いてある。この少女のものに違いなかった。

この雰囲気は、先ほど背中に感じたイメージとそっくりだ。

すすむは立ち上がってお尻の砂を払った。

(しばらくの間)



すすむはそう感じたのだが、すすむはそのまま少女と見つめ会っていた。

半分は好奇心、残りの半分は少女の視線に誘われて、すすむは歩き始めた。途中、木立の所に立ち寄ったり、コンクリートの小山の上に登ったり、そこから滑り台を降りたり、屑入れの所にまで寄り道して、相手に興味の無い振りをしながら、視線を慎重に少女に向けたまま放さない。

すすむはそうやって、ゆっくり、ゆっくり距離を詰めて行った。少女は、すすむを待つように姿勢を崩さず腰掛けたままだ。すすむはようやく少女の元にたどり着いて、相手の正体を探るように首をかしげながら、少女を見上げた。すすむの意図を察する気配がして言葉が投げかけられた。

（ボクのお名前は？ ）

胸に抱えた本に顎を乗せるようにして、すすむをのぞき込んで、彼女はそう言った。全く時間の概念の無い言葉で、言葉の最初から最後まで、一瞬のうちにすすむの頭の中に響いたのだ。

「ボク、すすむ」

すすむは名乗り、急いで付け加えた。

「あれっ、お姉ちゃんは喋らないの？ 」

すすむは自分の名前を口にしてみて、少女の言葉との違いに気づいたのである。すすむに語りかける少女は唇を動かさなかった。

（うふふ）

少女は心の中で笑った。その声が温かな感情を伴って、すすむ

の心の中に響いて来る。

(心の中でお話する方が、ずっと仲良しになれるでしょう)

「うん」

すすむは当り前の事のようにうなづいた。実際、すすむにとって全く不都合は無かったし、むしろ、この新しい遊びは彼の気に入った。

少女はバスケットを左の切株の腰掛けから右の方に移した。すすむに空いた腰掛けに座りなさいと導いたのがわかった。すすむには少女がそう話しかけたような感情が伝わってきたのである。すすむは少女の横に腰を掛けて彼女を見上げた。地面に付かない足をぶらぶらさせて考えた。

(この人は誰？。何か、普通と違う不思議な人)

すすむにとって、普通の大人と違うと言うことは信頼してよいということだ。

彼女は微笑んだままだ。すすむはちょっと体を乗り出して、少女の体越しにバスケットを見た。白い普通の籐製のバスケットに見えるが、何か秘密が隠されているのかもしれない。そう考えると、何か神秘的な光を放っているようだ。

すすむは少女が大事そうに抱え込んでいる本に目を移した。薄っぺらいが、その大きさはすすむの絵本の倍の大きさがある。何か不可思議な呪文でも書かれているのかもしれない。

少女が本を抱える右の指先が動いたかと思うと、細長い棒が現れた。

(鉛筆だ) と、すすむは思った。

今まで本の影に隠れていたものか、それとも一種の魔法で指先

に出現したものかよく分からない。

（きっと、魔法なんだ）と、すすむは見当をつけた。

少女は、すすむの疑問に答えるように、すすむの目の前でゆっくりと本を開いた。中は白い画用紙だ。紙の白さには光沢が無く、て柔らかな感じがする。その白い画面のまん中に、すすむの姿があるのだが、砂遊びをする姿は、まだ輪郭線のみで白い。

少女は、すすむのズボンを鉛筆で濃く薄く黒く塗り分け、髪の一部を強く塗ったかと思うと、指先でその黒さを押し広げて、ふんわりした幼児の髪の柔らかさを表現した。そうすると存在感が加わって、すすむが画用紙の中で生きているかのようにみえる。少女の指先は無機質な線に生命感を込めているような神秘性を感じさせた。

すすむの足元にはちゃんと砂山も描いてある。すすむは自分の作品が評価されたような気がして、嬉しくなって言った。

「この山には、トンネルもついているの」

すすむは画用紙の山を指でつついた。すすむの指が画用紙を撫でる音がある。少女は鉛筆の先を滑らせて、素早くトンネルを描き加えた。

（さあ、このトンネルは、何処に通じているの？）

少女の声が、すすむの頭に響いた。なにやら異質で興味深い。すすむは半分羨ましさを込めて、少女の顔を見上げた。少女の口元は少し開いてはいるが、全く動く気配はなく、ただ、微笑みを浮かべているだけだが、すすむの耳元で語りかけるように意図が伝わってくる。

(ねえ？ このトンネルは何が通るのかしら？ )

少女は、すすむの心に重ねて問うたが、やはり唇が動く気配はなかった。

「パンダさん」

すすむは思い付いたように言った。それから少し考えて付け足した。

「パンダさんが・・・・・、バスを運転してるの」

少女はバスを描いた。少し、すすむを見つめて、トンネルを通過って家に帰るバスを描いた。そして、運転手の帽子をかぶったパンダをその横に加えた。すすむは興奮気味に話を続けた。

「でもね、キリンは首が長すぎてバスには乗れないの。だからペンギンさんの運転する電車の中に寝てるの」

少女の鉛筆が描き出す線がトンネルの入り口から伸びて画用紙の下の端に届いた。少女はもう一本、同じ様に描き足した。これは電車の線路だ。すすむが考えた通り、2本の曲線には枕木が加わって、ちゃんとした線路になった。

少女の雰囲気が強まった。優しく暖かく、すすむを包み込む雰囲気。その雰囲気が、すすむの中の不安を満足感や期待に変えた。

すすむはスケッチブックから少女に視線を移して見上げた。少女は相変わらず微笑んでいたが、僅かに開いた口元がゆっくりと閉じ、すすむを映す目に、不思議な真剣な光が加わったかと思うと、すすむはそのまま春香の目の光の中にとけ込むように吸い込まれて行った。





ぽお————。

間延びした列車の汽笛が、すすむの耳に響いている。

耳を手で覆いたくなるほど賑やかな汽笛が薄れて消えると、客車は先頭車両からの震動が伝わってがくんと揺れて、すすむに期待感を抱かせる。

(列車が、動き出してどこかに連れて行ってくれる)

列車の震動は、まるでボールが弾むような揺れかたで、時々、すすむの体が宙に浮く。すすむと少女は客車の中で向かい合って座っている。

たぶん、運転席にはペンギンがいる。見たわけではないが、すすむはそう確信していた。彼の目の前に窮屈そうにしかめっ面をした麒麟の頭がある。麒麟の頭だけ。首が車両の中をのびて、体は客車の後ろにに在るらしい。

「ああ、頬が痒い」

麒麟はせつなそうに、そう言った。窮屈な列車の中で前足を伸ばして、頬を搔くことが出来ないのである。すすむは面白くなって尋ねた。

「ここ？」

すすむは麒麟の頬を指先で撫でるように搔いてやると、麒麟はしばらく黙って気持ち良さそうにすすむに身を任せていた。暖かい頬だが、柔らかな布地の内側にヌイグルミの詰め物の感触



がする。やがて落ち着いたのか、麒麟はのんびりした声で礼を言った。

「ありがとう」

赤い舌を出して唇を嘗めて、満足そうに鼻を鳴らした。純朴で平和な麒麟だ。

しかし、すぐに慌てた顔になり顔をしかめた。

「ちょっとすみません」

若い麒麟は、大きなくしゃみをした。少女の髪が勢いよくなびくほどのくしゃみである。線路の上で列車は勢いよく弾んだ。ペンギンがやってきた。これは運転手ではなくて車掌の方だ。職務に忠実な彼は異変の原因を見に来たが、麒麟を見ると納得したかのように黙って引き上げて行った。

すすむは麒麟のくしゃみに驚いて、しばらく麒麟の頭を見つめていた。少女は乱れた髪を元のように束ねている。

「すみません」

麒麟は詫びた。その言葉ののんびりとした感触と裏腹に、麒麟がひどくすまなそうな表情をしているのがおかしくて、すすむと少女は顔を見合わせて笑った。少女は麒麟に名乗った。

「私は、春香」

(はるかさんっていうんだ)

すすむは不思議な少女の名を知って、少し距離が縮まった。春香の挨拶に麒麟が答えた。

「失礼しました。ボクはテムといいます」

「ボクは、すすむ」

「何処から、おいでなの」

春香は、麒麟の頭に聞いた。

「プーの村から」

麒麟のテムは答え、続けて話を始めた。元来、おしゃべり好きの麒麟らしい。

「私、天気をみるのが仕事なんです。ご覧の通り、首が長いので雲の様子を見るのに都合がいいんです」

テムは自慢気である。彼は自慢げに目を細めて話を続けた。

「まあ、私の仲間には海辺の岬で燈台をやってる奴もいるんですが、あれは目が回ります。ランプをくわえて一晩中クルクル回すんです」

すすむと春香の表情をうかがいながら彼の話は続く。天気予報の仕事が軽く見られたのかと思ったらしい。

「いやいや、天気予報だって大変なんですよ。何しろ雨が降ったら他の人より早く濡れるし、この間なんか雷にやられましたしね。ね？ ほら、私の右の角の先が焦げているでしょう？ しばらく、体がびりびりしていたんです」

すすむの見たところ、角の先が少し茶色くなっているのがそれだろう。

「一生懸命仕事して、今度、休暇をもらったんです。今から故郷の村に帰るんです」

テムはうれしそうである。テムは列車の窓の外に目を移した。そこに住んでいる小鳥の姿までちゃんと見える林、ディフォルメされた木々で縁取られた丸いなだらかな山、力持ちのカバや純朴そうなライオンや働き者のペリカンが住んでいる村の景色が次々

と過ぎて行く。こうしている間にもテムのは故郷に近づいているのである。テムの心は踊っているのだ。この若い麒麟には故郷で待っている恋人でもいるに違いない。恋人は結婚式の準備にウェディングドレスを縫っているところだ。テムの穏やかな笑顔は、すすむそう言う想像力を湧き立たせる。

「ところで、あなたはどちらまで？」

テムはのんびりした口調ですすむに尋ねた。

「家に、帰るの」

すすむが家という言葉にお父さんとお母さんの存在が込められている。

すすむは素直に答えたが、すぐに、ずっと以前の家を思い出した。お父さんやお母さんの笑顔のあった頃の家だ。

すすむはお父さんの背中の中の暖かさを思い出した。

すすむはお母さんの両腕の柔らかさも思い出した。

(あっ)

春香が、しまったと自分の失敗を悔いる叫びを抑えるように、口元に手を当てた。

「あのね、家に帰るの」

すすむは繰り返した。

「すぐにボクんちに帰るの」

すすむの目に涙が浮かんだ。

「お父さんとお母さんのところへ帰るの」

すすむは叫ぶように繰り返した。

パン！！

手を打ち鳴らす音がして、すすむは目を開けた。春香がスケッチブックを勢いよく閉じた音だった。春香は二人の旅を終わらせたのである。

すすむの目の前の景色は、元の公園だ。すすむは木の切株に座っている。すすむと春香を包むのは冬の景色。冷たいコンクリートの山、水の出ていない噴水、風に揺れるブランコ。



春香は、すすむを引き寄せるように、すすむの肩に腕を回して感情を伝えた。

(ごめんなさい)

すすむは目元のにじんだ涙を手の指先で拭って、春香を見上げた。すすむの目を見ながら春香は繰り返した。

(本当に、ごめんなさい。悪いことを思い出させたわね)

北風の舞う空が赤い。

二人はしばらく黙ったまま夕日に染まっていたが、やがて、春香は鉛筆を筆箱に戻した。それから、蓋付きのバスケットを膝にのせて、ゆっくりとその蓋を開けた。不思議な少女はこの中に魔法の道具、知らない世界に旅立つ為の夢の道具を持っているかも知れない。

すすむは中をのぞき込んだが、期待は外れで首を傾げた。バスケットの中には小銭入れとハンカチの他、残念なことに、魔法の道具らしいものは見えなかった。春香は筆箱をバスケットにしまい込んだ。

すすむは察した。春香は帰り支度をしているのだ。すすむは不安そうに、彼女を見上げて必死に彼女との関係を繋ごうとした。

この人を失ってしまうのは寂しすぎる。

この人が独りぼっちなのも寂しすぎる。

「ねえ、キリンのテムさんはどうしたの？」

(うーん。いろいろな用事や事件が起きてなかなか故郷に帰れないの。それでも、テムの恋人はテムが帰ってくる日をじっと待ってるの。いつまでもね)

すすむは首を傾げた。お母さんに語り聞かせてもらう物語はハッピーエンドのものばかりだった。

その経験から言えば、テムは無事に故郷に帰り着いて短い休暇の間に恋人と結婚式を挙げ、明るい暮らしが待っているという結末が見えていたはずだ。

いつ帰るか分からない人生の伴侶を待ち続ける恋人の存在が、すすむの心に違和感を漂わせた。すすむが見上げた春香の顔と、孤独が癒せる日を待ち続けるテムの恋人の姿が重なった。

(この人は、他の大人とは絶対に違う)

そういう確信がある。すすむは本能的に、春香に自分と同じ孤独の香りを嗅ぎ取ったのである。春香は、敏感にすすむの気持ちを察して笑った。

(そんな寂しい顔をしないで。明日の夕方にまた、ここで。さあ、早くお帰りなさい)

心に直接響く言葉の中に、嘘や疑念を感じさせるものが全く無い。すすむは安心した。確かに地面まで赤く染まって地面に影が長く延びている。おばあちゃんと約束した帰宅の時間である。よい子でいるためには、おばあちゃんと約束は守らなければならないだろう。それに、早く帰ってこの新しい友達の事を報告しなくちゃと考えたのである。

すすむは木の切株の腰掛けから降りて、春香の正面でお辞儀をして言った。

「さようなら」

信頼感を感じさせるすすむの声が春香の耳に届き、何か期待感のこもった感情と共に、春香の言葉が、すすむの心に届いた。

(さようなら)

すすむは忙しい仕草で砂場まで走って、バケツとスコップの砂を払って、スコップはバケツの中に入れて左の手に下げた。それからもう一度、切株を振り返ると、まだ、春香はじっとそこにいた。春香もバスケットを片手に立っていて、片手をあげてすすむを見送っている。すすむも手を振って応えたと、また夕日に目をやって慌てて公園の入口へ走りだした。

早く帰って、おばあちゃんに新しい友達が出来たことを報告しなければならない。すすむは笑顔で駆け出した。

(忘れものよ)

すすむの頭の中に春香の声が響いた。すすむが振り返ると、春香はシーソーの所に立っていて、すすむのマフラーを拾い上げている。すすむはさっき自分が脱ぎ捨てたのを思いだした。春香はすすむの側までやってきて、すすむの傍らにしゃがみ込むと、やさしい手つきで、彼の首をマフラーで覆いながらすすむの頭の中に語りかけた。

(いい？ 私と会ったことは、誰にも話してはだめ。二人だけの秘密)

それから、バスケットをすこし覗んだかと思うと、その蓋を開けて中から大きなクッキーを3枚、すすむのために取り出した。春香はクッキーをティッシュに包んですすむに与えた。春香との

約束を守る報酬なのである。その自然な動作をすすむは見逃さなかった。

(さっきまで、こんなお菓子なんて入ってなかったはずだ)  
そう思ったのである。おねえちゃんはすすむの顔をのぞき込んで微笑んだだけだ。

そして、少し考えてから付け加えた。

(それから、私と会いたいときには、一人で来てね)

すすむは少し不思議に思ったが、クッキーをポケットに大切にしまい込みながら素直にうなづいた。友達を失うことを恐れたのである。しかし、残念でもある。すすむは振り返りながら、少しづつ公園を離れた。新しい友達を見失わないように。

春香もまた、初めて出会った幼児を好意的に見送った。すすむが公園の入り口を出て横断歩道を渡る辺りまで、ゆっくりと手を振っていた。幼児が視界から姿を消すと、バスケットまで戻って冷たく冷えた切り株の椅子に腰を下ろして物思いにふけた。

あの幼児から入り乱れて伝わってきた記憶や感情を整理したのである。すすむの体験や感情がわずかな間に彼女に流れ込んで来ていた。彼女が普通の人間と異なる能力の1つである。彼女はこの能力を呪いつつもその呪縛から逃れることが出来ずにいる。

目をつむってみると、春香の脳裏ではあの幼児の日常が自分で体験したかのように再現される。

すすむは、北向きの大きな窓に向かって、一人で膝を抱えて座っている。

二階の窓である。窓のアルミサッシが額縁になって、少し薄暗い部屋の中に冬の景色が浮き上がって見える。背景は隣のアパートののっぺりした壁で、その背景の左半分には木の枝があって、何枚かの葉っぱが枝に残って、北風にくるくる舞って揺れている。空間から切り取られた景色は、そういう変化に乏しい絵画である。

すすむは飽きもせず、その葉を見ている。時々、幼い手を頬に当てたり、少しお尻の位置をずらしたりするほか、彼の視線はいかにも不安定な葉っぱに釘付けである。

突然に、北風が窓をカタカタ鳴らして、すすむを威嚇した。すすむは思わず膝を強く抱いたが、それでも視線は葉っぱに釘付けにしたままだ。一枚、二枚、三枚、さらに幾枚かの葉がついに枝を離れた。葉は複雑に分岐してくるくる舞うつむじ風に乗って、すすむの視界から消えた。再び、つむじ風がすすむを威嚇して、最後の葉の1枚を枝から切り離した。すすむは急いで窓辺を離れることに決めた。

すすむは絵本を何冊か抱えて、部屋のまん中に移動した。ふと振り返ると、気まぐれな風はもう唸るのにも飽きてしまった。すすむは正座するように、腰を落としてお尻を畳につけた。すすむは疑り深く何度か肩ごしに視線をやって窓を観察した。もとより、しっかりしたアルミサッシの窓は、外と内を切り離している。



外の寂しい景色が風に乗ってすすむ入する気配はない。すすむはようやく安心して、胸に抱いた絵本を畳に下ろした。

全部で五冊。彼は目の前に絵本を広げた。飛行機の絵柄や小鳥の絵柄、竜やパンダの表紙、すすむと同じくらいの子供の絵柄。色々な絵柄がすすむの目の前に広がった。彼はその中からパンダの絵本を拾い上げた。それは、すすむが最後にお母さんと買物に行った時に、ねだって買って貰った物だ。すすむの一番のお気に入りだった。

すすむはうつ伏せに寝そべって、左の手で顎を支え、右手でぶ厚いページを何枚かめくって考えた。

「さっきは、ここまで読んだんだ」

まだ、文字なんか読めないなので、すすむは絵を読んだ。そうすると、文字はいかにも目障りだ。絵本の文字はお母さんの声を思い出させる。

すすむは小さな足のつまさきをブラブラさせた。何か、ひどく不安だ。すすむは絵本を忘れて、ごろりと仰向けになった。天井が高すぎる。すすむはまた起き上がって、膝こぞうを抱いた。目の前に窓が大きく広がっている。しかし、今度のすすむは部屋のまん中だ。

部屋の中ですすむは一人ぼっちだ。

「だめだめ、ここは広すぎる」

すすむは心の中でそう言った。彼は絵本を全部拾い上げると、さっきの葉っぱみたいに部屋の中をくるくる舞った。

そして、少し考えて、絵本を1冊づつ四方の壁や家具に立てかけながら1周した。部屋の中央に戻ると、彼は回りを見回して、



この思い付きがすっかり気に入った。

4冊の絵本は彼の忠実な家来だ。部屋の四方に派遣されて彼を守っているのだ。また、彼を中心に手を広げて遊びの輪を作っているようにも感じられる。すすむはもう一度窓を向いて残ったパンダの絵本を抱いたままお腹を突き出して威張ってみせた。

するとまた、北風がすすむを威嚇した。今度は木の細い枝先に窓を擦らせたのだ。すすむはちょっと後ずさりした。それから、ふと気付いたように自分の臆病さを恥いるように回りの家来を見回した。

こういった行為の1つ1つ全てが、ここ三週間ほどのすすむの遊びなのだった。彼はちょっとうつ向き気味に首を傾げて、手の平を頬に当てた。これは彼の癖だ。一つの遊びの終わりに、次の遊びを思い付くまで、この仕草で遊びの間をつなぐのである。

しかし、今度は次の遊びを考える必要はなかった。聞き慣れた足音が玄関から入って来る。どさりという鈍い音は買物袋を置く音で、ずっしりした重さを感じさせる。彼は耳を澄ませて物音を追った。足音が台所へ移動し、しばらく沈黙があったのは、おばあちゃんがほっと一息ついているからだ。それから食器が鳴る音がして、お皿とカップの音色の違いが聞き分けられた。電子レンジのタイマーの音。あれは、買ってきたホットケーキを温める音だ。

すすむは鼻をくんくんさせた。食欲をそそられたわけではなく、巣穴から出てきた野ねずみが危険を避けるために、臭いで情報を集めるのと同じだ。しかし、危険な香りはしない。ミルクの

匂い、バターとバニラの匂いが漂って来る。お父さんが、おばあちゃんに彼の好物がホットケーキだと教えたのかもしれない。

おばあちゃんの足音が台所から近づいて来て、ドアが開くと、ホットケーキとミルクを乗せたお盆を持ったおばあちゃんの姿が現れた。ホットケーキはこんがりと褐色に焼き上がっていて、鈍い光沢に柔らかく輝いている。ミルクは湯気が出るほどではないが、おばあちゃんがカップを持つ様子から温かいのだと分かる。

おばあちゃんはホットケーキのお皿とホットミルクのカップを、すすむの食欲をそそるように彼の目の前に置いてそっと言った。

「冷めないうちに食べなさい」

すすむは黙ったままだ。力を持たない野ネズミの本能で、何か物音がする間は巣穴の中でじっと身をひそめて危険が去るのを待つのがいい。おばあちゃんは空になったお盆に部屋の隅のプリンのお皿を乗せた。それはおばあちゃんが孫のために十時のオヤツとして持って来たものだが、孫が食べた様子はなく、その端がスプーンでつついた様に崩れているだけだ。部屋のまん中に置いたはずだが、部屋の端にあるのは、彼が遊びの邪魔になるのを嫌って移動させたに違いなかった。

「また、絵本を散らかしているのね」

おばあちゃんはようやく言葉を継いだ。大人の目から見ると、すすむの家来が部屋の四隅に散らかった絵本に見えるのだろう。

すすむは次の遊びを考える仕草で黙ったままだ。おばあちゃんは、彼の前で膝を曲げ、視線を彼と同じ高さにして、教師のよ

うな口調で言った。

「いい子にしていれば、きっとお母さんの病気もすぐに治って、すすむちゃんを迎えに来るからね」

すすむはもっと強く黙りこくった。

(それは何回も聞いたよ。数え切れないくらい)

すすむはそう考えたが、よい子でいるために口には出さなかった。

ただ、素直にうなづいただけ。

「うん」

拾い上げる絵本を一冊ずつ日数に代えて思った。

(もう、どれくらいになるのかな)

春香はここで目を開けた。公園の中に厚手のセーターを通して心の中まで冷え込むような風が吹き荒れている。

(お母さんが病気で、おばあちゃんちに預けられているのね)

春香はあの幼児の境遇をそう考えた。

日暮れが早い時期である。彼女を取り巻く景色は色を失い、遠目に見える窓の明かりやライトで輝く看板が存在を主張する新たな景色に移り変わった。彼女は景色の中に消えて存在感を失い、それが彼女にとって心地よい。

彼女はバスケットの持ち手を右肘にかけ、スケッチブックを抱えて立ち上がり、重い足取りを自宅に向けた。自分が普通の人間とは違うのに気付いたのは、ちょうどあの幼児のような年頃だった。彼女が望んだわけでもなく、周囲の人々の感情が流れ込ん

でくる。その彼女の能力が、周囲の人々を不快がらせ、不安をかき立てるのだが、心の奥底にそんな不安を否定するが意識ある。人は彼女を経由して彼女の口から語られる己の意識と向きあうことが出来ない。隠しているものを見透かされるとまどいと、秘密を暴かれるのではないかという不安が、彼女に対する得体の知れない拒否感にも盛り上がっている。

すすむが帰宅してみると、玄関におじいちゃんの靴がそろえて置いてある。すすむはおじいちゃんが自分よりさきに帰宅したことを知った。

すすむが部屋に入ると、おじいちゃんとおばあちゃんが何かを話している。おじいちゃんはお父さんの所へ行ってきたらしい。大人の話の端々から、すすむはそう推測した。しかし、おじいちゃんもおばあちゃんも、すすむを見つけた途端、笑顔を作って話題を変えた。

「なあ、すすむ。すすむは、お父さんと、お母さんとどっちが好きだ？」

すすむはお父さんとお母さんのどちらかを選べという質問は大嫌いだ。こんなことを聴くおじいちゃんも嫌いだ。すすむは口元に力を込めておじいちゃんをじっと睨んで抵抗し、黙りこくった。

すすむが機嫌を損ねたのに気づいて、おじいちゃんは話題を変えた。しかし、すすむの機嫌は、食事のうちに直って、テレビを見る頃には普段のすすむに戻っていた。そして、すぐに遊びの疲れも手伝って、すすむはすやすや気持ちの良い寝息を立て始めた。

おじいちゃんは、すすむを抱き上げて寝床まで運んで、孫が起きないようにそっと横たえた。

おばあちゃんは、すすむの服を脱がせて、パジャマを着せた。すすむは意味の無い寝ぼけ声を上げながら、素直にパジャマを着

せられた。おばあちゃんは孫に布団をかけて、すすむの少し微笑んだ寝顔を不敏そうに撫でた。

そしてこの二人は、孫が今晚、いつもより少しだけ元気なのを喜んだが、子供の気まぐれだろうと思い込んだ。

ふと、おばあちゃんは部屋の隅に脱ぎ捨てられていたダウンジャケットに気付いて、ハンガーに掛けた。ポケットから何やらはみ出している。ティッシュにくるんだクッキーが三枚。三枚はポケットの中で割れている。そのクッキーは作り慣れた人の手による物らしいが、手作りのいびつさがある。自分の与えたものではないことは明白だ。彼女は割れたクッキーをごみ箱に処分しようとしたが、何故か、ふと思いとどまって、孫の枕元に置いた。今はこのままそっとしておく方がよい。おばあちゃんは、電灯のスイッチに手を掛けたおじいちゃんに促されて部屋を出た。すすむとクッキーが豆電球の淡い光に照らされて部屋の中に残された。

すすむは自分の居場所が他にないことを知っている。



同じ時、春香は闇の中を彷徨って、帰宅までの時間を引き延ばした。やがて闇の中に自宅が浮かび上がってきた。二階の灯りは、女の息子の在宅を示唆している。居間の灯りはテレビを観る女に違いなく、街路灯で照らされる車庫の白のセダンは父親が帰宅して居間に居ることを臭わせている。一軒の家に住みながら互いに家族とは言えない人々である。

春香は黙って玄関をくぐり、居間に足を向けた。二階に上がるには、父親と女が居る居間を通らざるを得ないのである。居間からは下卑た恋愛ドラマのセリフが流れてくる。テレビを観る女が居るということである。

春香の予想通り、テレビの前のソファには画面に食い入るように女がおり、濃い煙草の煙が漂っていた。その右の安楽椅子に父親の姿がある。

「春香、食事は？」

女がテレビから彼女に視線を移して言った。母親を演じるためにそう言った。

「いない」

春香は意図して無関心を装って返事をした。

「春香、こんなに遅くまでどこに居たんだ！」

そう怒ったのは、娘思いの優しい姿を装う父親である。

「別に・・・」

春香は感情を出さずにそう言い、父親にちらりと冷たい視線を送った。父親は春香の意図を察するように新聞に視線を戻した

。この男は春香の母親が活着ている頃から外に女を作った。テレビの前にいる女はそんな一人に過ぎない。娘は何やら勘が良く心の中を読むように事実を指摘する。春香の機嫌を損なえば、心の底に隠しているものがさらけ出されてしまうかもしれないと危惧するのである。そして、そんな危惧は春香の心に流れ込んで春香の憎悪を刺激するという悪循環である。

「なんか食うもん無い？」

重量感のある足音が階段を下ってきた。女の息子で、春香より少し年長になる。続柄で言えば兄という存在である。春香は階段の下で身を避けた。この男とは触れたくはない。

春香は男が下りきるのを待って、階段を登った。

「なんだ？ 薄気味悪い奴だな」

若い男は嫌悪感を隠そうともせずと言った。むろん階段を登る春香に聞こえることも承知である。口で言わずとも男の感情は春香に伝わってきている。

春香は男の金遣いの荒さを指摘する時に、いかがわしい女性関係とを関係づけて指摘したことがある。その日にちや相手の女の癖まで、男から流れてきた感情と共に指摘した。男が春香に薄気味悪さを感じるのはそのせいである。

笑い声を背にしつつ、春香は自分の部屋に鍵をかけて閉じこもった。一見すれば仲の良い親子の笑い声が今に響く光景だが、春香の心に伝わるものは、得体の知れない存在が目に見える範囲から消えたという安堵感で一致している。

荷物を投げ出すようにベッドの上に置き、上着を脱いでハンガーに掛けた。椅子にかけると、目の前の机の上にはの生母と春香

の写真がある。

春香が記憶する母は、人を受け入れるという点で非常に楽天的な一面を持っていた。

(お母さんみたいな人になりたい)

幼い頃の春香の願いである。彼女を苦しめるのはそんな生真面目さである。憎むということに徹して関わりを持たば、この家の片隅に彼女の居場所が出来るに違いない。

春香はため息をついて、高校の時間割の月曜日の欄を指で辿った。日曜日は終わり、学校は明日から新しい週に入る。テキストとノートを選んでカバンにしまい込んだ。几帳面で真面目な生徒。彼女は表面上はそういう評価を得ている。ただ、彼女の記憶に蘇る学校は、彼女を奇異な目で見る同級生たちの姿である。

パジャマに着替えて、鏡の前で髪を梳きながら、ベッドの上に投げ出したスケッチブックが視線に入った。ぱらぱらとページをめくると、あの幼児の姿があり、砂場で尻餅をついた姿が微笑ましい記憶と共に春香に実在感をもたらした。彼女は目をつむってスケッチブックを閉じ、枕元に置いた。これで楽しい夢を見ることが出来るかも知れない。そんなおまじないである。彼女はそう言う子供っぽさを持っていた。

「おやすみなさい」

あの幼児のおかげか、今日は素直にそう声に出して呟くことができた。そして、枕元の灯を落とした。目が覚めれば全く新たな世界が開けているのではないかとの期待を込めて。

すすむは目を覚まして、くすりと笑った。ところが、目を開けてみると、自分がなぜ笑ったのか分からない。ただ、心を満たす暖かさは、楽しい夢の残滓に違いない。夢からさめる恐さに、すすむは枕に顔を押し当てた。目をつむると、お父さんやお母さんの思い出がいくつも浮かんだが、それらは全て、悲しい思い出に変わって消えた。そのお父さんやお母さんの記憶に、ヌイグルミのキリンが入り込んで、すすむに何かを言った。キリンが何を話したのかを考えていると、すすむに微笑みかける少女の面影が浮かんだ。大きなスケッチブックを抱えた少女の面影だが、微笑みかけているのは分かるのに、彼女の顔がよく見えない。すすむは楽しい夢がこの少女によるものに違いないと納得して目を開けた。夢が悲しい思い出に変わってしまう前に夢を守ったのである。

目を開けると、枕元ではちゃんと絵本が彼を守っていて、その横にはズボンとセーターがたたんで置いてある。その横にティッシュに乗せてクッキーが3枚分置いてある。すすむは不思議な春香の事を思い出した。クッキーは幾つかの欠片に割れてしまっている。

すすむはうつ伏せに枕を抱いて、獲物を狙う猫みたいにお尻を上げたまま、大人が見れば驚くほど長い時間、クッキーの存在を確認するのに時間を費やした。それから少し納得したように手を伸ばしてクッキーの破片を拾うと、布団の中でその匂いや味をを試した。クッキーの匂いと味だ。クッキーは割れてはいるが、

かえって、すすむの口の大きさにちょうど良い。

このクッキーは昨日の春香に貰ったクッキーと同じものに違いなかった。ポケットに入れたはずのクッキーが枕元にあるのは、一種の魔法に違いない。すすむは残ったかけらを大事にティッシュに包み込み、枕元のズボンのポケットに入れた。春香の秘密を大人の眼から隠したつもりだ。

すすむは昨日と同じように木の枝や風を相手に時間を過ごした。でも、北風には昨日までのような怖さはなかった。

しかし、今日は時間の長さが違う。すすむは何度も台所やおばあちゃんの部屋や居間に顔をのぞかせて時間を潰した。そして窓辺の部屋に戻る度に絵本の横を見たのだがクッキーは間違いなくそこにあって、夢のように消える気配はなかった。おばあちゃんすすむの行動範囲がいつもより広いことに気付いたが、孫の心に触れることを控えた。

すすむはようやく3時のおやつまで、外出予定の時間まで、じっと待った。



いつもと変わらない冬の風景。すすむは信号が青に変わるのを待ちながら、バケツの中で楽しくスコップの音を立てた。

すすむは今日もおばあちゃんの手をふり解くようにして出てきたのだった。横断歩道の向こうの公園には人の気配が無いようだ。すすむは敢えて砂遊びのことを考えた。春香が来るに違いないと期待してしまうことが恐いのである。

すすむは不安に胸をドキドキさせた。

その時に、春香がすすむの心にささやいた。

(あわてないで、ゆっくり渡りなさい)

春香の姿は見えないが、すすむを見守るように、すすむの頭にそんな声が優しい感情と共に響いたのだった。

すすむは道を通りかかったおばさんがびっくりするほど大きな声で返事をした。

「うんっ」

公園の入口で、すすむはちょっと躊躇して立ち止まった。公園に二つある出入り口のもう一つ、南東側の入り口近くの生け垣に沿って並んだ切り株の椅子。その端に少女の姿がある。

すすむは首をかしげるポーズをして、じっと女の人を見た。あの人とは昨日会ったばかりだと考えたのである。そう考えると、昨日の事も何か夢のようにも思える。

髪は柔らかなおさげに編んでいて肩から前に垂らしている。白のセーターの上に茶色のコートを羽織っていて、濃い茶色のストラックスに黒の靴。髪型や服装は昨日と違うが、大きなスケッチブ



ックを抱え、バスケットを横に置いているのは、彼女が昨日と同じ人だという証拠だ。髪を編んでいるのはきっと昨日のキリンのテムのくしゃみに懲りたせいだ。

すすむは彼女に駆け寄った。すすむは立ち止まってお辞儀をした。

(こんにちは)

すすむは心の中でそう挨拶をした。

(こんにちは)

春香はすすむの頭の中に返事を返した。

すすむは自分の魔法が通じたのだと考えた。もう、この女の人  
は昨日の人に間違いはない。昨日の事は夢ではなかったに違  
ない。嬉しさがわき上がってきたのだが、その嬉しさに違和感  
がある。感じるものは、すすむの心に生じた嬉しさだけではない。  
すすむが彼女のことを忘れないで居た春香の嬉しさが、すすむの  
心に混じっていてわき上がるのである。

すすむはよじ登るようにして切株に腰をおろした。コンクリ  
ートの木の切株は、じんわりと冷たさが伝わってくる。すすむはそ  
の冷たさに気を取られてお尻を浮かせたが、すぐに春香がスケッ  
チブックを開いたのに気づいて、視線を移した。

最初のページには昨日の電車。春香はすぐにもう一枚ペー  
ジを繰って、真っ白なページに変えた。ページをめくる指先が滑ら  
かに動いてたので、魔法で絵が消えたようにも感じられる。

春香はスケッチブックを膝に置いて、バスケットを手に取った  
。

(このバスケットに秘密が……) と、すすむは思った。

きっと、何かの魔法の秘密が隠れているに違いないのだった。春香はソフトビニール製の筆箱を出した。手品師が帽子から兎を出す手つきだ。筆箱には間の抜けた犬の絵が付いている。すすむは筆箱を受け取って眺め回し、手の中で撫で回して感触を確かめ、中を覗いた。長さの違う鉛筆が3本と消しゴムが入っている。それだけだ。

春香は今度は、ハンカチを鳩に変える手つきで、平べったい箱を出した。中は赤や青や黄色やいろいろな色の鉛筆が8本。その中には使い古されて、短くなった物もあって、いかにも魔法使いの道具のようだ。

春香がバスケットから出したのはそれだけだ。春香はバスケットの蓋を閉じて、右の切株に乗せた。すすむにはまだ魔法の秘密が分からない。春香はすすむから色鉛筆を返してもらいながら言った。

(すすむくん。魔法はね、手品みたいにタネを捜してはダメよ。起きたことを自分の中に受け入れるの)

春香はそう言ってじっとすすむの顔を見た。すすむも春香を見上げた。春香はじっと黙っていた。

(春香さんは慎重になっているんだ、)

すすむはそう思った。なぜかそんな風に感じたのだ。

昨日みたいな失敗をしないように。

(今日は、すすむくんが、お話をしてよ)

春香は唇を動かさずに、すすむの心に語りかけた。

すすむは、春香の乞うまま、色々な話をした。

森の一軒家に住むパンダの事、

飛行機や電車の事、

枝に残る葉っぱと風の事、

絵本の話や、窓から見えた景色のこと、テレビでみたこと、そんな話題を、すすむは何の脈絡もなく話した。封じられていたものが、彼の口から溢れ出すようだ。

すすむは脚をぶらぶらさせて天を仰ぎながら色々な記憶を手繰った。どんな順序を辿ろうと、記憶はお父さんやお母さんと一緒に過ごした家のこと、そのたった一つに行き着いてしまう。

春香はそれに気付いて、すすむの注意を逸らした。

(さあ、)

すすむの眼の前で、春香は鉛筆を動かし始めた。鉛筆を軽くつまむように支えてゆっくりと、指揮者の指使いだ。今日の春香は、メロディを描き出した。すすむの心の中にメロディが沸き上がるようだ。暖かでのんびりした眠気を誘うメロディだ。

眼をつむったすすむに、春香がすすむと額をくっつける様にして言った。

(ねっ？ 春の音よ。春が流れ始める音が聞こえるわ)

すすむは目をつむって、わずかに残った雪を溶かして流れる小川や、弾け出した木の芽の香りを運ぶ風の音に身を任せ、そんな音や香りの中にとけ込んで行く感覚を楽しんだ。

すると、すすむは小さな子うさぎだった。



すすむうさぎは探検の最中だった。暖かな日差しに、家の中にじっとしていることに耐え切れなかった。目を覚ますとすぐに家を飛び出して、村と森を抜けて来たのである。

今日は、ちょっと遠方に、新しいしい冒険を求めて。

ここは、すすむにとっては未知の土地だった。

すすむが周りを見回すと、既に雪は消え去り、辺り一面、春の景色が広がっている。白一色の静止した景色に変わって、赤や黄色や紫色の花の色彩が、すすむの目を射て、甘い蜜の香りが鼻をくすぐり、長い耳一杯にミツバチの賑やかな羽音が響いて、胸がわくわくとして跳ね回りたくなるほど楽しい。

すすむは、目の前の丸木橋を2跳びで駆け抜けたかと思うと、3跳び目はもっと足に力を込めて飛び跳ねて、そのまま、心地よく全身の力を抜いて落ちるのに身を任せて前方に飛び込んだ。川の向こうに新しく見つけた草原である。

ひんやりした心地よい朝露が細かく舞って、すすむの体を包んだ。目を開けると、朝露の最後の1しずくが草の葉っぱの先に重そうにぶら下がって、すすむの鼻先にある。すすむは鼻先をひくひく動かして香りを嗅いだ。

土の香り、

葉っぱの香り、

蜜の香り、

いろんな香りが鼻先から喉を通過して口の奥に入ってきて、すすむはその香りの1つ1つを味わった。そして最後に滴を鼻先に受

けて身震いをするほどに大きなくしゃみをした。何か全身がわくわくするような期待感に満ちている。

後ろ足で立ち上がると、すぐ先に花畑が見える。レンゲ草の畑。柔らかな日の光を無数の赤い花が受け止めて、綿を小さく千切って敷き詰めたような柔らかさを感じさせた。すすむは草むらから跳ねて畑まで飛び込んだ。

花の赤い色が、すすむの白い体に染まりそうだ。すすむは花の1つをかじってみた。花の香りが口の中に広がる。花びらの根元の蜜の玉が弾けて、小さな甘い味がする。

空を見上げると、青い空に丸い雲が3つ浮かんでいる。その横にちゃんと目や鼻や口がついた太陽がいて、すすむに微笑みかけている。すすむは暖かな希望に満ちた興奮に包まれて、花畑を跳ね回った。すすむが跳ね回るたびに、花や葉っぱが飛び散って空に舞った。

青い空、赤い花びらや小さな緑の葉を背景に真っ白なすすむが躍動した。跳ね回るのに疲れると、全身の妙なむずがゆさを振り払うように大きな身震いをした。

大きな後ろ足で耳の後ろを搔くと、耳が後ろに折れて、誰かの足音を捕らえた。

「こらっ！」

怒鳴る声に驚いて振り向くと、黒くて大きなクマである。

背の高さはすすむの3倍くらい、腕の太さだけでも、すすむの体ぐらいはありそうだ。しかも、黒くて大きな体の回りに、蜜蜂が何匹もぶんぶん飛び回っているのがいっそう恐ろしい。

このクマは、すすむに悪意を抱いているに違いなかった。すす



むはすっかりそう決め込んだ。すすむは大急ぎで逃げだした。足の早さは兎のすすむの方がずっと早いのだ。

「待ちなさい」

悪いクマは、すすむを呼んだが、すすむはこんなクマに喰い殺されるのはまっぴらだ。

すすむは慌てて家まで駆けて、ドアから家に飛び込んで背中ドアを閉じた。テーブルの前に朝食の皿を並べる春香うさぎがいて、暖炉ではじゃがいもと人参のシチューがことこと音を立てて煮えている。春香うさぎは、柔らかかなパンを盛りつけた籠と、甘い蜂蜜がたっぷり入ったポットをテーブルに置いた。

「さあ、朝ご飯にしましょう」

春香うさぎは深皿に熱々のシチューをよそって、すすむに手渡した。食欲をそそる香りのシチューをこぼさないように注意深くテーブルまで運んで、もう一皿、同じ事を繰り返した。春香うさぎのぶんと自分の分。家族でテーブルで向かい合って朝食を取ると言うことが、すすむには嬉しい。

すすむはここのところ、朝食の席で早朝の探検の成果を春香に報告するのが日課だった。すすむは川の向こうに草むらを見つけたこと、レンゲの花畑を見つけたことなどを話した。

春香うさぎはいちいちうなづきながら微笑んで子ウサギの話を聞いていたが、すすむがクマに会った話をすると

「まあ、クリックさんの花畑を荒したのね」

春香うさぎは、すすむを非難する口調で言葉を続けた。

「クリックさんはね、お花畑で蜜を採るのが仕事なの。あなたは

その花畑を荒したのよ」

「違う、違うよ。あの悪いクマは、ボクを虐めようとしたんだ。大きな口を開いてボクをぼりぼり食べようとしたんだ」

すすむはクリックさんが歯をむき出す真似をしてそう主張したが、春香はすすむの鼻づらを指でつついて命じた。

「いいこと。今度クリックさんに会ったら、ちゃんと謝っておくのよ」

すすむは不満だ。

それから何度か、すすむは探検の途中、クリックさんを見かけることがある。すすむの長い耳がクリックさんの足音を遠くから聞きつけるので、すすむが先にクリックさんに気付いて、こっそりクリックさんの様子を覗いたが、遠距離から覗き見るだけで近寄ろうとはしなかった。

あの太い腕で叩かれたら、すすむなんかいっぺんに死んでしまう。あの太い足でふんづけられたら、すすむなんかぺっちゃんこだ。それにあの大きな口なら、すすむなんか一口でぼりぼり骨までかじられる。

クリックは、すすむを見かけるたびに彼を呼んだが、すすむが寄ってこないとがっかりしたポーズをした。少し悲しそうにも見えた。でも、すすむはそんな手には乗らない。あれは、きっと、すすむを騙して捕まえようとしているに違いない。

ある日のこと、すすむはいつもより遠方まで探検した。彼の大きな耳は水音を捉えたのだ。彼はその音に引かれて森の奥まで入った。彼はそこで水音の正体を見つけた。大きな滝だった。

(ボクが最初の発見者かもしれない)

すすむは嬉しくなった。

春香に報告しようと考えたすすむは、日が落ちかかっているのに気づいた。森の日暮れは早い。すぐに、すすむの回りは真っ暗になってしまった。彼は道を見失い、木々の間に方角も失った。時々、木立に頭をぶつけて、すすむはなきべそをかいてあちこち跳ね回った。



ようやく、すすむは明かりを見つけた。誰かの手の下で揺れるランプの光だ。すすむは泣きたいくらいうれしくなってランプの光に駆けていった。そして、勢いよくランプの持ち主に飛びついた。ランプの持ち主は、太い右腕で、すすむを抱き上げると、もう一方の手で、ランプの明かりをかざして、迷子の子うさぎの顔を確認した。すすむは両方の長い耳が、ぴんと空を向くほどにたてて驚いた。

いま、すすむがいる場所、クリックの胸である。クリックもなきべそをかいて垂れ下がっていた子うさぎの耳が急に目の前に林立したのに驚いて、小さな目を倍の大きさにした。しかし、すぐに元の優しい目をして

「道に迷ったな……」

クリックは無言を言わずに、すすむを肩の上に乗せた。すすむは恐怖に凍り付いたままだ。クリックは彼の性格を表すように

のんびりと言った。

「すまないな。初めて会ったときには驚かしてしまったな」

クリックを家に迎えた春香は、彼に熱いお茶を出した。すすむは、おいしそうにお茶をすすめるクリックを眺めていた。黒くて大きな背中だ。その背中から、しっとりやわらくて暖かい雰囲気<sup>ニホヒ</sup>が伝わってきた。すすむはその雰囲気<sup>ニホヒ</sup>をしばらく味わっていた。やっぱり、悪いことをしたのかもしれない。

突然に、すすむは黙ってクリックの前に行くと、ぴよこんと1つお辞儀をした。お詫びとお礼のお辞儀だ。そのすすむの頭にクリックの手が伸びてきた。

(太くて大きなクマさんの手、でも、とっても温かなクマさんの手)

すすむはクリックに頭を撫でてもらってそう思った。心の底から温かい気持ち<sup>ニホヒ</sup>がわいてきた。暖炉でぱちぱち薪が燃えている。子ウサギは暖かな家の中でクリックと春香の笑顔に包まれた。

パーン！

春香が音をさせてスケッチブックを閉じたので、すすむは目を開けた。

(今日は面白かったね)

春香はすすむの顔をのぞき込んでそう言った。

「うん」

すすむもうなづいたが、次の瞬間に、はっとしたのは、バスケットを手にする春香の横顔にふと寂し気な物を感じたからである。

でも、もう一度、すすむの方を向いた春香は泣いてはいなかった。

春香は少し戸惑う様子を見せた後、

(よく見ていて……)

春香はそう言って目をつむり、意識を集中させた。集中した意識がバスケットに乗せた両の手の平からバスケットの中に注がれているように見える。

やがて、春香は目を開けて、にっこり微笑みながら白い包みを出して、すすむに渡した。包みを開けるとクッキーが5つ。今日のはレーズンが入ったクッキーだが、クッキーが出現した状況は昨日と同じだ。さっき確認した時にはこんな物が入っていなかったはずだ。

春香は、すすむの様子を注意深く覗いた。小首を傾げて不思議

そうだが、目の前の状況を疑ったり、不信感を抱くことなく素直に情景を受け居ているように見える。

春香はすすむの顔を見て笑った。すすむがにっこり素直な笑顔につられたのである。

(ああ、考えちゃダメなんだ。そのまま受け入れなきゃ)

すすむはそう考えて、ただ一言、お礼を言った

「ありがとう」

春香はその言葉に微笑んだ。すすむの素直な笑顔に心が癒されているのである。

クッキーが5つ、すすむの口の中で溶けて無くなった。春香は昨日みたいに帰り仕度を始めている。すすむはしょんぼりして春香の肘を引っ張った。まだしばらく遊びたいという意志表示だ。春香は笑いながら、昨日と同じ事を言った。

(さあ、家族の人が心配するから、お帰りなさい。明日の夕方、また2人だけで、ここでね)

突然に地面の砂を巻き上げて風が吹いたので、春香はコートのエリを立て、すすむのマフラーを巻き直した。

そして、すすむの顔を見つめると全てを察したように、昨日と同じに付け加えた。

(ありがとう、黙っていてくれたのね。でも、これからも私の事は秘密よ)

なぜ、秘密なのか、すすむにはよく分からない。でも、それが春香と友達でいるための条件らしい。すすむは公園の入口まで春香に手を引かれて導かれながら、そう考えてうなづいた。

すすむを見送る春香は胸に手を当てた。北風に溶けこんで散り



散りに吹き流れていきそうだった心に、温かな存在感が芽生えていて、今の彼女は、足でしっかり大地に立っている。

この日、彼女は新たに知ったことがある。すすむから流れ込んできた記憶である。彼女はその記憶を辿った。

すすむにとって、最初の兆候は、お母さんにパンダの絵本を買って貰った少し後の事だ。すすむは寝床の中ですすり泣きながら、お父さんとお母さんが怒鳴り合うのを聞いたのだ。

あくる日の朝から、お父さんもお母さんも笑わなかった。すすむも色々試してみたのだ。幼い頭で考えた、気の利いた冗談も言った、身の回りで起こったおもしろいことを拾い集めて話もした。

隣の伸ちゃんがおかしな格好で転んだ話。

門の前におかしな顔の犬がいたこと。

そんな話の1つ1つを父母は以前なら腹を抱えて笑ったり、真剣に聞いてくれたに違いないのだ。

お父さんは居間で新聞を読むだけだ。お母さんは自分の部屋に引っ込んでアイロンがけや趣味の刺繍をするだけだ。

お父さんの側に行くと、すすむの日常の事や友達の事を聞いたりしたが、その言葉は虚ろで、何度も同じ質問を繰り返した。

お母さんの部屋に行くと、以前と同じに絵本を読んでもくれたが、突然に意味もなく話を中断して、当たり前のことを聞いた。

「すすむちゃんはお母さんのこと、好きよね？」

そして、一人ふさぎ込んでしまうのだった。

すすむは一つ知った。この家には子供と大人がいるのだ。子供はすすむで、大人はお父さんとお母さんだ。子供は大人の世界には入って行けない。

すすむは二つ目の変化に気付いた。お父さんやお母さんに、子

供部屋に追い払われた後には必ず、お父さんとお母さんが争う不安な音が響くのである。彼はそんな音の一つ一つを布団の裾を握りしめたり、部屋の暗闇の中で意味もなく立ち尽くしたりして聞いた。

そのあと、怒鳴り合う声や、お母さんの泣き声や、食器が床で割れる音が何日か続いたが、すすむはそれを数えることを止めてしまった。

そんなある夜、すすむは仰向けに布団を被ったまま不安な物音が治まったのに気付いた。何か不安な感じがする、そんな静けさだ。

すすむは耳だけを澄ませて次の物音を待った。神経を耳に集中させて、肌で危険な雰囲気を感じ取る子ネズミのよう。

しばらくして子供部屋の戸が開く音がしたので、すすむは布団の中で体を縮めた。

人の気配がした。布団の上から優しくすすむを撫でる手つきから、お母さんだと分かる。すすむはじっと唇を噛みしめていたが、自分でも知らない内にすすり泣いていたのかも知れなかった。お母さんは布団の上からすすむを抱いていたが、やがてそっとささやくように言った。

「すすむちゃん、ゴメンね」

お母さんの足音が子ども部屋から遠ざかり、そして、玄関のドアが開閉する音がして、お母さんの足音が外に小さく消えた。その時のすすむの記憶は、そこまでだ。

あくる朝、すすむが台所に起き出すと、お母さんがいなかった。ただ、お父さんが台所のテーブルの前に惚けたように座って

いる。

すすむはお母さんの部屋に行って、お父さんの部屋に行って、トイレのドアもロックして、台所に戻ってお父さんをそっと見上げた。お父さんは、彼に気付いたように瞬きして、やがて、すすむの顔をのぞき込んで、ぼそっと聞いた。

「ちょっと、おじいちゃんちに行くか？」

すすむは黙ったまま、お父さんの傍らに立っていた。お父さんが長い電話をしているときに、彼はパンダの絵本を抱えたまま、お父さんを見上げて、電話の相手はおじいちゃんだろうと考えていた。

その日の内に、すすむは一番いい服を着て、お気に入りの玩具を幾つかと、絵本を持っておじいちゃんちにやってきた。おばあちゃんは彼にお母さんが病気になったこと、遠い病院に入院したこと、お父さんは仕事が忙しいこと、お母さんの病気も彼がよい子にしていればすぐに治って帰って来るかもしれないこと等を話してくれた。

おじいちゃんはただ、すすむに玩具を買ってやろうと約束した。すすむは黙って絵本を読むふりをしながら、おばあちゃんの話やおじいちゃんの約束を聞いた。

それから、お父さんは二回、すすむを訪ねてきた。最初、部屋の中で話をしたが、笑っている割に元気がなかった。二度目は手をつないで近所の公園を散歩したが、すすむの手を曳くお父さんの手に力がなかった。

大人は気付いていないのだろうが、すすむはそういう些細な出

来事から全てを察していた。

お父さんはすすむを見る度に、口癖のように仕事が忙しいのだと言った。そして、何もかもお父さんが悪いのだと言ったが、お母さんのことは何も言わなかった。

だから・・・・・、

すすむもお父さんには何も聞かなかった。

すすむはそのままおじいちゃんちに捨てられた。

春香はため息をついた。ため息の理由はいくつもある。その一つは、自分の単純な勘違いに付いてである。あの子が寂しそうにしているのは、お母さんが病気だということではなかった。あの子のお父さんとお母さんの仲が悪くて、家族が崩れてバラバラになってしまったと言うことだ。そして、あの子が孤独感を深めているのは、周囲の人々が事実を隠していることだろう。多感な幼児は事実気付いている。周囲の大人が事実を隠して自分を仲間はずれにしていることも知っている。

春香はふと思った。この世界で彼女の居場所を失わせる能力が、すすむとの関係においてのみ、存在価値を持っている。

秘密。

秘密。

2人だけの秘密が、すすむの中で嬉しく膨れ上がって、口の中から出てしまいそうだ。

公園前の歩道で2人は手を振って分かれた。春香は歩道沿いに南の方へ、すすむは道路を渡ってアパートへ。すすむは1つ考えた。春香は南の方から来ているのかなと。

すすむがアパートのドアを開けると、おばあちゃんは、スコップとバケツの音で孫が帰宅したと察して言った。

「帰ったら、手を洗いなさい」

おばあちゃんのいる台所から湯気が流れてきて、すすむの鼻を刺激した。

すすむはちゃんと石鹸を使った。指の先まで洗って、水道の蛇口を閉じると、おばあちゃんがタオルを持って立っていて、孫の顔を拭いた。頬と鼻の頭に石鹸の泡が残っていたのだ。すすむはそのタオルの端で手を乾かした。顔を拭いてもらうすすむの顔は満足そうだ、不安な感じが減って安心したような様子もある。おばあちゃんはこの孫の顔を見てそう感じた。

すすむはテーブルの上を見てから、おばあちゃんの顔に視線を移した。食器が一組足りないのに気づいたのである。おばあちゃんはすすむを椅子の上に抱き上げて言った。

「今晚は、おじいちゃんは遅くなるのよ」

すすむはおばあちゃんと2人きりの食事をした。本当はおじ



いちゃんにも話したかったのだが、すすむは食事の1口毎に箸を休めて、今日の探検のことをポツリポツリと話した。

小川のこと、花畑のこと、クマのクリックさんのこと。

おばあちゃんは、ただ驚いたように、孫の話を聞いている。この家に捨てられる様に連れてこられてから、すすむが自分から話をするのは初めてだ。

2人の食事が終わって、おばあちゃんがすすむの口元に付いたケチャップを拭っていると、玄関に足音。おじいちゃんの足音だ。

すすむはおじいちゃんにも話をしようと玄関をのぞいた。

ちょっと疲れた感じのおじいちゃん。

何かうまく行かなかった。そういう感じだ。手に下げた紙袋をおばあちゃんに渡すと、中からすすむの着替えのシャツが何枚か出てきたのは、おじいちゃんがお父さんの所へ行ってきた証拠だ。

おじいちゃんはすすむの頭を撫でたが、すぐに、寢室を指さした。

「さあ、もう遅いから眠りなさい」

「いい子にしていたら、お母さんもきっとすぐに退院できるからね」

すすむは素直に寢床に歩いた。お父さんと同じだ、これから、おじいちゃんとおばあちゃんは、お父さんとお母さんの事を話し

合うのだ。大人同士の話し合いだ。子供は入れないのだ。そして、その内容は、すすむにとって好ましい物ではない。

「不幸」という言葉を使うなら、すすむにとっての不幸は、お母さんが入院しているわけではないことを知っていることだ。

すすむは冷たい寝床に入って、枕を抱きしめた。

(うそつき、うそつき、うそつきっ！ )

すすむは祖父母を激しく非難した。

(おじいちゃんも、おばあちゃんも、ちゃんと約束したのに)

しかし、良い子でいるために、その言葉を口に出すのは自制した。爆発してあふれ出しそうな言葉を抑えるために、すすむはいつもよりもっと無表情で黙り込んだ。

すすむは自分にしか分からない目印で、今日の日付を記憶していたのである。

「あと十日ほどで・・・」

おじいちゃんはすすむにお父さんがやってくる日を約束したのだった。

すすむは数字は読めないが、カレンダーのマス目の中でおじいちゃんが指さした位置をちゃんと覚えていた。心の中で毎日1つづつマス目を塗りつぶして、今日がその日のはずだった。

「今日は、お父さんが来る日だね」

朝食の後、すすむはおじいちゃんの約束を恐る恐る確認したのだった。おじいちゃんはびくりと反応してすすむから視線をそらした。

「早く来れるようになるといいな」

おじいちゃんは視線をそらしたまま言い残した。おじいちゃんは約束を守ることなくドアの向こうに姿を消した。

残されたおばあちゃんも返事に窮して、いつもと同じ言い訳を

した。

「いい子にしていたら、きっと」

おじいちゃんほうそつきだ。

おばあちゃんほうそつきだ。

すすむのことを好きだと言ったお母さんほうそつきだ。

すすむを迎えに来ると言ったお父さんほうそつきだ。

うそつきばかりで、すすむにとって何の進展もなかったのである。すすむは黙ったまま隣の部屋に駆け込んだ。すすむは部屋に閉じこもった。

おばあちゃんはすすむが一人で泣いているのではないかと思った。おやつを理由にしてすすむの縄張りに侵入した。

孫は泣いてはいなかった。だまって、目の前に絵本を広げていた。ただ、読んでいる様子はなく、じっと同じページを睨んでいるだけだ。

「すすむちゃん、ご本を読んであげようか？」

すすむはおばあちゃんに奪われないように、絵本を5冊とも引き寄せ強く抱きしめた。すすむの目には涙の代わりに、悲しさが敵意に姿を変えて、おばあちゃんを射ている。おばあちゃんは悲しそうな目をして、後は黙ったまま部屋を出た。後ろ姿が寂しそうに見えるが、すすむはそんなものに騙される気はなかった。

おばあちゃんは、いろいろ考えて、お昼ご飯のメニューをすすむの好きなカレーライスに切り替えた。厚手のフライパンの中でバターを使ってタマネギをじっくり炒めて、乱切りにしたジャガ

イモとニンジンと挽肉を加えて、更に炒める。

ニンジンはちゃんと孫の口に合うよう小さめに切っている。彼女の本来のレシピから孫のためにニンニクとショウガは抜いている。具材が浸るまで水を加えて、アクをすくいながら、くつつ煮込む。おばあちゃんは時々、横目で台所のドアを見る。孫がのぞきに来ているかもしれない。

ローリエの葉とコンソメスープの素を少々。もう、その香りは孫に届き始めているはずだ。部屋の中で孫は期待で鼻をひくひくさせているかもしれない。おばあちゃんは火を弱火にして、カレールーを入れ、ルーが完全に溶けたのを確認した。まだ、孫は姿を見せないが、部屋の中でお腹をぐうぐう言わせているはずだ。

お玉ですくってみると、孫の好みには、とろみが足りない。おばあちゃんは小麦粉を加えてとろみを調節した。まだ、孫の姿は見えないようだ。最後の仕上げにヨーグルトを少々と醤油を2匙、おばあちゃんの秘密の隠し味だ。

ずいぶん、誘いの手を伸ばしたつもりだが、すすむは姿を見せない。時計は昼を少し回っていた。孫に食事を食べさせなければならない時間だ。おばあちゃんは西洋皿によそったホカホカご飯の上にカレーをたっぷりかけた。孫の気を引くように黄色いスイートコーンを散らした。おばあちゃんは、また横目で台所のドアを見る、孫はまだ姿を見せない。おばあちゃんはとうとう部屋に孫を呼びに行かなければならなかった。

「ゆっくりでいいから、残さずちゃんと食べなさい」

すすむはスプーンでカレーをかき回している、口に運ぶよりか

き回している時間の方が長いだろう。

「ニンジンを残しちゃダメよ」

それを聞いたすすむは念入りにニンジンをより分けて、お皿の端に積み上げた。

「残さず、全部食べなさい」

すすむはパイと横を向いて席を立った。

おばあちゃんは何も怒らなかった。すすむは振り返っておばあちゃんの表情を確認した。自分の行動の効果を確認した。いかにも、すすむのことを心配しているような悲しい顔だが、すすむはそんな手に乗らない。

すすむは出かける時間まで、おばあちゃんから離れて絵本と一緒に部屋に閉じこもって出てこなかった。ぐるになってすすむを騙した大人への恨みや憎しみで心が満たされながら時間が過ぎた。



この日、すすむは待ちきれずに、春香より先に公園にいた。今日の風は優しく、すすむを包み込むようだった。

(おおきい……)

すすむは公園の広さを考えた。この世の中が、すすむと、すすむの傍らにすわる春香だけの広さなら、こんな寂しさは感じずにすむだろう。

公園の片隅で木の切り株に似せた椅子の中で橋から二番目を、すすむは春香の指定席にしている。すすむの隣の椅子に人影はなく、すすむはそこに座ってすすむに微笑みかける春香の姿を思い浮かべるしかない。

すすむが落ち着きもなくお尻を動かしたり、お尻と椅子の間に指を差し込んでもしもじするのは、お尻の方からじんわり冷たさが伝わってくるばかりで、ちっとも温かくなれないからだ。

やむなく、すすむは砂場に移動した。気まぐれに幾つか山を作ったのだが、今日は気に入るものが出来ない。すすむは全ての山を念入りに潰して平らにした。

「……」

今日の春香は言葉より先に、感情をすすむに伝えた。不安と心配といたわりが混じり合って、すすむの心に湧き上がったのである。昨日より不安で神経質そうなすすむの姿を見ていたのだろう。すすむに昨日までの好奇心が薄れ、自信を失ったようにしょんぼりと小さく見える。すすむが振り返ると、いつの間にか、すすむの背後に春香の姿があった。春香は全てを察したように黙

ったままだ。だから、すすむも黙ったままだ。春香はすすむの横にしゃがんで、視線をすすむと同じ高さにして、ハンカチですすむの涙を拭った。すすむを庇うように、すすむのダウンジャケットのエリをたてて手を引いて誘った。

(寒い風ね。もっと、暖かいところに行きましょう)

暖かいところという言葉に、暖かい仲間がいる場所という感情がこもって伝わってくる。

春香は水のでない噴水の縁に腰をかけて、今日はお腹を空かせていたすすむのためにバスケットからハムサンドを出した。夕食までの中継ぎの小さなサンドイッチだった。ほんのわずかしのお腹に入れなかったカレーライスは、とっくにすすむのお腹の中で消え去っていて、すすむが感じる空腹感が春香に伝わってきたのである。

春香はスケッチブックを開いて鉛筆を走らせた。彼女の指先が濃い線を撫でて、線がぼかされて空間に変わると、荒涼とした墨絵のような色のない景色が広がった。

肌寒く、飢えて、気力の失せた感触が、すすむが入り込む物語に引き継がれた。

すすむの視界をさえぎるものが、すすむの背丈よりも高い枯れた草木だったり、レンガの固く冷たい壁だったり、世界から色を奪うほど濃い霧だったり、目の前に見えるものはさまざまに変化するのだが、すすむの心象を表すように、その景色が見晴らしが利かない不安感を持っているという点で共通している。

すすむは、ふと周囲を見回して、傍らに春香の姿が無く、しばらく一人で歩いていたことに気付いた。時間の感覚が失われて、いつからこの世界をさまよっているのか分からないでいる。

体の芯を凍らす寒さではないが、冷たい風がダウンジャケットを通してさえ肌を刺す感触がある。その鋭さは終わることのない冬を想像させた。寒さと不安で立ち止まろうとする度に春香の声が響いた。

(すすむくん、すすむくん。大事なお願いがあるの)

その春香の声に誘われるように、すすむは得体の知れない風景の中を歩き続けているのである。

しばらく歩くと、小さな泉があった。水面に広がるさざ波は無く、底には堅く乾いた地面が見えていて、ちっとも水はなかった。あの公園の噴水のように凍り付いたように動きがない。

泉の前に、清楚な雰囲気の女の人がある。

春香に似ているが、今は花の女神だと、すすむは信じている。「四季を紡ぎ出す泉の水が枯れてしまったの」

女神さまは、暖かな光に包まれているのだが、その光は弱々しく痛々しい。

「だから、春が来ないの」

女神さまは続けていった。

「お願い。すすむクン。この世界のために、泉に水を取り戻してちょうだい」

すすむはこういうシュチュエーションには覚えがあった。ゲーム機で遊ぶロールプレイングゲームがこんな感じだ。すすむよりもお父さんが一生懸命で、コントローラーを握ってすすむに渡してくれなかったことがある。

すすむは思った。

(きっと、悪い魔王が泉の水を止めてしまったんだ)

女神さまの声がささやくように届いた。

(それは、私にもよく分からないの……)

不安や戸惑いや整理のつかない苛立ちが春香の心から流れてくるようで、乾ききった泉は春香の心を象徴しているよう。どうしたら、豊かな潤いを取り戻せるのか、春香はすすむの旅に自分の心を託したのかもしれない。

きっと、春香の心を閉ざす魔人を倒すと、泉の水は豊かに復活する。その結末を予感して、すすむは歩き始めた。

親切なことに、すすむでも迷うことのない一本道が続いている。たまに、ふたまたに別れていても、片方は行き止まりの先が見えていて、選ぶ道に迷うことがない。一人ぼっちなのだが、誰かに暖かく見守られている感じがして寂しくはない。

(まず、仲間をみつけなきゃ)

誰かが、すすむの頭の中にそうささやいた。まず、仲間を見つけるのがロールプレイングゲーム定番の進行順序だ。心強い仲間を見つけなければならないだろう。

すすむの旅の当面の目標が定まった。湖の畔や山の中や田園地帯の光景がすすむの思いつくまま、くるくる入れ替わって興味が尽かない。

麦の畑を越え、なだらかな峠道を過ぎ、長く続く砂浜を通過して、すすむは草原にやってきた。

突然に、ガサガサ音がする。すすむききよろきよろと辺りを見回した。

(何か・・・・・、いる)

すすむ自身がそう思ったのか、春香がささやいたのは分からない。すすむは薄緑色の丸い草の葉の陰に丸い黒い目を見つけた。丸い目は時々瞬きして、警戒するようにすすむを見つめているのである。その目に敵意が無い。すすむは警戒心を解いて尋ねた。

「だあれ？」

その問いに誘われて草むらから出てきたのは、小さなヒツジだった。ヒツジなのに2本足で立っていて、警戒するように小さな剣を構えている。何より、すすむが首を傾げたのは、ヒツジの顔をしているのに、もこもことした毛並みが無いからだだった。

「人間に毛を刈られてしまったんだ」

ヒツジは構えた剣にもかかわらず、ブルブル震えていることを

言い訳するように言った。そう言いながらくしゃみをした。うらやましそうにすすむのダウンジャケットをじっと見ている。

ヒツジが見つめるのは、すすむのお気に入りのダウンジャケットだった。しかし、ずっと駆けるように歩いてきたすすむは汗ばむほどに暖かい。自分だけが暖かいと言うことに罪悪感もある。すすむはダウンジャケットを脱いだ。

「本当か？ もらって良いのか？」

信じられないというようにヒツジは言った。すすむがダウンジャケットを差し出す様子を見れば、すすむにとって貴重なものだと分かるのだろう。

「オレは戦士のメウ。よし決めた。俺はあんたについていく」

こうして、すすむには一人目の仲間が出来た。

(でも、待って・・・・)

すすむは首をかしげて思った。

ヒツジの姿を頭から足先までながめる。一応は剣と小さな盾を携えていて戦士らしい。身長はすすむと同じくらいだ。しかし、困ったことに、ヒツジらしくてのほほんとしていて、ちっとも強そうには見えないのである。すすむに必要なのは強い仲間だ。悪いモンスターを倒さなければならないのである。すすむは首を横に振った。

ヒツジのメウは寂しそうにダウンジャケットを脱いですすむに差し出した。自分が、すすむの旅の役に立てない以上、こんな貴重なものを受け取るわけには行かないと言うのだろう。強そうには見えないが、律儀なヒツジさんだ。また、寒さで震え始めているようだ。



(このまま、ボクが行ってしまうと、いつまでも寒さに震えているのかもしれない)

すすむはそう思った。それに、人間に毛を取られたのなら、人間のすすむにも責任があるような気がする。

「服は貸してあげる。一緒に行こう」

すすむはメウをそんな言葉で誘った。メウは本当に一人目の仲間になったのである。

「でも、毛が生えてきたら返してね。」

すすむは自分のダウンジャケットのことを言った。

「ありがとう。あなたは人間だけれど、純真な心の人間だ。」

メウはすすむを褒めてくれたのだが、すすむは素直に喜べない。メウには悪いけれど、次にはもっと強そうな仲間を見つけようと思った。

(でも、) すすむは首をかしげた。何かを思い出せそうに思い出せない。メウの声がすすむを騙したおじいちゃんの声だと思い当たらないのである。

メウとの旅も、景色がくるくる変わっていくのだが、迷うことのない一本道の旅だ。いつの間にやら、メウにもぬくぬくした毛が生えそろって、返してもらったダウンジャケットを身につけてみると、メウの体の暖かさだけでなく、朗らかな性格まで詰まっているようで寂しさも薄らいだ。

突然に、すすむは眩しげに目を細めて背伸びをした。景色が開けてどんよりと曇った光が降り注いだのである。もとは灌木がまばらに見える草原であったらしいが、今は焼き払われたように地

面が焦げていて、目の前の景色には地平線が存在する。

「ちょっと待って、あそこに何か見えるよ」

メウは戦士らしく何か異変に気付いてすすむを制止した。

「うんっ、何かヘンなのが動いてる」

すすむの前方に、赤い小さな塊が道を塞いでいる。塊からは、いっぱい針が突き出していて、それが一斉にもそもそ動いてカサカサと乾いた音を立てていた。

(きっと何かの罠だ)

すすむはそう思った。ゲームにはこういう罠がつきものだ。すすむたちが警戒しながら近づいてみると、すすむの両手で抱え込めるくらいの大きさだ。その勇ましい赤い針はガサガサ音を立てて倒れてしまった。

「何か食べるものはない？」

塊はそう言った。

塊が小さな丸い目を開けたので頭の位置が判別できた。赤いヤマアラシだった。おなかを空かせているらしい。

「人間が森を焼き払ってから、食べ物が見つからない。お腹がへって動けなくなくなっちゃった」

すすむはポケットを探った。何かの感触がある。取り出してみると、春香にもらったサンドイッチ。でも、これ一つっきりで、与えてしまうとすすむの食べ物がなくなりそうだ。ヤマアラシは黙って哀願するように、すすむを見つめている。

すすむはヤマアラシにサンドイッチを差し出した。1つぎりしかないサンドイッチだ。すすむは泣きべそをかきそうになりながら、差し出した。ヤマアラシはサンドイッチを奪い取るように

、もしかもしゃ食べた。あんまり急いで食べたので、途中でのどを詰まらせた。すすむは咽せかえったヤマアラシの背を撫でてやった。温かい。その暖かさにサンドイッチが無くなった不安が消えた。毛並みに沿って撫でてやると針の感触がヘアーブラシを撫でるようで面白い。

「ありがとう」

ヤマアラシは笑顔ですすむに言った。まだ、サンドイッチのお礼を言ってなかったことに気付いたのだった。ヤマアラシは躊躇するように続けた。

「あなたは人間だけれど、思いやりのある人間だ」

「ボクはすすむで、こちらはメウ」

「ボクは盗賊のハリーです。いえっ。盗賊と言っても人のものを盗むんじゃないですよ。すばしっこくって、宝箱の鍵を開けたり、仕掛けられた罠を見つけるのが得意だって事です」

すすむが眺めたところ、ちょこちょこ歩く姿は可愛いけれど、正直そうなのろまの盗賊だ。

(次はもっと役に立つ仲間が見つかるの良いな)

口には出さなかったが、すすむはそんな不満を抱いた。

(あれっ？ )

すすむはまた、首をかしげた。思い出せそうに思い出せない。気になるのだが思い出すことに抵抗がある記憶。ハリーはすすむを騙したお父さんの声で話している。少し気弱な雰囲気は、お母さんが出て行った後のお父さんの雰囲気と同じだ。

単調だった旅に少し楽しい変化がついた。ハリーが機嫌がいい

ときには歌を歌いながら歩くからだった。

ハリーはハミングするメロディを明るい調子に変えた。一面の黄色い菜の花畑の景色に入ったからだ。すすむの頭の高さで、黄色の花が地平線まで広がっている。

「ちょっと待ちなさい」

威張って威圧的な口調の割には声が小さい。すすむはその声を聞き逃すところだった。

「待ちなさいって言ってるでしょ」

声の主は腹立たしげに繰り返した。その姿をハリーが一番早く見つけた。ハリーの頭の高さより低い位置に、その声の主の姿をみつけたのだ。菜の花畑の中から出てきたのはハムスターだった。彼女はすすむに断りもなく、すすむの右足から腰のポケットへ、ポケットから肩口へ、肩口からすすむに挨拶することもなく、すすむの頭のとっぺんまでよじ登った。

「まったく、気の利かない子ねえ」

そんな言葉で、ハムスターはすすむに文句を言った。すすむが自分の手で彼女を頭に乗せなかった、彼女に余計な運動をさせた、と言うことを怒っているらしい。

「でも、見晴らしはいいわね」

ハムスターはしばらくすすむの頭の上でぐるぐる周囲を見回していたが、

「まだ、まだ、先は長いのね。まだ、四季の泉が枯れてしまった原因は、分からないんだわ」

そう言ったきり、すすむの頭の上のハムスターは黙りこくって

しまった。四季の泉。ハムスターはすすむと同じ目的を持っているらしい。すすむはむっつり黙りこくったハムスターを掌に乗せて、顔の高さを揃えて挨拶をした。

「ボクは、すすむだよ」

「あらっ、申し遅れました。あたしは魔法使いのキィです」

すすむはそうではないかと思っていた。手の平のハムスターが爪楊枝程の長さの魔法使いの杖を持っていたからだ。

「あのね。四季の泉が枯れちゃったの。ボクはその原因を探しに行くの」

(大事な用があるので、これ以上は構ってられない)

そういう言うニュアンスを込めたつもりだ。すすむはハムスターのキィを地面に降ろして歩き始めた。キィはすすむを追ってきたが、すばしっこく見えても、体が小さいのですすむのスピードについてこれない。

「ちょっと。あたしを置いて行くつもり？ 」

すすむはそのつもりだ。すすむが欲しいのは、化け物を倒す強い仲間だ。

「本当に置いて行くつもりなのね？ 」

キィの声が苦しそうにハアハア言う息づかいと共に寂しさに震えている。

「わたしが小さいと思って馬鹿にしてるんでしょう？ 」

キィの声が悲しそうだ。彼女は小さな体と小さな力で、すすむと同じ目的を持ってつらい旅を続けていたのだ。独りぼっちで。

「きっと、きっと。後悔するんだからあ」

すこし振り返ってみると、キィが一生懸命に駆けてくるのがみ

える。小さい顔に大きな涙を浮かべながら駆けてくる。すこし立ち止まっただけで、すすむはまた歩き始めた。やっぱり、もっと強い仲間が欲しいと思った。

もう、声が小さくなってその意味が聞き取れない。でも声の調子から、背中の方できっとキィが泣いているのだとすすむは思った。すすむはもう一度立ち止まった。仲間を見ると、メウもハリーもうなづいていた。すすむは黙って道に戻り始めた。

寂しい涙が溢れる目で、再び現れたすすむを見つけたキィは挨拶する間もなくすすむの頭によじ登って、今度こそ離れないように小さな手ですすむの髪の一房を握りしめた。

「あなたは人間だけれど、信頼できる人間よ」

すすむは、次こそ、ライオンかトラ、それがダメならせめて強そうな犬がいいと念じていた。

(うん、)

すすむはうつむいて考え込んだ。心の底に封印した記憶。キィの性格は、時におじいちゃんをしっかりとるしっかり者のおばあちゃんそっくりだが、すすむはハムスターを見ておばあちゃんを思い起こすことは無かった。

新しい仲間が増えて、旅はにぎやかで楽しくなった。何より、道に迷うことが無くなった。ハムスターのキィがすすむの頭の上で、すすむの髪を握って、まるで乗馬の手綱を操るように旅の方向を指示するからだ。

景色が変わった。菜の花畑を抜けると湖の畔の景色が広がった。道は湖の畔に沿って伸びている。すすむはキィの指示に初めて



逆らって引き返そうとした。湖の岸辺に一羽のアヒルを見つけたのである。すすむは次に会うのはライオンかトラだと決めていた。アヒルはすすむの都合に悪いのだ。キィは髪を引いてすすむ路を修正しようとしたが、もう一度すすむは逆らった。振り返ってはいけない。その時、湖からパシャパシャ大きな水音と切れ切れの悲鳴が響いた。

アヒルは溺れていた。

(アヒルのくせに溺れるなんて)

すすむはやむを得ず、湖に駆け寄った。水が透明で底の石まではっきり見える。深さはすすむの胸のあたりだろう。すすむは少しの勇気を振り絞って湖に入った。すすむは少し水を飲んでしまったが、溺れていたアヒルを胸の高さに抱き上げた。

「有り難うございます」

アヒルはせき込みながら言い、次のように続けた。

「あなたは人間だけれど、勇気のある人間だわ」

この声とおっちょこちょいの性格には心当たりがあるような気がする。すすむはもどかしそうに仲間を紹介した。

「ボクはすすむ。こっちは仲間のメウとハリーとキィ」

「わたしは僧侶のフィニです。村人が春が来ないので困窮しています。わたしは村人を救いたくって旅をしているんです」

彼女がいた村で人間が困っていた。彼女はそんな人間を救いたいというのである。

(泳げないのに？ )

すすむはそう思ったが黙っていた。ヒツジのメウが言った。

「春が来ないのはね。四季の泉が枯れたからだ」

「人間が好き勝手なことをしているから、泉が枯れたんだ」

ヤマアラシのハリーはそう言った。

「人間に愛想を尽かして四季の精がどこかに行っちゃったの」

ハムスターのキィが言った。

すすむは黙っていた。仲間の中で人間はすすむだけだ。旅の展開の中で、何か、ぼんやり見えてきたものがある。人間の身勝手が悪いらしい。仲間はすすむに気付いて遠慮してそれ以上の言葉を発することやめた。その沈黙はかえってすすむを責めているようだ。

「ああっ」

アヒルのフィニがすすむが震えているのに気付いて声をあげたのだ。アヒルは羽ばたき一つすれば平気だが、すすむは湖から上がってびしょ濡れのままだ。四季の泉が枯れたと言うことがよく分かる。四季が冷たく凍り付いて動かない。その冷たさがすすむの体に染み込んでくるのである。

ヒツジのメウが体を寄せた。体温がすすむに伝わってくる。ヤマアラシのハリーが駆け回って小枝をかき集めると、ハムスターのキィは大げさな身振りで

「ファイアーボール」

小さな体で精一杯の呪文を唱えた。小さなキィの、小さな火の玉は、焚き火の火種にはなった。小さな炎が燃え上がって仲間を照らし出した。いつの間にか日が沈んで夜がふけている。アヒルのフィニが仲間のために呪文を唱えた。

「ヒーリング」

弱々しい魔法で、体力の回復には至らない。しかし、体がくすぐったいような快感で気分がいい。すすむは仲間に囲まれながら、彼らと出会ったときのことを考えていた。

「あなたは人間だけれど、純真な心の人間だ」

「あなたは人間だけれど、思いやりのある人間だ」

「あなたは人間だけれど、信頼できる人間よ」

「あなたは人間だけれど、勇気のある人間だわ」

この世界を壊した人間で、しかも、力のない子供だけれど、すすむのことを信じてみたいと、すがりついているようだ。

(ボクは仲間の期待に応えられるかな？ )

そんなことを考えながら、すすむは目を閉じた。

たぶん、明日、目的地に着く。

たぶん、明日、全て明らかになる。

仲間が温かくすすむを包み込んでいて、すすむは心地よい眠りに落ちていった。

すすむが目を覚めたのは夜半のことである。夜明け前の一番冷え込む頃かもしれない。

メウが寄り添ってくれていたはずの背中が肌寒く、その不安な心持ちがすすむを夢から引き戻したのである。

仲間はすすむから離れて焚き火を囲んでいた。ひそひそ小声で何かを相談しているようだ。まるで、すすむのお父さんとお母さ

んのことを話題にする時のおじいちゃんとおばあちゃんのように。すすむはそう思って黙って、目をつむったまま仲間の話を聞いた。

「ねえ、メウ。私たちは、この子を連れて行って良いのかな？」

声の様子からアヒルのフィニだと分かる。

「うん。私も同じ思いだよ」

答えたのはメウの声である。

「ねえ、この子をここに残しておこうか？」

甲高い声は魔法使いのキィだ。

「そうだね。それがこの子のためになるかもしれない」

ハリーの言葉が結論のように響いた。そんな、小さな声が切れ切れに聞こえるだけで、会話の流れは読みとれず、すすむにこれ以上危険な旅をさせられないという彼らの意図が推測できない。理解できるのは、すすむの意思とは関係なく、彼らはすすむの運命を決めていることだった。メウも、ハリーも、キィも、フィニも、みんなぐるだ。

(ボクは騙されてたんだ)

すすむは冷たい憎しみを感じつつ拳を握りしめた。

翌朝、目覚めたすすむの態度が硬く言葉が少ない。

と、仲間はみな思った。声をかけても、じっとうつむいて黙ったままなのである。

すすむは父母からも祖父母からも騙され続けてきた、その記憶が半ば憎しみにも近い反感を生み出すのである。

(もう、だまされるのはイヤ)

すすむは歩き続けているのだが、旅を続けるのではなくて、何処かでこの仲間と別れて旅を終えるチャンスをうかがっているのである。仲間の雰囲気は冷え冷えとしている。メウの温かさも、ハリーの歌も、キィの導き、フィニの癒しも、全てを拒絶してしまったからだ。

すすむたちを囲む風景もすすむの心象を現して、冷え冷えとしてきた。雪や氷こそ見えないものの、冷たい水をたたえる海辺で、道は砂浜の中に埋もれて失われた。北風の通り道になっている寒風が吹きすさぶ谷間を、すすむも、メウも、ハリーも、キィも、フィニも、みな黙って、一人ずつ、寄り添いもせず歩いた。

冷たい永久凍土の平原が広がっていたかと思うと、彼らの旅を遮るように岩山が現れた。頂上は雲の上にあって確認できない。その裾野は地平線まで広がっていて、迂回するルートはなさそうだ。すすむは諦めたように上り始めた。仲間はすすむを見守るように黙っていたが、すすむに続いて頂上を目指した。周りは寒く薄暗い。

(この山を越えたら)

すすむはそう思ったが、その先に何があるのか解らない。

ハリーが先導した。すすむのためにしっかりした足場のあるルートを確認するつもりだ。ハリーはすすむの何倍も駆け回ってルートを探し出した。が、すすむは従わない。わざとハリーの指示するルートを避けているようだ。

雲の中に突入し、足下のおぼつかないすすむを気遣って、キィが魔法ですすむの足下を照らしたが、すすむは逆にキィの明かりを避けて危険な方に踏み出して行くのだ。足を滑らせるすすむをメウが支えようとする、すすむはメウの手を振り払った。擦りむいた膝を治療しようとしたフィニの呪文も拒絶した。

すすむはこの山の中で独りぼっちだ。

白い雲を抜けると、どんよりと曇った空を背景に山の頂上が見えていた。

(あそこまで行って・・・)

あそこまで行って、後は麓に降りたら、こんな旅はヤメにするつもりだ。四季の泉なんてどうでも良かった。この世界がどうなっても、自分には関係ないとも思った。

ハリーは相変わらず、すすむのために安全な足場を探し回っている。岩がごろごろしていて恐ろしい。しかし、頂上はあと十数歩の位置だ、すすむは頑なにハリーに従わないまま頂上に達した。

すすむは声にならない叫びを上げた。頂上に達して目の前に次の光景が現れたのである。雪をたたえた山がずっと続いている。何処までも。

幼いすすむを絶望させるのに十分に残酷な光景だ。

すすむは失望感でしゃがみ込もうとした時に、足を滑らせた。もともと足場の悪いルートを歩いていたのである。すすむは急で支えるもののない斜面を滑り落ちた。そのすすむをハリーが支えていた。滑り落ちるすすむの手を握って、背中の針をスパイクのよ



うに使った。すすむだけなら崖の下まで落ちてしまったに違いない。

「よかったあ」

ハリーはすすむを抱きしめた。すすむは黙って抱きしめられていた。すすむを裏切ったハリーに救われたという思いで、すすむの頭は混乱している。頂上を見上げると、残りの仲間がすすむを気遣うように降りてくる。ハリーはそんな仲間に手を振った。すすむが無事だと知らせたいのだろう。

そのハリーの足下が崩れた。ハリーは姿勢を崩して転がった。ハリーは小さな手で崖の縁に掴まっているのだが、その力は弱々しい。彼の体重を支えるには手が小さすぎるのである。

「だめ、だめ」

ハリーは叫んだ。すすむが自分に手を伸ばしているのが見えたのである。すすむの体重は自分の数倍はある。そんなすすむが近づけば、すすむもいっしょに落ちるだろうと思ったのである。

「ねっ。すすむ。約束して、泣かないって。すすむが落ち込むとみんなが寂しくなるんだ」

降りてくる仲間を振り返ったのだが、間に合いそうにもない。

「約束だよ。泣かないって」

「うん」

すすむに出来るのはそんな返事だけだ。ハリーは約束だけを残して崖の下に姿を消した。

すすむの心を写し取るように、景色は雪山になっている。なだ

らかな単独峰ではない、1つ1つがとがって高く空を突き刺すほどの峰が繋がった連山である。その景色に、すすむは悟った。

(ひょっとしたら)

仲間がすすむを置き去りにしようと言ったのは、この地形の陰しさを悟ってのことかもしれない。すすむは再び歩き始めた、すすむの足下にキィが居て、すすむのために魔法で地面を照らしている。すすむはこんどこそ素直にキィに従っていた。小さな光なので、明るくなるのはすすむの足下くらいだ。

「危ないわよ。足下に気を付けて」

キィの方が危ないし、疲れているだろうと思った。すすむが跨いで通ってしまう石も、ハムスターのキィは小さな体で迂回して歩いているのである。キィが魔法で発する明かりが、丁度、電池が切れかけた懐中電灯の光のように儂い。キィも相当疲れてきている証拠だが、彼女は文句も言わず、すすむを気遣っている。この誠実さは信じても良いと、すすむの心をじんわり溶かした。

(出会ったときのように、ボクの頭にのって)

すすむがそう言おうとした時に、突然に、悲鳴と共にキィの姿が消えた。すすむの足下ばかりに気を取られて彼女自身の足下の確認がおろそかになってしまったのだろう。積もった雪が山の裂け目を隠していて、キィはそんな罌を踏み抜いてしまったのだ。

「だめ、だめ」

キィはハリーと同じ事を言った。ハリーの時と同じで、すすむが自分に手を伸ばしているのが見えたのである。自分の何倍もの体重のすすむは、あっさりと、雪庇を踏み抜いてしまうだろう。キィはすすむが自分を救おうとすれば、すすむもいっしょに落ちるだろうと思ったのである。

「ねっ。すすむ。約束して、決して目を背けないって。すすむが目を背けたら、みんなが何処へ行けばいいか解らないの」

キィが踏み抜いた雪庇は大きく穴が空いて落っこち掛けているキィの背後に青く山の裂け目が見えている。落っこちたら命はないはずだ。でも小さなキィが踏み抜いてしまった薄い雪の層の上で、すすむメウも、フィニも キィを救うことが出来なかった

。

「約束よ。目を背けずに、胸を張って前を見るって」

「うん」

すすむに出来るのはそんな返事だけだった。

残ったのは、すすむとメウとフィニだけだ。すすむがてくてく歩けるのは、その前方でメウが雪を踏み固めていてくれるからだ

。

(仲間のおかげだ)

すすむはそう考えるようになった。メウもずっと仲間の先頭に立ってラッセルを続けているのだが、ペースが落ちているし、呼吸も荒いようだ。だいぶ疲れているに違いない。フィニも、不慣れな土地を水掻きのついた細い足でよちよち疲れた足取りで歩いていて、綺麗な足は紫色に変わって可哀相だ。

「3人になっちゃったね」

(すすむが無理なら引き返そうか)

そう聞きたいのである。キィとの約束を思いだした。

『目を背けずに、胸を張って前を見つめるの』

すすむは目をきつくつむって頭を振った。変な考えを振り払ったつもりだ。

あと一つ、あと一つと数えながら幾つの峰を越えただろう。クレバスの危険地帯は過ぎていた。右手の方は視界を遮るカーテンのように、山の峰が伸びているのだが、対する左はずっと向こうまで視界が開けている。すすむたちはその傾斜の強い斜面を横断していた。山が唸っている。そのうなり声が大きくなるようだ。フィニは何か不吉な結末を予期したようにすすむに声をかけた。

「ねえ。すすむ。約束して、絶対に諦めたりしないって……」

ハリーやキィと同じような事を言う。フィニは繰り返した。

「約束よ。絶対に、」

アヒルのフィニはそう言い残して、山の上まで小さな翼を羽ばたいて飛んでいった。

雪崩だ。まるで雪の上に雲が湧き上がるように斜面を雪の塊が斜面を流れ落ちてすすむたちを押し流そうとするのである。

フィニが雪に向かって呪文を唱えている。彼女は魔法の盾で雪崩を防ぐつもりだ。斜面一面を覆い尽くすと言っても良いおおきな雪崩だ、一羽のアヒルにどの程度のこと出来るものだろう。

メウはフィニの意図を察して、急いですすむの手を引いて斜面を横断した。

フィニはメウがすすむの手を引いて斜面を渡りきったのを確認すると、何か一声叫んだようだ。すすむに約束のことを言ったのだ。フィニは大きな魔法に疲れ切って、崩れ落ちるように倒れてしまった。雪が彼女を包み込んで流していった。

四季の泉を蘇らせるという目的をすすむに残して、フィニは雪の下に姿を消してしまった。

すすむはメウとふたりっきりで、また幾つかの峰を越えた。雪山は越えたようだが、またごつごつした岩山だ。

突然に、メウがすすむの顔を見ていった。

「すすむ、言っておきたいことがある」

「いやっ」

すすむは拒絶した。ハリーやキィやフィニみたいに縁起でもないことを言うつもりだ。すすむは独りぼっちになるのはいやだ。すすむの目に涙が滲んでいた。

メウはすすむの涙を拭って言った。

「『泣かないで。』と、ハリーと約束したろう」

すすむはうなづいた。

「『目を背けないで』って、キィと約束したよね」

すすむはじっとメウをみた。たしかにその通りだ。

「『絶対に諦めない』って、フィニと約束したんだ」

メウの目がすすむに語りかけた。

「すすむ、あなたは強い子だ。だって、ここまでやって来たんじゃないか」

メウが微笑んで言葉を継いだ。

「いいかい、私と約束だよ。自分を信じるって」

「うん」

幾つかの峰を越えたすすむの傍らにメウの姿はなかった。落石

からすすむを守って巨大な岩と一緒に崖下に落ちていったのだった。すすむは独りぼっちになっていた。

仲間は、みんな、すすむに目的を背負わせて、居なくなってしまった。四季の泉を蘇らせるのは、すすむだけだ。

すすむは、ハリーとの約束を守っていて泣かなかった。キィとの約束を守って、じっと前を見て歩いていた。フィニとの約束を守っていて、この先には何か良いことがあると信じて歩くことにした。メウとの約束をまもって、4人の仲間の目的はボクが果たすんだと信じ切っていた。そうしてみると、仲間がいつも自分を見守っているようで寂しくないことがわかった。

ふと、すすむは歩き疲れて岩に腰をかけた。目を閉じると、山を吹き抜けてくる風が心地よい。心地よさに、全身の力を抜くと、まるで、自分の体が溶けて山と一体になったような広がりを感じる。無駄な思念が根こそぎ流れ去って、心の中も体の中も空っぽだ。空虚なのではなくて、全てが謙虚にありのままに、すすむの心を通り過ぎて行くのである。

すすむが目を開けると、すすむの心象を写し取っていた山並みは消え去り、麓には森や草原が広がっていた。すすむは涙を拭いながら山を下りた。泣かないでと言ったハリーと約束を違えたわけではない。嬉しさや期待が涙になって溢れているのである。

すすむが更に旅を続けていると、前方に泉が見えてきた。泉の傍らに小さく人影が見える。新しい仲間かなと思ったが、周りの景色にも見覚えがあった。

（ああ。何も分からなかったのかな。ボク、何も出来なかったの



かな)

すすむは失望するようにそう思った。この世界をぐるりと回って、何もしないまま、もとの泉に戻ってきたらしい。泉の畔に花の女神さまがいる。花の女神さまは、すすむを責めるでもなく、じっと微笑んでいた。

すすむはしばらく黙って女神さまと見つめ合った。

(ごめんなさい。何もできなくて、)

すすむが詫びようとしたときに、女神様は優しくすすむを抱いた。

「いいえ、約束はきっと叶うわ……」

女神様が微笑むのと同時に地の底にごろごろうねる感覚がする。

「すすむ」

呼びかける声がある。聞き慣れた懐かしい声だ。ハリネズミのハリーである。

女神様の傍らに姿を現したハリーは、近づきがたいほど熱く、眩しいほど輝いている。すすむをだましていという言葉を使うなら、ハリーがすすむに黙っていたのは、彼が四季の精の中の夏の精だということだ。すすむの信頼は、夏の精は地中深くに凍り付いていた氷を融かすのに十分な力を与えた。

「すすむ。よく信じてくれたね。」

ハリーは微笑んで言った。ハリネズミの姿は次第に薄れて空気に溶け込んだ。ハリーの存在が失われたわけではなく、自然の一

部として本来あるべきところに戻ったのである。その証拠に姿を消したのに寂しくは無く、すすむには身近にハリーの存在を感じることが出来るのである。

「もうっ、力仕事は苦手なのよ」

そんな文句を言いながら、地面の穴からもこもこ出てきたのは、ハムスターで魔法使いのキィだった。小さい体だが、1粒の種が大きな実りに変わる強さと気高さを纏っていて、秋の精だとわかる。

「すすむ、ありがとう」

キィはぺこりと頭を下げて礼をした。短い一言に感謝の気持ちがこもっている。キィの姿もやさしく消えた。

「次は、私の番か」

メウの声である。女神様の背後に姿を現したメウは、ふんっと足を踏ん張って小さな剣を地面に刺して力を込めた。ハリーが融かした地下の水を、キィが地表に導き、メウが力を込めて押し出そうとしているのである。彫像のように動かない姿勢のまま、メウは笑顔を残して融け去った。残り雪が融けるような冬の精らしい姿の消し方だった。

「もっと、元気で、いきいきと」

いつの間に、姿を現したのか、アヒルのフィニが、わきあがってきた水を優しい羽ばたきで飛沫に替えて世界に振りまいた。細かな水の粒に女神様の放つ光が加わって大きな虹になった。春の精フィニの姿が大きく薄く空に溶け込んで、この世界は春を取り戻した。

すすむの仲間は再び、すすむの前から姿を消してしまった。

でも、すすむは今もしっかりと包み込んでくれている仲間の存在を全身に感じていた。四季の泉から、春と、夏と、秋と、冬が、一つも欠けずに織りなされて湧き出した。すすむの心の中に何か広がるように、じんわり湧き出してきたのである。

女神さまはその一部始終を優しく見守っていたが、すすむの額にそっとキスをした。

「ありがとう、すすむくん。やっぱり、あなたは強い子ね」

体力や腕力を評したのではないことは、すすむにも分かるのだが、（強い子）という言葉の本質を、すすむは言葉で説明できない。ただ、ほめられているということは力がみなぎってくるようで嬉しかった。

きゅっと、誰かに柔らかく抱きしめられる感触がして、すすむは目を覚ました。

春香がすすむの肩に腕を回して、すすむを背後から抱いていた。公園の中、コンクリートの山の上だ。すすむはスケッチブックを閉じる春香と並んで噴水の方を見降ろしている。少し、座っている位置をずらすと、ずらした分だけコンクリートの冷たさが伝わってくる。じっと同じ位置に座ったまま、春香の話を聞いていたものらしい。

(すすむくん、良くがんばったね)

春香は微笑みながら、すすむの健闘を誉めた。すすむは任務を果たして誇らしい気分だ。ヒツジのメウがすすむに言ったように自分を信じることが出来るような気がする。

春香はすすむを背中の方から抱き上げようとしたが、冒険をやり遂げたすすむの体は思いの外、重いようだ。春香は腰に手を当ててすすむを見た。抱き上げられなかったことを照れるような、すすむの冒険の重さを実感して満足するような、幾つかの感情が入り交じった笑顔だ。

すすむは察した。春香はすすむを膝に抱いて、滑り台を滑り降りようと試みたらしい。すすむが思ったより重くて試みが失敗した。その照れ笑いが、春香を随分と身近で人間臭くした。

すすむは春香を導くように、螺旋状にコンクリートの山を巡る滑り台を滑った。

(すすむくん)

春香がすすむの心に語りかけた。

(本当はね、雪の魔王が出てくるはずだったんだ)

(ゆきの まおう？ )

(そう、春が来るのを邪魔している悪魔がいたの)

(悪魔なんか、居なかったよ)

(普通はね、悪魔を倒して勇者になるの。きっと、勇者になるために悪魔が居るのね)

(ふうん)

(でもね、すすむクンと一緒に旅をしてると、悪魔なんか倒さなくっても、すすむクンは勇敢だなって思ったの)

駆け出して行くすすむを、春香が呼び止めた。振り返ってみると、春香が噴水のところに立っていた。さっきの花の女神さまのようだ。春香は、ゆっくりと人差し指で噴水を指さしてから、何もない空に弧を描いた。

その指に導かれるように虹が噴水から吹き出して、溢れだして、地面を潤した。虹はきらきら光って、すすむと春香の公園を潤した。

(ありがとう。すすむクン)

そんな言葉で春香は表現した。すすむが一人でやってのけた事を、すすむに思い起こさせているのである。すすむの道にも、きっといろいろな可能性がある。

(ばい、ばい、はるかさん)

春香は、すすむが明るく手を振ってかけ去るのを見送った。

春香は一人残されたが、この瞬間には孤独感はなく、心が満たされている。

浮気性の父親に振り回された心労で、母親が亡くなった。春香はそう信じている。事実、病床の母親を見舞う幼少の春香に伝わってくるものは、夫を待ち続ける女の不安と苛立ちだった。その感情が嫉妬だと理解できる年頃に成長する前に、嫉妬が諦めに変わって、意識が淡くすり減るように春香の母親の命が尽きた。なにやら、最もらしい病名がついていたが、春香は医師の診断を信じてはいない。母の死から半年を経ずして、未だ春香の心の整理がつかない時期に、女とその息子が彼女の家に侵入した。その時から増幅した不安や苛立ちや孤独感である。そんな、さまざまな負の感情が無くなったわけではないが、磨りガラスを間に置いたかのように肌を感じる感情が和らいでいる。

春香の家に侵入した女。彼女から伝わる感情や記憶で女自身に春香の父親の浮気の原因があるわけではないことは分かる。

女に連れられてきた女の息子。春香に妹としての好意は感じてはいない。勘の良い彼女に違和感や不安感の混じった感情を持っているが、伝わってくる感情に底意地の悪い悪意は感じられない。

病床の母親から流れ込んだのは、不安や苛立ちが複雑に絡み合っただけで嫉妬に変じた感情だが、その奥底には春香の父親である夫への愛情が感じ取ることが出来た。

新たに侵入して春香の母親を演じる女からは、春香の実の母親



ほどの愛情は感じられず、したたかで臆病な打算が感じられる。しかし、生きるための経済的基盤を作るという打算が動機であったにしても、この家で家族を維持し家族を作ろうとする切実な意図も伝わってくる。現実と何とか折り合おうという点で人の自然な姿かも知れない。

考えてみれば、女もその息子も、春香にとって人畜無害である。

（人畜無害？ ）

二人を想像する春香に笑みが浮かんだ。冷ややかに見下す冷笑が和らいでいて自嘲的な雰囲気漂わせている。新しい人々を家族として愛そうとは思わないが、高じ続けて憎しみに変わりかけた感情が、すすむという男の子を通して和らぐようだった。しかし、変質した感情の総量は変わらないまま、彼女自身を押し包む。

（もしも、自分が他の人と同じなら、他の人の感情や真意に触れずにいたら、新しい家族を作れるのかしら？ ）

そんな疑問が、家族を破壊しているのは自分自身ではないかという罪悪感を生むのである。春香は人として感じる哀しみや怒りと、周囲から伝わってくる感情のギャップを埋めることが出来ない。

春香は悪夢を吐き出すように大きなため息をついて、すすむが出て行った出入りに背を向けてもう一つの出入り口から重い足取りを進めた。

すすむは春香からもらった勇気が失われない内に帰宅するために、アパートのドアまで駆けた。

元気良く駆け込んできた孫を、おばあちゃんは意外に感じたが、変に口を差し挟んで孫の心をかき乱すのを恐れた。

「おかえり」

一言、そんな声を掛けただけだ。

おばあちゃんは孫の夕食に卵を焼いていた。孫の好みを考慮して、ちゃんと鰹と昆布のお出汁が入っていて、中がとろりととろけ出す半熟に焼いてある。今日の夕食は3人だ。おばあちゃんと、おじいちゃんと、すすむだ。おばあちゃんとおじいちゃんは孫の様子を偵察するように黙って食事をした。昼の残り物のカレーライスをスプーンでもくもくと食べているのである。すすむも黙って卵焼きを食べた。時々、箸を休めて考え込むのは、いろいろな思い出を頭の中で整理して、言葉を探すためだ。

おばあちゃんやおじいちゃんの顔を見るまでは分かったつもりでいたのだが、今は、すすむの心の中でメウやキィやハリーやフィニや花の女神さまの言葉がごっちゃになって整理がつかない。

やがて、すすむはちょっと黙って、おじいちゃんとおばあちゃんを見ていたが、やがて、ぽつりと言った。

「ごめんなさい」

子供らしい素直な口調である。祖父母は孫の言葉の意味を理解しかねたようだ。

ただ、その言葉を発した後の孫の表情が素直で朗らかだった

ので、深く追求するのは止めた。深く追求してボロが出るのは大人の方なのである。おじいちゃんは孫を膝に抱き上げて頭を撫でた。おばあちゃんとはまどった笑顔で孫のためにテレビの電源を入れて、チャンネルを子供向けの番組に合わせた。

すすむはおじいちゃんに

(お父さんと会いたい) と、心の中で言った。

そして、おばあちゃんを見て

(お母さんと会わせて) と、願いを試してみた。

でも、おじいちゃんも、おばあちゃんも、黙って作り笑いを浮かべるだけで、すすむの言葉を察した様子ではなかった。

雀のさえずりが、すすむの目を覚まさせた。子供にとって早すぎる目覚まし時計だった。布団から露出した顔の肌の感覚が、きんっと冷たく張り詰めるような錯覚を起こしたのは、窓を通して見えた冬の空の青さのためである。

しかし、この部屋は暖かい。すすむはその温かさが早起きしたおばあちゃんが孫のために点灯したストーブという配慮だとは考えてはいない。

すすむがぼんやりと気配を探ると、玄関の方向に物音がする。出勤するおじいちゃんと、見送るおばあちゃんの気配だった。

(危険はない)

そういうことを、すすむはぼんやり考えた。そうすると、おしっこがしたくてたまらない。

トイレに起きたすすむが姿を見せると、おじいちゃんとおばあちゃんは、挨拶より先に大人同士で何か話した。すすむには分からないように黙ったまま目と目で。すすむは気づかない振りをしてトイレに入った。すすむは生きるためにそういう演技を身に着けていた。

トイレから出たすすむは、ようやくおじいちゃんとおばあちゃんに気付いた振りをして朝の挨拶をした。

「お・は・よ・う」

すすむの挨拶に応じるおじいちゃんとおばあちゃんの返事には一拍の間があった。

「おはよう、すすむ」

「おはよう、寒くない？」

おじいちゃんとおばあちゃんはすすむを観察している。二人とも、すすむが思ったより元気なので安心したようだ、すすむは考えた。おじいちゃんもおばあちゃんもすすむを余計に刺激しないように気を使っているのだ。おばあちゃんはすすむを寢床に戻した。子供が起きるにはまだ早すぎる時間だ。

寢床に戻ったすすむは、布団の中に顔を隠して、おじいちゃんとおばあちゃんのことを考えた。春香と比べてみたのである。

そして、

（何か違う）

と思った。

心でお話をする春香ではない。おじいちゃんとおばあちゃんのことである。時折、春香から滲み出すように伝わってくる寂しさが、すすむの共感を呼んで、すすむはおじいちゃんやおばあちゃんとの間に言葉で表現できないもどかしい壁を感じるのである。

次に、すすむが目覚めたのは、おばあちゃんが食事のためにすすむを起こしたからだ。すすむはいつもと同じように食事をした。食事をしながら、すすむは視線をあちこち移動させたが、その様子はいつもの怯える様子ではなく、好奇心が溢れてのことだ。

テレビの中で野ウサギが跳ねている。朝ご飯を頬張るすすむの頭もウサギに合わせてぴょんぴょん動いた。

食事が終わると、いつものように絵本を抱えて部屋の中を回ったり、木の枝を眺めたりする遊びを始めたが、時々、遊びに飽きたように窓の下の道を通りかかる人を観察したりした。そして

また、部屋を出ては、おばあちゃんの側で洗濯機の中を覗いてみたり、食欲もないのに冷蔵庫の扉を開けて中をのぞき込んだりした。

すすむは決して何かを語ろうとはしなかったが、おばあちゃんは孫が何か変わったようだと考えた。そして、その原因を幾つも考えてはみたのだが、正解になりそうな物は一つも無かった。しかし、しょげかえっていた孫が子どもらしい無邪気な仕草で歩き回っているのは好ましいことだ。

おばあちゃんは、この秘密が知りたいと思った。

「すすむちゃん。何か良いことがあったのかな？」

すすむは驚いたような視線をおばあちゃんに向けたが、走って居間へ逃げ込んだ。しかし、ちらっと振り返った孫の姿には、気分を害した様子はない。

居間に逃げ込んだすすむは、ソファを乗り越えたりして、六畳ほどの部屋を一周して、白紙を発見した。新聞の折込みチラシの裏側だ。おばあちゃんがメモ用にしているもので、そばには鉛筆まで置いてある。

すすむは思い付いたように、何枚かの紙と鉛筆を握ると、窓辺の部屋に戻った。

すすむはまず畳の上に寝そべってから、画題を決めて、丸くて黒い顔を描いて、その上に耳をつけた。かわうそに見えないこともないが、本人はクマのつもりだ。すすむはクマのクリックさんを描いたつもりなのだ。



クリックさんの頭は大きくて体まで描けない。すすむは強引に右腕だけ紙の中に押し込んだ。すすむは2枚目の紙に鉛筆を走らせ始めたが、今度は耳が長いので、ウサギだと分かる。すすむは小さなのと大きいのを描いた。すすむうさぎと春香うさぎだ。

3枚目、4枚目と、すすむは描き続けた。画題は、すすむの思い付くままで、オリジナルであったり、絵本の模写だったり、模写にすすむのオリジナルを加えたものだったり、様々だったが、決して父母を連想させるようなものは避けて出て来ることはなかった。

すすむは食事をする以外、こうやって新しい遊びに熱中して時間を潰した。あまり熱中するので、おばあちゃんは、この子には才能が在るのかも知れない、、、と考えたほどだ。

おばあちゃんは何度か孫のもとに紙を運んだ。

しかし、昼のオヤツが終わってしばらく、すすむは一枚描く事に時計を見て、やがてマフラーをしてテレビを見ているおばあちゃんの所へ現れた。既にジャンパーまで着込んでいて外出の準備は整っている。外出着のすすむをみて、自分も何か羽織るものを捜すおばあちゃんに、すすむは首を振って、一人で行くと主張した。

すすむは春香との約束を守つもりだ。

おばあちゃんは仕方がなく、すすむの服装をチェックした。  
重ね着する服の枚数は今日の気温に見合ったものか？

靴下は厚手のものか？

衿回りから風が入らないか？

ふと、おばあちゃんはすすむのポケットに何枚かの紙を見つけたが気付かない振りをした。すすむが午前中から描いた物の中、お気に入りの絵を選び出したに違いない。

すすむはおばあちゃんのチェックを受けると、弾けるように外に飛び出した。片手にバケツとスコップを持っているのはいつもの癖だ。

いつもと変わらない冬の風景。すすむは信号が青に変わるのを待ちながら、バケツの中で楽しくスコップの音を立てた。横断歩道の向こうの公園には人の気配が無い。春香はまだ来ていない。春香が来るに違いないと期待してしまうことが恐いので、公園に来た目的を『探検』にすり替えた。

探検と言っても、小さな公園だった。公園の入り口から見回しても、隅から隅まで見えるので、目に見えるもの1つ1つを丹念に調査するのである。。

まず、砂場に移動した。すすむの作った砂山がある。何度か手を加えているうちにトンネルが潰れてしまった。

次はシーソー。ペンキが剥がれかけているけれど、補修される気配が無い。きしむようにキイキイ鳴るのがかわいそうだと考えた。すすむはシーソーに腰掛けてみたが、一人で乗るシーソーには躍動感というものが感じられない不満がわいてきた。

公園の内側を夾竹桃のカーテン沿いに移動すると、切株を模った腰掛け、春香とすすむの指定席。一部、コンクリートの地肌が見えている。

左手のコンクリートの白い小山の麓には、自動車のタイヤが幾つも地面に半分埋まって並んでいる。そのつながりはイモムシの背を連想させる。すすむはスコップでぽんぽん叩いて音を調べた

次にブランコの所までやってきたが、座ってみるとブランコはただ、冷たいお尻が不安定に揺れるだけだ。

こうやって、すすむは公園を一周するのに約15分はかけたろうか。春香の姿はまだ見えない。すすむは不安に胸をどきどきさせてコンクリートの山の頂上に登った。春香は見えない。すすむはそのまま座り込んで、春香に見せるつもりだった絵を眺めた。

すすむがふっとため息をついてポケットに絵をしまい込むと、背後でブランコがキイキイ鳴っている。背中の方から、春香の柔らかな雰囲気。ちょうど始めて会った時のようだ。すすむは笑って滑り台に乗って螺旋状に山を降りると、ブランコの方にかけてだした。

春香はすすむを迎えるように立ち上がった。白のセーターとデニムのスカート。質素な服装だが、左腕にスケッチブックを抱え、右手にバスケットを下げているのはいつもと同じだ。

すすむはバスケットの柄を介して春香と手をつないだ。バスケットを横目でにらむすすむに、春香は笑って手を離して、バスケットをすすむに任せた。魔法の道具の詰まったバスケットである。

今日は学校でトラブルがあって、いつもより来るのが遅れた。しかし、すすむの笑顔を観ているとそんな嫌な思いを振り切ることが出来そうである

いつもの切株に腰を下ろして、すすむはバスケットを振った。柔らかな音、硬い音、大きな音、小さな音が混じって聞こえる。すすむは春香に促されてバスケットの蓋を開けた。柔らかな音は

ソフトビニール製の筆入れ。硬くい大きな音は色鉛筆のケース。  
小さな音はそのケースの中で鳴る色鉛筆だ。

バスケットの中はそれだけだ。

春香は笑って色鉛筆を受け取って、スケッチブックの中に、白い  
新しい世界を開いた。

「こいぬ」

春香が描いた物を眺めたすすむはそう言った。春香は少し首を  
傾げて、スケッチブックに鉛筆を走らせて耳を大きめに描き直し  
てから、すすむに見せた。

(狐には見えない？ )

「それじゃあ、キツネさん」

(今日は、一人ぼっちのキツネの話)

春香は狐の背後に山を描いた。画用紙の右端から左へ鉛筆を走  
らせて風を描いた。風には落葉が舞っている。

目をつむったすすむにも、全身の肌を撫でるように風の音が聞  
こえる。

山の尾根から見降ろすと、そこは杉の山々に囲まれた、小さな盆地の小さな村だ。すすむは初めてこんな高い、こんな離れた場所から村を眺めたのだった。

すすむの顔だけ見ると犬と区別がつかないのは、すすむがまだ子供だからだ。でも、よく見ると大きくてピンと立った耳やふさふさで先の白い尻尾で仔狐だと分かる。

すすむは大きな目をくりくり動かして辺りを見回した。秋の風が湿った鼻づらに冷たく、ピンと横に伸びたヒゲにくすぐったい。すすむはしばらく地面に腰を下ろして、珍しそうに村の遠景を眺めていたが、子供らしい気まぐれで4つ足で立ち上がって大きく気持ちのよい身震いをした。狐らしい大きな尻尾までぶるぶる揺れた。

すすむはその大きな尻尾を追いかけて地面の上でくるくると跳ね回った。それから、少し首を傾げてから歩き始めた。首を傾げるのはすすむの癖だ。空を見上げると赤や黄色に染まった陽光が降って来る。

すすむはまだ知らないのだが、木々も冬に備えて葉を落とす準備をしているのである。ふと見ると、地面の上を忙しそうに走り回っている生き物がいる。 ドングリで口を一杯に膨らませたりスだった。

冬の食料を集めるのに一生懸命だ。すすむと会っても遊んでくれたこともなく、挨拶すらしない無愛想なヤツである。今日のすすむはちょっと考えて、リスには興味の無い振りをして距離をじ



りじりと詰めていくと、突然、飛びかかるように駆け寄った。とにかく、近づくことが遊び友達になることの条件だ。

リスの方はそれを予想していたように、さっさと逃げだした。リスの尻尾が揺れてすすむから遠ざかって行く。すすむはまた一人ぼっちだった。こんなことには馴っこなので、がっかりもせず、また歩き出した。

肌寒い風が吹くので、僅かな木洩れ日が暖かい。黄色く柔らかな毛並みを通して、すすむに入り込む日差しと、体の中から沸き上がってはちきれそうな好奇心にくすぐられて、すすむはじっとしてられないのである。頭上では赤や黄色の木の葉がサワサワ鳴ってやかましいくらいだった。

北には高くて細い滝。すすむはくぬぎやブナの木を縫って滝の方へ駆け出した。太いしっぽがまっすぐ後ろにたなびいた。滝から流れる小川が南北に流れて村を二分している。小川の中にはメダカがいるのだが動きが鈍い。水が冷たくなりはじめているのかも知れない。すすむは小川に鼻面を突っ込んで水をぺちゃぺちゃ嘗めた。冷たい水が喉をとお腹の中に入って行く感触が愉快だった。

突然に、すすむは凍りついたように身動きをやめ、耳だけひくりと動かした。人の声が聞こえたのである。大勢の子供の声だ。何かの遊びをしているらしい、駆け回りながら歓声を上げている。すすむはこっそり忍び寄って、物陰からそっと頭だけだして覗いた。人間の子供が5人、何かの歌を歌いながら輪を作って回っている。子供たちの一番のお気に入りの遊びだ。すすむもこの歌

の旋律を記憶している。ただ、歌いたいと思っても、すすむの喉からは2つ足の子供たちみたいな歌がでて来ない。

すすむは羨ましそうに子供たちを眺めていたが、決して出ていこうとはしない。すすむには以前、歌に引かれてのこのこ出て行って子供たちに虐められた・・・・・、と信じている記憶がある。

子供の一人が、すすむの尻尾を握ったのだった。すすむは尻尾をいじられるのが大嫌いだ。別の子供は、すすむの前足を掴んで引っ張り上げたが、すすむは2本足では歩けないのだ。人間の子供たちの中にあって、すすむは自分と子供たちの差を見せつけられると何か急に、恐いような不安に包まれてひどく不安で、ひどく恐くて、ひどく寂しい、何も説明できないけれど泣きだしたいような感情に囚われた。そして、すすむは彼を抱える子供の手を噛んで逃げだしたのだった。

それ以来、すすむは子供たちには近寄らない。子供たちより彼らの中に居たときの不安な感じが恐いのだ。大きな尻尾、旋律の出ない喉、黒くて尖った鼻づら、みんな子供たちと違うものばかりだった。

すすむはしばらく子供たちを見ていたが、やがて諦めたように歩き出した。うつむきかげんなのと、尻尾を垂れているのは、すすむの気持ちの現れだ。

すすむは家に戻った。ここは村はずれの藁ぶき屋根の一軒家だった。すすむはこの家に炭焼きのおじいちゃんと二人っきりで暮らしている。

戸が閉まっている。すすむは引き戸の前に座り込んでくんくん鼻を鳴らして、前足で戸を叩くように搔いた。戸を開けてくれといういつもの合図だった。ぽんぽんと音がしたのは、囲炉裏の前のおじいちゃんが煙管をごつごつの手で叩く音だ。すぐにおじいちゃんの立ち上がる音がして、戸が開いた。すすむはおじいちゃんの足をくぐるように家の中に飛び込んで、囲炉裏の前まで駆けて行くと、おじいちゃんを迎えるように振り返っておじいちゃんが戸を閉めるのを見た。すすむはまたおじいちゃんの足元まで駆けて行って、おじいちゃんにまとわりついて、おじいちゃんの袖口を噛んで引いたり、くんくん鼻を鳴らしたり、キャンキャン吠えたりしながら、今日あったことの1つ1つを報告した。

葉っぱが赤かったことや、  
山の上では村が小さかったことや、  
リスが今日も無愛想だったことや、  
メダカがのろまだったこと、  
そして、  
子供たちの遊びを見たことも、

順番もバラバラに思い付くまま話した。そして自分はいつ人間になれるのかな？とも聞いた。そう、すすむは物心ついた頃からおじいちゃんに育てられて、自分が人間だと信じているのである。すすむはあぐらをかいたおじいちゃんの足の上で丸まって時々くんくん鼻を鳴らしてさっきの補足説明をした。すすむはいつも一生懸命説明するのだが、おじいちゃんは、すすむの言葉を理解

しない。すすむもおじいちゃんの手がよく分からない。おじいちゃんも、すすむに何かを語りながら、すすむの背中を撫でている。すすむは気持ち良さそうに、おじいちゃんの足の上でお腹の中に鼻づらが隠れるくらいにまん丸くなっている。時々耳を動かしたり、目を開けたりしなければ、すすむはただの毛玉のよう。おじいちゃんのゆっくりした優しい口調は、意味はよく分からないが、眠気を誘う気持ちのよい口調だ。

きっとおじいちゃんは、すすむがあの子供たちのような人間になれる日の事を話しているのだ。

その日が来たら、

その日が来たら、

すすむの頭の上の尖った耳は無くなって、あの村の子供のよう

、

すすむの長い口は小さくなって、歌を歌っていた子供のよう、

前足の指は長くなって、遊びの輪を作っていた子供のよう、

足は長く伸びて駆け回っていた子供のよう。

すすむはいつもそんな夢を見ながら眠りに付く。昼は駆け回って一人遊び、夜はおじいちゃんの上で人間の夢を見る。そんな日々を、すすむはもう何日過ごしたろう。単調な毎日の繰り返し。

おじいちゃん、今日はドングリがいっぱい落ちてたよ。

ぼくは明日は人間になれるかな？

おじいちゃん、今日はもう緑の葉っぱを見かけなかったよ。  
ぼくは明日は人間になれるといいな。

おじいちゃん、今日は湖にいっぱい鳥が来たの。  
ぼくはいつ人間になれるのかな？

季節や森の仲間は何かせわしなく変化を見せているのに、すすむだけはいつまでも、取り残されたように同んなじだ。ただ本能で冷たい冬の来ることを察している。

森の木々は葉を落とす前に最後の化粧をしているのだった。葉っぱが風に触れ合う音が、秋の音から冬の乾燥した音に変わりかけている。森の仲間は冬の食べ物を集めるのに、すすむの相手なんかしている暇はないのだった。でも、すすむがこんなにも森に心を引かれるのは何故だろう。

そのきっかけがあったのは、すすむが最初に赤い落葉を見つけてから3日めくらいの事、山の斜面や谷の小川を駆け抜ける風が、本格的に葉っぱを落とし始めたのだった。中には、枝を走るリスに蹴落とされる葉っぱもある。すすむは谷間の溪流を飛び越えて、川を流れ下る楓の葉を見た。山の細道を駆けながら柔らかな足の裏に、乾燥して細かく砕かれる落葉を感じた。そして樹木の間を歩きながら、突然目の前に舞い落ちる葉に驚かされたり、背中や尻尾に降って来る葉っぱの感触を面白いと思った。

その時、一枚の葉が、すすむの額に落ちてきた。すすむは考え事をしながら歩いていたので、驚いてきゅんっと目をつむって妙な悲鳴を上げた。今までに経験したことのない変な衝撃を感じた

のである。すすむは本能的に体を丸くして衝撃を受けた。痛くは無いが体中がむず痒い感じ。すすむはそのまま地面をころころ転がって、木の幹にどんっと、ぶつかって止まった。すすむはきよろきよろ辺りを見回した。衝撃を受けるようなものは何もない、今のはいったい何だろう。すすむは首を傾げながら、むずがゆい鼻面をなめた・・・・・、目の前にあるべきものが無い。すすむは前足で鼻面を撫でようとした。

「きゃんっ」

すすむは驚いて悲鳴をあげた。まるで、狐のような、悲鳴だ。今、すすむは木の幹を背にして腰を下ろしているのだが、目の前にまっすぐ伸びた足がある、まるで人間のようだ。

足先の白い運動靴は、すすむの後ろ足の先が白かったことの名残だと本能が教えてくれた。鼻面を撫でようとした前足も人間のよう。柔らかい白の手袋はやはり前足の先が白かったからだ。すすむはセーターを着ているのにも気が付いた、だぶだぶのセーター。あの子供たちが着ていたものと同じ。セーターが黄色いのは、すすむの元の毛並を反映している。よつんばいになってお尻を見ると尻尾が無い。お尻には青いジーンズをはいている。全身でここだけ元の毛並と違うのは、きっと、すすむが化ける前に青いジーンズの事を考えていたからだ。

すすむは幹に寄り添うように、そっと二本の足で立ち上がった。すすむは人間の子供に化けているのだ。すすむは知らなかったのだが、これが狐が持って生まれた魔法だった。狐は頭の上に葉を乗せる呪文で、何かに化ける魔法を使うのである。



すすむはしばらく、右の前足を幹に当てて不安定な体を支えながら木の回りを二本足で歩き回った。うつむき加減に足元を見ながら歩いて、すすむは二本足で歩くのが気に入った。

すすむは急に走りだした。何か体の中から嬉しさ、希望がいっぱいに沸き上がってきたのだ

すすむはちょっと落ち着いてもう一度人間になった全身を見回した。地面をころげまわったので、全身落葉まみれで、きれいなセーターに土も付いている。すすむは狐だったときの習性で体の汚れを嘗めて取ろうとしたのだが、腕の先を嘗めた以外は頭も舌も届かない。これは不便だと、すすむは考えたがすぐにあの子供たちが転んだ時にお尻の土を手で払っていたのを思いだした。そうだ。二本足になったら、汚れは長い指がついた前足で払うものなのだ。

子供たち・・・・・、  
(そうだ、きっとあの子供たちもこうやって2本足に化けたに違いない)

すすむはそう信じた。

すすむはもう一度飛び跳ねながら人間になった全身を見回した。二本足で、前足には仲間と手をつなぐことの出来る指があって、お尻には尻尾も無いのをもう一度確認した。鼻は顔のまん中で低くなって髭がない、耳は尖っていないくてちゃんと頭の横にある。新しい指で新しい耳や鼻に触れるのは 妙な感じだ。指先に新鮮さに嬉しさの混じった感じだ。すすむはじっとしてられない。嬉しくて、嬉しくて、嬉しくて。

父母からも、仲間からも、化け方を教えてもらっていない仔狐

としては、上出来の化け具合이었다。

村の子供たちは顔を見合わせた。一人の男の子が少しはなれて遊びの輪を見つめているのに気づいたのである。男の子は戸惑うように、恥ずかしそうに笑っている。初対面・・・・・。でも、確かに以前何処かで会ったことのあるような気がする。いや、間違いなく何処かで合ったことがある。

「村の者がうかれ騒いでいると、山の精がその声に引かれて、若い女や子供の姿で現れることがある」

村の老人たちがこの山間の村に伝える民間信仰である。子供たちはそんな昔話を思いだして顔を見つめ合った。この子はきっと山の神の使いだ。すすむはまだ黙っている。どうやって子供達の中に入って行けばいいか分からない。やがて、ふと気が付いて、歌を歌い出した。あの遊びの歌だ。

子供達はまた顔を見合わせた。何かほっとしたような、何か嬉しいような気分だ。不思議な客人は、彼らと同じ歌を歌った。

すすむは子供達の輪に入った。子供達は、すすむの名も何処から来たのかも聞かなかった。村の長老の話で知っているからだ。すすむも自分がさっきまで狐だったことを話さなかった。皆も自分と同じように人間になったに違いないと信じていたからだ。子供達が打ち解けるのは早い。同じ歌を歌って駆け回ると、今日始めて出会ったのが嘘のようだった。

しかし、遊びの終演はいつも同じ。一人の子供が夕日を気にし始める。そして、それは伝染し、子供達は家に向かって一斉に駆

け始めるのである。

残されたすすむもおじいちゃんの所へ駆け出した。すすむは今日の遊びの一つ一つをおじいちゃんに報告するつもりだった。

いつもは前足で引戸を引っかくのだが、今日のすすむは前足で引戸を開けて家の中に走り込んだ。中にいたおじいちゃんが驚いたように言った。

「おやおや、」

おじいちゃんはこの無作法な珍客に驚いたが、この山の中で退屈を紛らわせてくれそうな期待もある。すすむは二本足で囲炉裏とおじいちゃんの回りをくるくる回った。おじいちゃんは不思議そうに笑っている。すすむも笑っている。お互いにどんな風に話を切り出して良いか分からないのだ。すすむは照れくさくて、いつものように囲炉裏の側で横になり、くるりと丸まった。両膝の間からおじいちゃんの顔が見える。おじいちゃんは聞いた。

「分校の、毛利先生の息子さんかね？」

毛利先生の奥さんが幼い子供を連れて、単身赴任の夫を訪問して来ると聞いたのを思い出したからだ。

すすむは不思議そうに首を振った。おじいちゃんは、すすむのお父さんの名前を思い付くままに挙げたが、その都度、すすむは首を傾げたり、首を振ったりした。

まもなく、おじいちゃんは名前当てクイズに飽きてしまった。

「まあ、ゆっくりして行くといいやな」

おじいちゃんは煙管を手にとって思い出したように続けた。

「もうじきコンが帰って来るからな。遊んでいくといい」

「コン？」

すすむは聞いた。自分がそんな名で呼ばれていたのを思いだしたのだった。おじいちゃんは、初めてこの男の子と共通の話題を見つけた気がして、拾った狐の子の話をした。

この村でも少なくなってきた狐が二匹、お爺ちゃんの友達の猟師にしとめられたこと。たぶん、二匹は夫婦だということ。捜すと、まだ目も開かない仔狐がたった一匹、飢死を免れて生き残っていて、おじいちゃんに引き取られたこと。その子が今のおじいちゃんの唯一の家族だということ。

すすむはおじいちゃんの話をもんやり聞いていた。おじいちゃんは男の子の目に、じんわり涙が浮かんだのに気が付いた。

すすむは姿は違ったのだが、村の人々の間にいて、自分が人間だと信じていたのである。

すすむは生まれて初めて、自分がおじいちゃんたちとは違うと知った。木の葉の魔法は、すすむを人間にはしなかった。おじいちゃんは純朴だが、奇跡や魔法を信じない人間だ。しかし、初めて魔法を見た。

すすり泣く子どもの姿が溶けるように姿を変えて、黄色の毛並の仔狐になった。仔狐の額から、はらりと木の葉が落ちた。

その夜、仔狐はおじいちゃんの家から姿を消した。

あくる日、村は山の精の噂で持ちきりだったが、おじいちゃんは何も話さなかった。村の人々も、山の精と姿を消した仔狐を結び付けて考える者はいなかった。まもなく、山の精の話は人々の

気まぐれの中に消滅した。

しかし、今でもおじいちゃんは見慣れない子どもを見る度に  
「コン？」

そう呼びかけることがある。



スケッチブックを閉じる音は聞こえなかった。すすむは春香の寂し気な沈黙で目覚めた。

今日、物語にはちゃんとした結末がなかった。キツネのコンの行く先が定まらない。

すすむが目を開けたのは春香の手の温みを感じたからだった。すすむを引き寄せるように、すすむの右の肩には春香の右の手がある。すすむは温みをたどるように、春香の右の手から、背中の腕の温み、それから首の向きを変えて、春香に視線を移した。

スケッチブックはすでに閉じられており、春香は左の腕に抱え込んでいる。春香は黙ったままだ。すすむは春香の目を見たが、その目は生気がなく人形の目のようだった。すすむは何か急に恐くなって、春香の手を握った。春香が自分を残して遠くに行ってしまったような気がしたのである。

春香は、突然に揺り起こされたように、驚いた眼付きですすむを見たが、すすむの心を察したように微笑んで言った。

(ごめんね)

すすむはその声を聞きながら、さっきの仔狐の話をを思い出したが、何故そんなものを思い出したのかよく分からない。

(すすむくん。もし、私が普通の人と違っていたら、嫌いになる？)

「違うの？」

(うーん。見た目は同じなんだけど)

すすむには違いが説明しにくい。感受性は豊かで細かい違いや



変化に気付く子だが、幼児らしい寛容性があって、春香の特別な能力を、違いだとは考えてはいない。

（村の子供たちは、コンがキツネの姿のまま、遊びの輪に入れてくれたかしら？ ）

「ぼく、一緒に遊びたい・ ・ ・ ・ ・ 」

（コンは自分が人じゃないと気付いて、どんな気持ちだったのかしら？ ）

「独りぼっち？ 」

春香は話題をそらすようにバスケットを取り上げてじっと見つめたので、すすむも視線を移した。何か物音がする。春香はすすむに物音のするバスケットを渡して、まるで、すすむに何かのクイズでも出すように微笑んでみせた。

すすむがバスケットを開けて取り出したのはキャンデーだった。赤やオレンジ色や黄色のキャンデーが個々の風味を秘めて五つ、透明なビニール袋に入っている。

すすむは春香を見上げた。さっきはこんな物なんか入っていなかったはずだと考えたのである。春香は、すすむからバスケットだけ受け取って筆箱や色鉛筆をしまい込んだ。

すすむは深く詮索するのはやめにして、便利な魔法だなと感心するにとどめて素直に礼を言った。

「ありがとう」

すでに夕刻で、わずかに曇った空全体が赤い。風は無いが、身動きすると、じんと寒さがしみ通って来るようだった。その中で、すすむを導く春香の手だけが温かい。

春香は、すすむと手をつないだまま黙って信号が青になるのを待っていた。すすむはふと気付いたように春香の顔を振り仰いで

「あの狐さんは友達と会えたのかな？」

すすむはさっきの物語の結末を聞いた。春香は、すすむの手を離して、横断歩道の向こう岸を指さした。信号が青に変わっている。そして、言った。

「会えるといいわね」

すすむは駆けだしたが、振り向いて春香の表情を確認することはしなかった。

公園に取り残された春香は思った。

(寂しい子ギツネの春香……)

物語が始まる時に決まった結末があったわけではなかった。すすむと共に物語が進展するにつれて、春香自らの姿が強く投影されて、あの結末に至ったのではないかと思いついたのである。

春香の心の中で、村里の子供たちと同級生の姿が重なった。彼女は同級生と意図して距離を置いているが、それでも同級生たちが彼女に奇異の視線を向けることがある。空想力豊かな年齢の同級生たちである。奇異な視線は思春期の生徒の想像力を突いて伝染病のように密かに広がっていた。

同級生が春香と話すとき、同級生が心に封印した本音が春香の口をついて逆流する。同級生たちは心の中を探られるような不快感を伴う視線を送るのである。嫌悪感が高じて露骨な嫌みや嫌が

らせに繋がることさえある。彼女はそんな関わりを絶って無視しているのだが、同級生として断ち切れずに残る糸がある。

今日は、一人の少女が階段で足を滑らせるというトラブルが起きた。慌てて走っていた時にバランスを崩したためであり、春香には関係がない。しかし、その少女が春香に嫌がらせをしているグループ一人だと言うことが妙な憶測を生んだ。

「春香。アナタが崇ったんじゃないの？」

露骨に問う同級生がおり、その傍らでその生徒を制止する仲間も春香をかばってのことではない。春香に崇られると言うことを露骨に恐れる気配が流れてくるのである。

(馬鹿馬鹿しい……)

春香は冷笑を浮かべるしかないのだが、その表情が周囲の同級生の不安を煽るのである。

春香は職員室に呼び出されて教師から事故の顛末を問われた。むろん、事故の場に居合わせていない春香は答えるすべがない。

彼女は無表情で教師の言葉を聞き流した。表すべき感情がない。彼女は誰かを呪うという能力など持ち合わせては居ないし、相手の意識を察する事についても、流れてくる意識を受け止めて居るのみで彼女が意図して相手の心の底を探っているわけではなかった。

第一、人の心の流れを受け止めて感じ取ることが出来るという自分の能力が気味悪がられることは気付いていて、彼女はその気配を絶っている。ただ、勘が良すぎるという点を隠しようがない

目の前の教師の感情が彼女に流れ込んでいる。

(扱いにくい生徒……)

そういう正直な評価であるが、この生徒が原因でトラブルが起きたときの責任問題に対する不安が絡んでいて、春香を苦笑いさせた。

「もう、帰っても良いですか？」

「ああっ、気をつけてな」

時計を見上げて尋ねる春香に教師は肯いた。時間は4時に近づいていて、春香にとって公園ですすむが待っている時間だった。これが、今日、春香が公園に来るのが遅れた理由である。

この夜、すすむはおじいちゃんとお風呂に入った。

すすむは肩まで湯ぶねに漬かったし、シャンプーしてもらう間、目をつむっておとなしくじっとしていた。おじいちゃんの見るところ、すすむはおとなしいけれど、しょんぼりしているのではなくて、何か考え事をしているようだ。

寢床に入るまで、すすむは何かを考えているようだ。時折り、すすむは祖父母に何かを尋ねたような視線を向けたが、黙りこくってしまう。おじいちゃんやおばあちゃんも、すすむの考え事に、幾つも心当りはあったのだが、すすむと視線を合わせないようにした。

すすむは夢にまで考え事を持ち越した。

(あの仔狐は、ちゃんと仲間に出会えたのかな?)

仔狐が駆ける姿が森の奥に消えた。



あくる朝、目を覚ましたすすむは布団の外を窺って柱時計を確認した。幼くて時間を数字に換算できないが、針の角度を見ることは出来る。耳を澄ませて居間から流れてくるテレビの音に耳を澄ますと、おばあちゃんが居間でくつろぐ時の番組の音声が聞こえる。時計の針の角度とテレビの音声は、おじいちゃんはもう仕事で姿を消した後だと言うことを示していた。もちろん、寂しさは無い。

すすむはおばあちゃんを遊び相手にした。まず、すすむは朝御飯の後の皿洗いを手伝って、お皿は1枚しか割らなかった。それから掃除を手伝ったが、玄関の花瓶を倒しかけただけだ。

洗濯も手伝ったが、すすむが洗濯機に台所用の磨き砂を入れかけたのに、おばあちゃんが素早く気が付いて事無きを得た。おばあちゃんは迷惑な顔もせず、孫が生活に戻ってきたことを喜んだ。

すすむはおばあちゃんがテレビを見るときも側にいて、登場人物が手を握ったりキスをしたりする度にまじめくさって騒いだのでドラマの雰囲気は台無しだった。すすむはそうやって、おばあちゃんにまとわりついて過ごした。

もしも、おばあちゃんが画用紙を買って来たことを思い出さなければ、もっと多くの損害が出たに違いない。おばあちゃんは、すすむに画用紙とクレヨンを与えた。昨日、買物の折りに、孫のために買い求めたものだが、与えるより先に孫は眠ってしまったのである。

すすむは夢中で絵を描いた。今日のすすむの絵には色がついていた。おばあちゃんにはようやく、耳の長さでうさぎの判別は出来たものの、後は、孫が動物を描いているらしいということは理解したものの、犬だかライオンだかパンダだか熊だかの区別がつかない。動物の絵に交じって、画用紙の3枚目の中央に2人の人間の絵があった。左の人物は髪が長くて女性だと分かる。その女性に寄り添う人物は小さくて子供に違いない。二人は仲良く手を繋いでいる。おばあちゃんはその女性を母親かと推定したが、片手に提げた四角い箱には気に止めなかった。

おばあちゃんは、なにやら少し元気になったすすむを不思議に感じながらも、深い詮索はしなかった。

(この子は何かい夢でも見ているらしい)

そう考えて、孫の夢を覚ますことを恐れたのである。すすむの方は嬉しさや期待で一杯だった。また同時に、秘密のある嬉しさと、秘密を話したい誘惑とで、じっとしてはられないのである。すすむはおばあちゃんのスカートの裾をひいた。

「あのね、あのね」

何度も何かを話しかけたが、その都度、

「ううん」

と、首を横に振った。

すすむが昼のおやつを食べ終わる頃、おばあちゃんも忙しくなる頃。おばあちゃんはすすむに水色のジャンパーを着せ、首にはマフラーまで巻いて言った。

「さあ、元気よくお外で遊んでらっしゃい」

おばあちゃんは午後のお皿や花瓶や洗濯物の運命を考えたのだ。また、女性の敏感さで、すすむが外で遊ぶ事と、すすむが元気になった事を関連付けて考えたのかも知れない。

すすむは今日は忘れずに信号を確認して道路を渡った。公園の入り口で中をのぞき込んだが、買い物帰りに一休みするお年寄りが一人いたっきり。

「はるかさん」

すすむはそう呟いてみたが、春香は現れなかった。空を見上げると、太陽は道路の向こうの電柱の高さにある。

「時間まで、だいぶ時間があるのかな」

すすむは春香の顔を思い浮かべてそう呟いてみた。つまらなそうに唇をとがらせていたが、ふと、傍らの石柱に気付いた。公園を外の世界から遮断する夾竹桃の外側を守るように並んだ石柱である。その手近な1つを玩具のスコップでぽこぽこ叩いてみた。

意外にいい音がする。すすむの2歩分の間隔で、そんな石柱が鉄のパイプで手を繋いでずらりと並んで、音を奏でると誘っているよう。すすむは誘われるまま、右手に持ったスコップで石柱の頭を叩いて北に歩いた。すすむが渡る幅の広い車道と市道が交差する北の交差点。

すすむはスコップを左手に持ち替えて、南に向いて石柱の頭をこんこん叩いて歩いた。未だ春香の姿が見えない入り口を通りすぎて南の交差点。すすむが閉じこもる世界は、一辺がたった30秒の長さでしかないのである。交差点から市道が公園を包むように東に伸びて商店街が見える。しかし、すすむにはそこへ踏み込む気になれない。すすむは再びスコップを持ち替えて道に戻った

。夾竹桃のカーテンの目は粗くて公園の中が透けて見える。公園で一休みするお年寄りは姿を消して、公園に人影は絶えた。

すすむが北の十字路に戻って、何かを探るように東の方向に目を転じた。そして、すすむが戸惑う様子を見せつつも、子供らしい冒険心を実行に移したのは、心にすこし余裕が出てきた証拠だろう。

すすむは探検を始めたのである。東に延びる道路の端、道路を隔ててすすむの正面にあるのは花屋さんだった。店先には鉢が幾つも並べてあって、それぞれに名札がついている。少し角ばった文字は礼儀正しさを感じさせる。

きっと、『すすむ』とか『ドナルドくん』とか『ウェンディちゃん』とか、その花の名がついているのだ。真冬だということにここだけは花が咲いて暖かな雰囲気にも包まれていた。ハサミを持ったおじさんが一人、幾本かの花を束ねては白の包装紙でくるむ作業をしている。すすむはおじさんの器用な手つきが気に入った。

その隣はただの白のビルディング。眺め回しても、建物自体に変わった特徴を見つけることができなかった。建物の前に小型の使い古したトラックがあって、何やら荷物を積み込んでいる。すすむは推測した。

(引越しかもしれない)

その隣まで歩くと、もっとただのビルディング。人が忙しそうに出入りしているが、何の変哲もないビルである。すすむはビルの前にいた野良猫で好奇心をまぎらわせた。

その横は、ペットショップらしい。窓越しに幾つも籠があって、胴ばかり長い子犬や、すすむが見たこともない毛並の猫や、緑

のオウムや太ったネズミが居る。すすむが一番気に入ったのは手前の籠の中で眠っている仔うさぎだった。丸まって白い毛並の塊になっているが、大きすぎる耳が隠しきれない。プラスチックのスコップで窓をコンコン叩いて合図をすると、驚いたように、体の中から弾け出したような後ろ足で跳ねて、赤いルビーの眼をすすむに向けた。

すすむはしばらくそうやって、仔うさぎと会話していたが、ふと見上げる空に隣の建物の鉄塔が目に入った。これが、いつも公園の中から見える鉄塔の正体に違いなかった。すすむは隣の建物に移動した。車庫には赤い車が二台と白い車。赤いのは消防車だと、すすむは思った。大きな赤の車体にごてごてといろんな装備がついていて、それらの装備の1つ1つは科学の粋をこらした能力を秘めているのである。すすむは消防車が大好きだった。これを見ただけで、探検の甲斐があったというものだ。すすむはしばらく、消防車を操縦する自分を想像しながら、消防車に見とれていたが、ふと視線をもと来た方にやった。

すすむの探検は、距離にして約40メートルほどだろうか。この車道はまだまだ続いており、右手の公園を囲む石柱も、もう少しづついているようだ。ずいぶん遠くまで来たような気がする。石柱の内側の生け垣に隠れて公園の中が見えない。

突然、すすむは生け垣に向かって兎のように跳ねた。何か人の気配を感じたのである。葉っぱに邪魔されてよく見えなかったが、女の人姿が見えるようにも思える。すすむは何かを確信して



公園の入口へ駈け始めた。春香の声が、すすむの心に響いた。

(あわてて、転んだりしないでね)

すすむは生け垣沿いに公園の外周を回って、いつものように腰をかけた。一番左にすすむ、まん中が春香で、左に魔法のバスケットが座っている。

今日のすすむには話すべき話題に尽きない。すすむの傍らで春香は楽しげにスケッチブックを開いて、目をつむったまますすむの話を楽しんだ。

角の花屋の花の色の事、建物の前にいた野良猫の事、ペットショップのオウムやうさぎの事。最後に、すすむは消防所の話をした。

「その横にね、しょうぼうしゃと、きょうきょうしゃがいたの」

(消防車と救急車ね)

「うん、それ」

(他には、何か変わったことは無かった？ )

「うん、車の家に大きな塔があったの。ほら、あそこ」

すすむは生け垣の上に、消防署の鉄塔を見つけて言った。

(ああ、あれね)

春香も言った。すすむの話に何か想像力を刺激されたいらしい。

(でも、あれはね。消防署じゃないのよ。あれは気球の停留所なの)

「ききゅうって何？ 」

(大きな風船。人が乗る籠をぶら下げて飛ぶの。下の消防車に梯子がついていたでしょう？ 大きな風船が飛んでくると、あのはしごを伸ばして乗り降りするの。消防車には大きなホースも付い

てたでしょう。あれで風船に空気を入れるのよ)

すすむは春香の言葉を疑うことなくうなづいた。

「ふうん」

(大きな窓の向こうに制服を来たおじさんたちがいたでしょう？ )

「うん」

(あのおじさんが気球の切符を売ってるの)

春香はようやく鉛筆を動かし始めた。春香は白いページに大きな丸いキノコを描いた。

キノコの風船だ。風船の下には何本かのロープが下がっていて籠が付いている。

(風が吹いているわ。暖かいそよ風よ)

春香はそう言って、すすむをじっと見つめた。すすむは目をつむって風を感じた。春香の中にとけ込んでいく感じだった。

すすむはふんわり軽くなって、暖かな風に乗った。

すすむが目を開けると、そこは籠の中だった。大きな籠で白くて四角い。蓋が付いているが、大きく上に開いている。

(ああ、そうか)

すすむは気球を見上げてそう思った。すすむが小さくなったものか、バスケットが大きくなったものか分からないが、これは春香の魔法のバスケットの中に違いなかった。



ちょうどバスケットの取っ手の所で、巨大なキノコの風船からさがっているロープとつながっている。バスケットの高さは、すすむの肩の高さぐらいで、すすむが大きく開いたままの蓋から、ちょっと身を乗り出すと下界が見えるのである。

下界は小高い山が3つあって、その中に小さな村が1つある。村人が砂粒みたいな大きさだが、パンダやウサギやカンガルーの姿だと判別できた。気球はずいぶん高いところを飛んでいる。人からずいぶん離れたところを飛んでいる。気球は風にながされて、草原や砂漠や森を飛び越えた。

すすむは風船を見上げた。妙に安定感のある風船で、下降する気配が無い。すすむは背後に春香の気配を感じて振り返ったが、春香も笑って肩をすくめただけだ。二人とも気球の操縦の仕方なんか知らないのだった。しかし、春香はそんなことを気にする様子は無い。すすむと一緒に孤独感は癒される。

意識すれば、やっと気づくほどの暖かな微風があって、気球を

ゆるゆる流していた。しかし、二人には静止した気球の下で景色が流れ去っていくように感じられた。時間が止まったよう。二人で心を通い合わせるこの瞬間が永遠に続くことを願うようだった。

緩やかに変化する景色の中で、3つの山と1つの村が流れ去ると、二人の下に在るのは緑の草原である。

(お日様が近いのに、何か寂しい)

すすむはそう思った。春香が、すすむの心を察するようにそっと、すすむのそばにしゃがんで肩を抱いた。

突然、二人の前に、一頭のカンガルーが胸の当りまで、ぬっと現れた。

彼は小さな帽子をとって礼儀正しく挨拶をした。

「始めまして」

それから、おっこちるように見えなくなった。春香とすすむは顔を見合わせた。ここは空のずっと高いところのはずだと考えたのである。

少し間があって、さっきのカンガルーが顔を出して名乗った。

「ボクはアニスといいます」

帽子も脱いだままだ。それからまた、重力に引かれておっこちていった。二人はあわてて身を乗り出すように下の草原を見おろした。アニスが3回目のジャンプをしたらしく、また上昇して来るのが見える。顔を出したアニスは言った。

「ちょっとそちらへお邪魔していいですか？」

すすむが許可を求めるように春香を見ると、春香は、すすむの

手をひいて後方に下がって、アニスが飛び込む場所を空けた。4回目のジャンプでアニスはバスケットの中にやってきた。見れば見るほど、彼はカンガルーそのものだった。彼はおなかの袋からハンカチを取り出し、額の汗をぬぐった。

（あら、雄のカンガルーのお腹に袋はあったかしら？）

春香が一人考える声が、すすむの頭に漏れ聞こえたが、すすむにはどっちでもよかった。

「こんにちは。ボクは、すすむです」

すすむはアニスに挨拶を返した。

「始めまして、私は春香です」

春香も言った。

「ボク、実は、仲間を捜してるんです」

「カンガルーさんたちなら、さっき草原の村で跳ねてたわよ」

春香は村を思いだして言った。

「ああ、それならリンクたちだ。でもボクはあいつらの仲間じゃないんです。あいつらがそう言うんです。ボクも何かそんな気がするんです」

春香とすすむが首を傾げているとアニスが続けた。

「ボクは何に見えます？ 」

「かんがるう」

すすむの言葉にアニスは少し寂しそうにため息をついた。

「でもリンクたちは、ボクみたいには高く、空まで跳ねたりしないんです。だからボクはカンガルーじゃないんです」

「それで、仲間を捜しているのね」

春香はうなづいた。アニスもうなづいた。少し寂しそうだ。こ

のバスケットの中には彼の仲間はいなかったし、仲間の居所を知る人もいなかったからだ。

「ずっと遠くにいけば会えるよ。この風船はきっとずっと遠くまで、友達の所まで行くよ」

すすむがそう主張した。すすむは一生懸命にこの新しい乗客を慰めようとしているらしい。春香はそう感じて、すすむに同調した。

「そうよ、ご一緒しましょう。私たちもさびしかったところだから」

こうして、アニスが仲間に加わった。

アニスは無口な仲間だ。じっと黙って下界を見回している。間もなく気球と地上の間に霧が出て視界を遮ったかと思うと、すぐに気球も濃い霧の中に入ってしまった。ミルクの香りのする大きな雲の中だった。視界が遮られてしまうと、気球は静止しているのやら、流されているのやら、ただ単にくるくる回っているのやらよく分からない。不安な沈黙が続いたが、やがて目の前が、まばゆいばかりに赤く明るくなって、3人は期待に目を細めた。朝日だ。日の光が幾本もバスケットに注いで、気球はミルクの雲を抜けた。気球やバスケットや、3人の顔が、朝日の色に染まって、まぶしく輝いている。

視界が開けると、地上は山の連なりである。最初の丸い山と違って尖ってごつごつした岩の山だった。白い雪に覆われているが、山腹の一部は露出して灰色だ。太陽はそんな山の1つの峰から顔を出したところだ。



3人はしばらく声も立てずに景色に見入っていたが、やがてアニスが大きな二つの耳をぴくんと立てた。何かの音が聞こえたのである。声はすぐにすすむと春香の耳にも入った。

「ちょっと、待って」

気球の後ろからそんな声が聞こえる。すすむたちが、振り返ってみると、片手に鞆を持ったペンギンがいた。頭にピンクのリボンをつけた青いペンギンだった。彼女は空を飛んでいるのだが、鳥が大気を切って飛ぶという感じではなく、氷山の上でもぴょんぴょん跳ねるように、小さな羽をばたばたさせて、大気の中を跳ね飛んでくるのである。

「ああ、やっと着いたわ」

彼女はバスケットの中に入ると、鞆を床に置いて一人そう言った。

「さっきね、雲の中で迷ってどうしようかと思っていたら、明るい光の中にこの気球の影が見えましたの。ああ、これだわって思いましたわ。それで一生懸命追っかけて来ましたの。やっと雲を抜ける事が出来ましたわ」

彼女はおしゃべりなペンギンだ。彼女が息をつく暇を見つけて、すすむを初めに、3人が挨拶をした。

「こんにちは、ボクすすむです」

「始めまして、私は春香です」

「ボクはアニスっていいます、よろしく」

「はい、私の名前はルーファです」

「ご旅行中ですか？」

春香が聞いた。ルーファの鞆は擦り切れかけていて彼女の長旅を想わせる。

「ええ、仲間を捜しているんです」

「ペンギンさんなら、氷の山の上でしょ」

すすむは以前見た絵本を思いだして言った。

「私がペンギンに見えますか？ 子供の頃に、私は氷山の上で、ペンギン達によく言われたんです。『空をぴよんぴよん跳ね回るなんて無節操だって。そんな奴はペンギンじゃない。』って、私も何かそんな気がしてきましたの。それで仲間を捜して旅をしてるんです」

「ああ、ホクと同じだ」

アニスがそう言った。そして、ルーファも、すすむの旅に加わることになった。

幾つも連なった雪の峰を越えると青い海が広がった。深い海である、しかし、その底を歩く蟹や、揺らめく海草までちゃんと見える。突然、右手の空に気球に届くくらい大きな虹が見えた。鯨の群れが潮を吹き上げているのだった。虹が空一杯に広がったかと思うと、鯨達はいっせいに深い海の底に潜って行った。

「あれっ？」

すすむは不思議そうな声を上げて海の中ほどを指さした。いまは、他の生き物の気配も絶えた広い海面に、一頭の大きな鯨が残されていた。他の仲間に取り残された鯨だ。彼は小さな潮を吹き上げた。小さな潮に小さな虹。とても仲間の作り上げた壮大な虹とは比べ物にもならない。なにかその鯨が寂しそうなのです

むが声をかけた。

「ねーえ。鯨さーん」

「おーい。俺の事か？。俺は鯨じゃないんだ」

アニスとルーファが顔を見合わせた。自分達と同じ事を言う  
と思ったのである。

「でも見た目は鯨じゃないか」

アニスがそう尋ねた。

「尾鰭が鯨の力の源なんだ。俺の尾鰭は半分しか無いんだ。潮も  
半分、泳ぎも半分。だから俺は鯨じゃないんだ」

実は、すすむ達のいる上空から見ると、その鯨の尾鰭の右半分  
が欠けているのがよく見える。生まれつきの物か、事故でそうな  
ったのかよく分からない。でも、すすむ達は何か悪いことのような  
気がして、それに気づかない振りをしていたのである。

「私たちは仲間を捜しに行くの。あなたもご一緒にどお？」

ルーファがそんな提案をした。バスケットの中の全員は誰も反  
対しなかった。むしろそうするのは当たり前のように感じた。この  
尾鰭の欠けた鯨がひどく哀れなもののように感じられたのである  
。保護してやるのが義務ではないかとも感じたのである。

鯨の名はカナーンと言った。こうして、カナーンも仲間という  
言葉に釣られて同行することになった。でも大きなカナーンはバ  
スケットには入らないし、重すぎるようなので、泳いで付いて来  
ることになった。幸い気球の速度はカナーンがついてこれるスピ  
ードだ。

この気球の行先に、仲間が居るのかも知れない。そういうすすむの思い付きは、皆の信念に変わって、旅行を続けた。しかし、果てしない海原である。島影一つ無い。みんなはだだぼうっと、いつか前方に見えるかも知れない陸地を見ている。すすむはちょっとその思い付きに飽きて、同乗者に視線を移した。カンガルーじゃないカンガルーのアニス。彼は大きな耳を前方に向けて木の葉が風に揺れる音を聞き逃すまいとし、鼻を時々くんくんして、花の香りを捜し求めている。ペンギンじゃないペンギンのルーファ。彼女は時折跳ねて行って、また、がっかりして帰って来るのを繰り返している。海の上、鯨じゃない鯨のカナーンは黙々と泳いでいる、たぶん何処までも、ずっと。

(それじゃ、ボクはいったい何だろう)

すすむは幼い思考でそう思った。

そうして、春香は？。春香は、すすむの事なんか忘れてしまったように、何か寂しそうに前を向いている、でもその目は虚ろで何かを見ている様子はない。すすむは春香の手をぎゅっと握った。春香が目がさめたように、すすむに視線を戻した。春香はいつもの笑顔を作ったが、笑顔で目を細めたのと、うつむいたのとで、涙があふれて頬をつたって、すすむの手に落ちた。その時、すすむは春香の心の中に、ひどく孤独なものを感じたが、それも一瞬の事で、春香はすぐに恐れたように心を閉ざした。

この時、アニスの耳が動いた。

「何かの音がする。気球の上だ」

ルーファがぴよんぴよん跳ねて行って、気球の上で悲鳴を上

げた。

「大変よ、空気が漏れているわ。穴があいて、気球がしぼんじやう」

キノコの気球は長い旅には耐えられないものらしい。確かに、すすむや春香にも空気の漏れる音が聞こえ、気球がしぼんで行くのが見える。だんだん海に落ちて行く。ここは海のまん中だ。まだ、陸地の影も見えない。

「ボクは泳げないんだ」

アニスは悲しそうに叫んだ。

「私だって海の向こうまでは跳べないわ。泳げないわ」

ルーファも慌てている。春香もしっかりと、すすむを抱いた。その時に皆から忘れられていたカナーンが言った。

「みんな、俺の背に乗るといい」

「そうだ、カナーンがいた」

気球の乗客は鯨のカナーンを思いだした。

キノコの気球は海に沈んだ。乗客のいない気球は海の底まで沈んでしまった。4人は無事カナーンの背の上だ。春香はほっとして、すすむを抱く腕を解いた。

すすむがカナーンの背に降り立つと、カナーンの背が何か小刻みに震えている。カナーンの背にうつ伏せになって頬を付けると一層よくわかる。

「ああ、」

カナーンは嬉しそうに声を上げた。

「ああ、ありがたい。この俺が誰かの役に立っている」

カナーンの背の4人は、自分のうかつさに気づいた。4人はカナーンに救われたのだ。

「ごめんなさい」

すすむはカナーンの背に頬を付けたまま言った。お礼より先に、そう謝らなければならないような気がしたのである。

「ごめんなさい。尾鰭が欠けてるから、あなたの事をかわいそうな鯨だって思ったの」

すすむたちはようやく、カナーンと出会ったときから、カナーンが彼らと同格の人格で、同格の仲間だったということに気づいたのである。

「ああ、ありがたい」

カナーンは繰り返していたが、やがて背中の上で繰り返し詫びている、すすむに気づいて言った。

「いいよ、いいよ、それ以上。私は嬉しいよ。嬉しいんだよ」

カナーンの背が一段と大きく震えた。4人はカナーンが泣いているのかも知れないと思った。

事実、カナーンは泣いているのだ、今までに大きな体に溜め込んで来た悲しみや寂しさを涙と一緒に流しだしているのである。突然、カナーンの体がぷかりと浮いた、空気中にだ。悲しみや寂しさを全部流し去ったので、彼の体はずいぶん軽くなってしまったらしい。カナーンは目だけぎよろぎよろ動かした。海面には、空に浮かんだ自分の姿が映っている。

「うーん。今度こそ本当に鯨じゃなくなった気がする」

そんなカナーンのことを聞いたペンギンのルーファーが無節操



に空中を跳ね回りながら笑った。

「私たちと一緒に。一緒にね」

「でも、いいね、いいね。こんなに気持ちの良いのは初めてさ」

カナーンは満足そうに空中で力強く尾鰭を振った。背中の人も、もうカナーンの尾鰭は気にならない。

「さあ、仲間を見つけに行こう」

4人はカナーンの背に乗って遥か彼方の陸地を目指した。カナーンの尾びれは力強く大気をけり出した。先ほどの気球とは比べ物にならない早さで飛んだので、陸地はすぐに見えてきた。

結論から言うと、皆はそこで最初期待した物を見つけることは無かった。

アニスの期待した天まで跳ねるカンガルーは居なかったし、ルーファアの期待した空飛ぶペンギンも居なかった。カナーンが期待した尾鰭の欠けた鯨もいなかった。

だけど、みんなは失望もしなかった。アニスの回りには他の4人、ルーファアの回りにも他の4人。カナーンも、すすむも、春香も、みんなずっと前から、自分が仲間に囲まれていたことに気づいたのである。

「ああ、みんなが、仲間ってこんなに近くに居たんだねえ」

カナーンがしみじみと言ったので、みんなは顔を見合わせて、こくりとうなづいた。

パタン。

春香は鉛筆を止めて、静かにスケッチブックを閉じた。ふと気付くと、すすむが自分を見つめている。すすむの心を意図して探るわけではなく、すすむの感情が春香に伝わってくる。

無垢な明るい驚きである。驚きはその理由まであけすけに伴っていて、春香を微笑ませた。この子は春香に、こじんまりとした手の平ほどの世界を語るというイメージを持っていたらしい。そうかも知れない。花の女神として、すすむと旅をした時も、子ギツネのコンの体を共有して自然の中を跳ね回った時にも、彼女の運命に選択肢はなく、閉じられた世界で、物語は行き止まりの結末だった。今日は様々な世界を旅したばかりではなく、旅を終えた春香に様々な未来があり、その1つ1つに希望が光って見えるのである。

(ありがとう)

春香はすすむの心にお礼の言葉を伝えた。この子のおかげで閉じていた心が開けているのが感じられるのである。

すすむはじっと春香に視線を合わせたままだ。春香はまるで話題でもそらすように視線を外し、視線の方向に右の腕を伸ばした。雀がいる。雀はしばらく首をかしげたり、何かチュンチュン呟きながら春香と見つめ合っていたが、ふと気まぐれでも起こしたように飛んで来て、春香の回りをぐるぐる回ったかと思うと、人差指に止まった。その雀の仕草は、すすむが初めて春香と会った

時のようだ。

雀は春香の指の上で、すすむを見ながら首を傾げて鳴いている。挨拶をしているのだ。春香は左の手の指先でクッキーを潰して、すすむの手に乗せた。新しい友達にあげなさいという意味だ。

すすむと雀はしばらく一緒にクッキーを食べたのだが、雀は、すすむが名前をつける前に気まぐれでも起こしたように飛び去った。

(ピーちゃんは飛んでいっちゃったわね)

春香はそう言った。そうだ。すすむは今の雀に『ピーちゃん』と名付けるつもりだったのだ。

春香は、すすむに笑顔を近づけて言った。

(すすむくんは私が怖い？ )

言葉のニュアンスではなく、とまどい、恐れ、寂寥感、物悲しい艦上が言葉に混じって流れてきた。すすむは首を傾げた。すすむは返事に困ったのだ。すすむはこの魔法使いに、憧れに似た好意を持っているし、この好意は、二人が心を共有しているので、嘘偽りなく春香に伝わっているはずだ。

(ごめんなさい。変なことを聞いたわね)

春香は、満足の感情を伝えながらも元気なく笑った。

(でも、ありがとう)

春香は、すすむを引き寄せて頬をあわせた。

春香の柔らかな腕が、すすむを包み込んで、すすむは自分が春香のなかにとけ込んで行くような気がした。すすむは春香の中で、真っ暗で冷たい静寂に接した。静寂は大きさも分からないほど

大きく、その深さも、すすむの理解を越えるほど深い。すすむはその静寂に落っこちてしまいそうな気がして恐怖した。春香は、すすむの恐怖に気づいて、彼の体を放した。心を切り放して、すすむを孤独からかばったのである。

春香はそっと詫びた。

(ごめんね。恐かった？ )

すすむは黙っていた。実際に静寂が恐かったし、春香が、すすむと同質の寂しさを持っていて、その寂しさが、すすむの物、それ以上に深いことに驚いてもいたのである。

「春香さんも寂しいの？ 」

すすむは尋ねた。春香は寂しく微笑んで答えない。

赤い空の遥か彼方で、どこかの工場の終業を知らせるベルが響いている。二人は立ち上がって歩き始めたが、その歩みは考え事をしているようにゆっくりだ。

信号の所で、すすむは春香の手を握った。春香は、すすむが自分を励ましていることに気付いて、ほっと肩から力を抜いたようにため息をついた。そして、元気よ、と軽いウインクをして見せて、今日最後の魔法を使った。春香が、すすむに青く変わった信号を指さしたかと思うと、真っ黒なアスファルトの道路にキラキラ輝く橋が架かった。天の川のような。すすむは星屑を踏みしめて橋を渡った。星屑が足元できゅうきゅう鳴るのが面白い。すすむが渡りきって振り返ると、すでに春香の姿はなかった。すすむにはすすむの道。春香には春香の道。

台所のおばあちゃんは、帰宅した孫が黙ったまま自分を見つめているのに気づいた。

「何か欲しいの？ ミルク？ お菓子はご飯の後まで待ちなさい」

おばあちゃんは鈍い。も・の・す・ご・く・鈍い。すすむは一生懸命に心の中で呼びかけ続けたのだった。

「こんにちわ」

それなのに、おばあちゃんはちっとも感じてくれないのだ。おじいちゃんが帰って来ると、すすむはおじいちゃんにも試した。

「はあーん。すすむ」

おじいちゃんは何かを察する口ぶりだ。さすがはおじいちゃんだ。

「何かいたずらしたろ。怒らないから話してごらん」

すすむは慌てて首を横に振った。やっぱりおじいちゃんも鈍いんだ。

すすむは少しがっかりしたが、考えようによっては、春香との秘密の価値が高まろうというものだ。心で話せるのは、春香と、すすむだけなのだ。

すすむは眠くなった自分に気づいて、パジャマに着替えた。ちょっと苦労したが、自分でパジャマのズボンをはいて、上着のボタンをとめた。今まで着ていた物はちゃんと、たたんだつもりだ。これらは全て良い子でいるための作業だ。祖父と祖母はそんな孫の姿を見て、孫が元気になったのを確認し合った。この

孫が、今は父母の事を忘れていないとささやき合った。そしてなるだけ孫の明るさを維持するために、父母の事は忘れたままに、決して触れないようにしようと結論した。

しかし、おばあちゃんは、孫が元気になった秘密を知りたいとも考えた。

寢床に入ったすすむは、お父さんとお母さんに魔法を使ってみせる夢を見た。

お父さんは笑っている。お母さんは拍手しながらすすむを見つめている。



あくる朝、すすむはいつもの時間におばあちゃんに起こされて、大きなあくびをして目を擦った。台所から朝食の香りが漂ってくる。すすむの夢の中に女の人が出てきたのだが、それがお母さんだったのか、春香だったのか、よく思い出せない。懐かしさという点では母親を思い起こさせ、安心感という点では春香を思い起こさせるのである。

すすむは、いつものように起きて、いつものように食事をして、いつものようにおばあちゃんにまわりついて過ごした。

(この子はたしかに元気になったようだ)

おばあちゃんはそう考えたが、疑問もわく。

(でも、どうして? )

すすむはおばあちゃんの足元を駆け回りながらも、時計を気にしている。公園へ出かける時間を計っているのだ。おばあちゃんは孫に友達が出来たことに気づいた。

(きっとそうね、この子は友達を見つけたのでしょ)

おばあちゃんはそう考えた。

「すすむちゃん。お友達が出来たのね? 」

おばあちゃんは、すすむの前にしゃがんでそう言った。すすむはおばあちゃんの勘の良さに驚いてしばらく黙っていたが、やがて、春香との約束を思いだして首を横に振った。でも、すすむの嘘は表情に現れてすぐにばれる。

「お友達をおばあちゃんにも紹介してくれないかな」

すすむはじっと黙りこくっているのだが、気分を害した雰囲気

はない。

「何処の子？」

すすむはうつむいて、おばあちゃんから視線をそらした。

「なんて名前なの？」

おばあちゃんはしゃがんですすすむと視線を合わせた。

「男の子かな？ 女の子かしら？」

そういった質問の度に、すすむは首を横に振ったが、質問の度に、だんだん嬉しさがこみ上げて表情にまで出て来るのだった。すすむは友達をおばあちゃんに紹介したいのである。ただ、すすむは体を訳もなくくねらせたり、おばあちゃんのひざに顔を埋めたりして、約束を守って、秘密を心の中にしまい込んだ。

おばあちゃんは、すすむのわき腹を指でつついて督促した。

「言っちゃいなさい」

すすむは頭を抱えて悩んでいるが、その表情は嬉しそうで、今にも口から何かが吹き出しそうだ。

「女の子ね。すすむちゃんの恋人かな？」

ついに、すすむは少しうなづいた。おばあちゃんをついに孫に友達が出来たことを、孫の口から確認したのである。

「あっ」

すすむは小さな悲鳴を上げて、隣の部屋に逃げ込んだ。すすむは春香との約束を、ほんの少しだが破ってしまった。

すすむは夕方までの時間を、その部屋で絵本と一緒に過ごした。おばあちゃんといると、秘密がお腹の中から飛び出しそうだ。

おばあちゃんもそれ以上の詮索はしなかった。何よりも、今の

孫を刺激し過ぎてはいけない。孫の夢を覚ましてはいけない。

すすむは絵本と時計を見比べるようにして、絵本を読んだ。時計の文字の読み方は知らないが、針がくるくる回って時間の経つのは分かる。おやつを食べた後、ちょっとお腹がすいた頃。出かける頃合だ。すすむはおばあちゃんに知られないように、そっと外出着に着替えた。そっとバケツとスコップを準備して、玄関で靴を履いた。そっと音を立てないようにドアを開けるとおばあちゃんの声がした。

「信号はちゃんと見て渡るのよ」

すすむは慌ててアパートを飛び出した。

いつもの時間、いつもの公園に、春香の姿がない。

すすむはふと、おばあちゃんに春香のことを話しかけたことを思いだした。僅かだが、すすむが約束を破って春香の事をおしゃべりしそうになったのを思いだした。

(きっと、ぼくが約束を破ったから……)

すすむは春香が現れない理由を決め込んで、急に不安になった。気まぐれな風が公園を吹き抜けた。

念のため、すすむは公園をもう一回りした。すすむはもう泣きだしそうだ。公園の中央で辺りを見回したが、誰もいない。すすむは友達を失ってしまった。

すすむは公園を飛び出した。

すすむは昨日のように公園前の歩道を南北に行ったり来たりした。今日のすすむは南の十字路を選んだ。東の方へ道路が伸びているのは北と同じだが、南の道路の方が小さな商店が多い。南の方がやりがいがありそうだと、すすむは探検の重要性を位置づけたのである。春香を捜しに行こうという決心を、そんな理由にすり替えた。約束を破って春香と会えなくなったとは思いたくない。

十字路の端の店、こことよく似た店に、お父さんと連れられて行ったことがある。写真を売る店と見当を付けた。店の中には大勢の人がいて、どの人が店員でどの人がお客だか判別できない。

ショーウィンドウの中に写真のパネルがいくつもある。すすむは小犬の写真が一番気に入った。3匹の小犬が一塊になって一匹ずつの境がハッキリしない。まん中の小犬が一番ぬくぬくしていて気持ち良さそうに目を閉じている。すすむは三匹に左から順に「すー」、「みー」、「むー」と名前を付けた。

写真店の隣は薬屋だが、トイレットペーパーから防虫スプレーまで品揃え豊かで、すすむには何を売る店かよく分からなかった。男が2人と女が1人ガラスのドア越しに見え、全員白衣を着ている。すすむは顔をしかめた。以前、歯医者に連れて行かれてから白衣が大嫌いだった。すすむは慌てて立ち去ることにしたが、店の前の兎の像に「ウーさん」と名付ける事は忘れなかった。

その隣は、  
ケーキ屋だ！！

すすむは苺のケーキとコーヒー味のシュークリームが大好きだ。それ以外にも、すすむが見たこともないケーキや、いろんな形のチョコレートやキラキラ光る包装紙で包んだキャンデーが数え切れないくらいある。でも各々のお菓子には文字のついた札が付いていて、すすむが命名するまでもなく、何かややこしい名前が付いているに違いなかった。すすむが生クリームの白さや、カステラのしっとり重たげな黄色、スライスしたキューイフルーツの鮮やかな緑と黒いつぶつぶを夢中に見ていると、若い女の笑い声がした。

「坊や、どれが一番美味しそう？」

3人の若い店員がショーウィンドーの上から、すすむを見おろすように笑っているのだった。すすむは照れくさく笑ってさっさと隣の店に移動した。すすむの背後でもまた、3人の女店員の笑い声がした。その笑い声は、すすむを気恥ずかしくはさせたが、明るくて悪い印象はなかった。

ケーキ屋の横、細い路地を挟んであるのはパン屋さんだ。大きいやら小さいの、柔らかいのやら固いの、白のクリームの付いたのやら赤のソーセージを乗せたの。色々あって迷いそうだ。実際に、中のお客さんはトレイを持ったままあれこれ迷っている。店の奥には白の作業着のおじさんが一人いて、オーブンから熱々のパンのトレイを出したところだ。おじさんはオーブンからパンを出しては、隣のドアの付いた棚の中に移す作業をしている。頭に残った僅かな毛が汗に濡れておじさんの頭にぴったり貼り付いているのが暑そうだ。

焼き立てのパンの香りに飽きると隣に移動した。小さめのショーウィンドーにはコーヒーやジュース、サンドイッチやスパゲティがある。すすむはこういう物を提供する店らしいと推測したが、店の中はよく見えなかった。すすむは芳ばしく美味しそうな香りだけ味わった。

その隣は喫茶店と細い路地を挟んで本屋がある。すすむはさっさと通り過ぎた。絵本はお母さんを思い出させるからだ。

本屋の隣はおもちゃ屋だ。おじいちゃんが買ってきてくれた砂遊びのスコップやバケツはここで買い求めた物かも知れなかった



。店の中にはお父さんに手を引かれた女の子。すすむと同じくらいの年齢の女の子だ。親子は人形を買うらしい、女の子より娘を喜ばせようとする父親の方が熱心に人形を選んでいて。女の子が、すすむに気づいて一瞬きょとんとしたが、すぐに愛想良く微笑んだ。すすむは恥ずかしさにまた店の前を離れた。

おもちゃ屋の横は、奥行きがあり見上げれば空が見える空間がある。すすむは、こういう場所には車が止まっていることを知ってはいたが、今は一台の車もない。

駐車場の横にあるのは大きな白いビルディング。一目で病院と分かる。すすむは注射が嫌いだった。風邪の時に喉の奥に塗られる薬も嫌いだ。

すすむは病院に背を向けてもと来た道に戻り始めた。すすむは大勢の人とすれ違っている。すすむを追い越して行く人もいれば、すすむが自分の視界を妨害する人を駆け足で追い越すこともある。

妙な話だが、すすむは今日初めて、この街に、こんなにもたくさんの人々が居たことを知ったのである。

すすむはパン屋まで戻って、その横の路地に入った。そこは飲物の自動販売機とゴミ箱の林である。

林を抜けると狸がいた。スコップで叩くとこんこん音のする硬い狸だ。狸は、すすむより頭一つ分高くて、少し口を開け首を少し傾げて穴の開いた目でぼんやり何かを見ている。

突然、ガチャガチャうるさく、店員が大きな箱を下げて店から出てきた。うるさいのは箱の中のビール瓶だ。すすむはビール瓶に追い立てられるように酒屋の前を離れた。すすむは道路のまん

中でくるくる辺りを見回した。道の両側に店が並んでいる。

車はここまで入ってこられないらしい。でもこの人の群れは何だろう。店の数が多すぎるので1つずつ詳しくチェックするのは止めにした。

食器や鍋や花瓶を並べた店。

テレビが何台も並べてある店。

赤や黄色の毛糸の束を売る店。

おしゃれなマネキンの並んだ洋服のお店。

すすむは1軒の画材店でスケッチブックを見つけた。春香の持っているのよりずっと小さいがすすむが持つには充分なように思われた。

スケッチブック？

わずかな間をおいて、すすむは春香を思いだした、公園を思いだした。ここは何処だろう？。

すすむは大人の群れの中できょろきょろした。すすむは道も方向も失ってしまっているのである。すすむは方向も知らずに駆け回った。途中、何度も大人の人にぶつかったが、すすむは駆け回るのを止めなかった。

「はるかさん」

すすむはつぶやいた。すすむのぶつかった男の人が、すすむを不思議そうに見た。

「はるかさん」

すすむは呼んだ。道を歩く女の人何人が、すすむを振り返った。

「はるかさん」

すすむは小さく叫んだ。店の奥から店員が顔をのぞかせた。

すすむは立ち止まって叫んだ。

「はるかさん」

(……！)

言葉ではないのだが、心の中に感じたものは、すすむが迷っておびえる心を察した春香の感覚だ。どこかで、すすむの存在に気付いてくれたらしい。

「すすむくん」

春香の声が、すすむの耳に響いた。優しい、よく響く声だ。声の方向を見ると、今日は赤いカバンを手にした春香が、すすむのことを心配そうに見ている。息をはずませている所をみると、どこかから駆けて来たものかもしれない。

すすむは手の甲で涙を拭ってゆっくり春香に近づくと、スカートの裾をしっかりと握って春香を捕まえた。すすむにはこの大勢の大人の中で、春香だけがたった一人の仲間のように思えたのである。

「さあ、公園へ行きましょう」

春香は、すすむを誘導して行く。

すすむはようやく、いつもと違う感覚に気づいた。春香の声を耳で聴くのは初めてなのだ。

すすむは春香を見上げたが、春香は意味ありげに微笑んだ

けだ。すすむの涙が収まりきらないのを見た春香は、繋いで握る手の力に強弱を付けて、すすむにメロディを伝えた。ギターの弦を爪弾くように、1つ1つの音が歯切れ良く明るい感情を伴って、すすむを酔わせた。

すすむに新鮮な驚きが湧いた。春香がこんな朗らかな感情を伝える人だったのかという思いである。すすむの思いを伝え知った春香は苦笑いをして、繋いでいた手をふりほどき、すすむの肩に手をかけて、もっと寄り添って歩いた。すすむから伝わってきたのは、優しくて、内気で、慎重で、引っ込み思案、一言で言えば、根暗な少女の印象である。自分が今までこの子にこんな印象を与えていたのかと驚きもし、そんな印象にも関わらず自分を慕ってくれているすすむにほほえましさを感じてもいる。

そして何より、分厚く重ねてしまった仮面や衣装を取り去って、ありのままの自分を生きる事が出来る開放感を味わっているのである。

路地を北に二つ分抜けると、病院が見え、その横の駐車場ごしに公園の生け垣が見えた。生け垣沿いに公園を回って、いつものように腰をかけた。一番左にすすむ、まん中が春香で、左には今日はバスケットの代わりに赤いカバンが座っている。すすむはもう一度春香を見上げてその存在を確認した。

紺のブレザーに、首の所には赤のネクタイ。スケッチブックは持っていないし、バスケットも無いが、春香に間違い無かった。

(ごめんなさい。待たせたわね)

春香は明るく詫びた。春香はまだ息を弾ませていて、髪が乱れていた。寒空だというのに、額に汗を浮かべて白のハンカチで拭った。

「はるかさんはどうして夕方にならないと来ないの？。魔法使いは夕方にならないと出てこれないの？」

(私は学校があるもの。学校が終わるまで来れないわ)

すすむは学校っていうのは厄介な物らしいな。と思った。

(そうかもしれないわね)

春香は笑って、すすむの額に自分の額をつけた。すすむの中に「学校」のイメージが流れ込んでくる。

学校。すすむが見たこともないほど大きな遊び場の端に、コンクリートのビルディングが幾つか建っている。建物の中は幾つもの部屋に仕切られて、部屋の中では、大人の人が一人立っているほか、春香たちは幾つもの列を作って行儀よく座っている。手を挙げて何かを話している人、机の上で字を書いている人、本を呼んでいる人、隅っこでは鼻毛を抜いているのまである。

春香もいる。春香は部屋の中央より少し後ろで熱心に、黒板に数式を書く先生を見ており、教科書の端っこに先生の鼻を誇張して似顔絵を描いた。春香は数学が苦手なのだ。

場面が変わると食事の風景だ。あちこちに幾つものグループが出来ていて、みんな何か楽しげに話ながら食事をしている。春香は？。

春香は屋上で、デザートのリントををかじっている。一人で何か遠くを見ている。

また、場面が変わる。校庭を遊び回る男の人や教室の中で雑誌を見せ合う女の人たちがいる。春香は・・・・・、数人の女の人と話をしている。遊びにでも誘われているのかも知れなかったが、春香は笑いながら手を横に振って、一人で本を読み始めた。

次の場面は帰り仕度をした人たちだ。春香は別の部屋に入っていく。本がたくさん並んだ部屋だ。春香は何冊かの本を念入りに選んで、隅っこの誰もいない机を選んで本を置き、座って本を読んでいる。向こうの机にグループを作って座った数人が春香を見



て何かひそひそ話している。春香はそれに気づかない。春香は彼らに気づかない振りを装っている。

どの場面も、春香は1人だ。春香は人を避けている。何か人に知られたくない秘密でもあるのだ。

春香にとって衝撃的な事であつたらしい。男の人のイメージと言葉がすすむに伝わった。

「藤森。明日、お母さんと一緒に相談しよう」

藤森という呼び名が、春香と春香の家族を含めた呼び名だと言うことは分かる。その呼び名に春香の不快感や不安感を伴っているのは何故だろう。

春香の秘密？

春香がすすむに隠しておけと言ったこと？

春香が魔法使いだと言うこと？

すすむは額に風を感じ、前髪が額を撫でるくすぐったさに目を開けた。春香はブランコで風を感じながら、運動に疲れた体を気持ち良く冷やしているのだ。すすむはその春香の膝の上だ。春香は時々軽く地面を蹴って、鎖に絡めた左腕は、すすむの体を支えている。

すすむは春香の体温を背中に感じながら、首を傾げた。

いつ、ブランコまでやって来たのだろうか？

いつ、春香は、すすむを抱き上げたのだろうか？

春香はただ微笑んで言った。

心でお話をするだけではなくて、こうやって移動するのも春香の能力の1つらしい。

(今日はお話する暇が無かったわね)

日が傾いてブランコの影が長い。すすむと春香の影も長い。もうお別れの時間だ。

二人はいつものように公園の入口で手を振って別れた。

(日曜日には朝から遊びましょうね)

春香は今日の遅刻を穴埋めする約束をした。そして、ふと思いだしたような調子で続けた。

(その代わりに、私の事は、誰にも秘密よ)

すすむは春香に付いて行きたい衝動に駆られたが、独りぼっちで横断歩道を渡った。

なんとなく、孤独感が自分だけのものではないことが分かる。春香も寂しいということと、春香がそれに耐えているということが、すすむに少し勇気を与えた。

すすむが帰宅すると、おばあちゃんはいつも通り食事を作っていた。台所からおばあちゃんの仕事の音がする。お鍋の蓋が沸騰したお湯の上で踊る音。包丁がまな板を叩く音に、キャベツが細くなる音が混じっている。それから油のじゅうじゅう鳴る音。これはコロッケの音だ。すすむは期待を深めた。コロッケがハンバーグとスパゲティの次に好きなのである。すすむはコロッケを見に行ったが、視線はおばあちゃんと合わせないように巧妙に避けた。おばあちゃんと視線を合わすとまた、春香のことを聞かれるからだ。

でも、おばあちゃんは、すすむに何も聞かなかった。すすむも秘密をしゃべらないように、おばあちゃんとは距離を置いた。

おばあちゃんは食事を待つ孫がテレビを見ながら上げる屈託の無い笑い声を聞いて、友達の効果を確認した。落ち着きも出てきているようだ。以前、すすむは煩雑にチャンネルを切り替えた。すすむは椅子にじっと座ったまま画面から目を離さずにいる。すすむは番組に熱中しているのである。

おじいちゃんが帰って来ると、おばあちゃんはおじいちゃんと、ひそひそ話をした。夕刻の祖父と祖母の話題は、すすむの友達の話題だ。おじいちゃんは手招きして、すすむを呼ぶと、すすむにこっそり言った。

「男と男の約束だ。黙っているからお友達の事を教えてくれないか？」

おじいちゃんも、おばあちゃんも、悪気は無い。2人とも、す

すむが元気になった訳が知りたいのである。しかし、すすむは迷惑に思った。すすむはおじいちゃんの手を振り解いて、部屋の隅まで逃げて行った。あまり春香のことを聞かれるとつい喋ってしまいそうだ。

いや、むしろ、すすむの方が、心の中にたくさん溜った秘密が口を開けると出てきそうなのを必死に押え込んでいるのである。

すすむは寢床に逃げ込んだ。

親を交えた面談など別に珍しいことではないが、その時間に制約を受けた。まだ全ての生徒は下校してはいない。教師は担任のクラスのホームルームの時間を、保健体育の教師に代わってもらって職員室の片隅の応接室にいる。

クラスにとけ込めない生徒について母親を交えて相談しようと思ったのだが、近頃流行の韓流スターの催し物があるらしい。そんな母親のスケジュールを優先させた結果である。そして、教師はそんなイベントを娘より優先させる事実で、親子関係の一端をほぼ正確に推察した。

「実は、電話でもお話しましたが、春香君のことで、お母さんを交えてご相談したいと思ひまして」

テーブルのファイルを置きつつそう語りかける男には、春香の担任教師という肩書きがついた存在であり、その目の前にいる女は春香の母親という肩書を振り回しつつ、なにやら裁判の被告席に座らされたかのような被害者意識を臭わせる。

「春香が何かをしたんですか？」

「そういうわけではなくて、」

春香は会話には無関心で窓の外を眺めた。耳を澄ませるように精神を集中してみると、ホームルームの内容より、この応接室の出来事に興味津々の同級生たちの意識が流れてくる。

(何も、あるわけないわよ)

そう考える春香の傍らで女と教師の会話が続いている。

「では、どうしてこんな所で話をしなきゃいけないんです」

「春香くんが一人で悩んでいるような感じがしたものですから、」

春香はふと、視線を足下に落とした。春香の傍らに学用品の入ったカバンと合わせてスケッチブックがおいてある。昨日はスケッチブックでお話が出来なかった。常に持参していれば、学校帰りであっても、すすむとスケッチブックの世界を旅できるという配慮である。

春香の母親の立場にいる女が喚くように言った。

「私に関係があるんですか？ 私はいつも家で、この子に気を使えばなし」

「いえ、お母さんの事を責めるとかではなくて、春香くんの立場で、何かしてやれることは無いかと」

「家庭に問題があるとでも仰るんですか。春香、あなたは先生にいい加減なことを吹き込んだんじゃない？」

「いいえ、春香くんは何も、」

春香の感情は、小刻みに机を叩く指先に現れているが、感情のない表情で無関心を装った。春香が苛立つのは会話の内容ではなく言葉に乗って流れてくる感情である。娘のため、生徒のためと善人を装いつつ、保身のための意図が絡み合って春香の感情を刺激する。顔を背けて感情の流入を絶とうとする春香の姿は、教師と母親にそっぽを向いているように見える。

「春香くん。もっと真剣に考えたらどうだ」

「春香。あんたの事でわざわざ来てるのよ」

女と教師の話の矛先が、春香に向いた。春香にとって、彼女の



苛立ちが高じたタイミングである。彼女は教師に向きあって言った。

「聞いて。トラブルの多い生徒を受け持つのは大変よね？家に小さな坊やを抱えて、学校をクビになったら大変なもの」

春香を気遣うような素振りをする男から流れ込んでくる感情である。春香は続けた。

「ふうん、あんな女と結婚するんじゃないかって？」

教師が心の底で封印している部分である。現在の妻と結婚する以前に恋心を抱いた女が居た。別段、恋愛が実らないというのは珍しい事例ではなく、恋人と別の相手と結婚するという事例などいくらでもあるだろう。ただ、心と生活に疲れを感じたときにあの人と結婚していたらと別の人生を想像することもあるに違いない。春香は教師からそんな感情の流れを感じ取ったのである。

春香は女に向きあった。

「おなたが考えてることも分かるわ。迷惑な小娘さえオマケについてこなければ、もっとうまくやれたのに……」

迷惑な小娘という表現が、女が心に抱く言葉と一致して、女をギクリとさせた。

「な、何を」

「でも、私の家に入り込んで、生活費の心配はなくなったよね」

本音が暴かれる。その恐れが女と教師を刺激して、二人は感情を高ぶらせ、表情は平静を装いつつ話題を逸らせようと必死になった。

「藤森、それは？」

教師は春香が抱きしめていたスケッチブックに手を伸ばした。何か生徒の感情の高ぶりと関係があるようにも見えたのである。「嫌よ！」

春香は手放すのを拒否して背中に隠すように後ろ手に持ち替えた。スケッチブックを持っていれば、学校の後、家に戻らずにすすむの公園に行ける。そう意図して持参したスケッチブックである。自分の居場所がこのスケッチブックの中だけであるかのような気がし、その中にずかずかと踏み込まれるのは嫌だった。

「春香、そんなモノ放して先生の話聞きなさい」

後ろ手という不安定な持ち方と視界の利かない背後から伸びた女の手、春香はスケッチブックを奪われた。春香は叫んだ。

「こんな風に、あなたは、私のお母さんからお父さんを奪ったんでしょ！」

人前で琴線に触れる表現をされて、女は激高した。母親という姿をかなぐり捨ててヒステリックにスケッチブックに手をかけた。心の奥底をさらけ出されている焦りと不安と怒りを、教師の前で春香に向けるわけにもゆかずスケッチブックに向けて引き裂こうとしたのである。

「やめてよ！」

春香は体を投げ出すように激しく抵抗してスケッチブックを奪い返して立ち上がり、制止する間もなく応接室を飛び出した。

教師も女も駆け去る春香の後ろ姿を見送りながら、あの子とは決して交われない自分を自覚している。

春香は駆けながら、自らの感情と流れ込む感情が整理できない。彼女を傷つけようとする悪意ではないが、様々な感情が入り

交じってどろどろと腐敗するようにまとわりつくのである。

「すすむクン、すすむクン・・・・・・・・」

彼女は救いを求めるようにその名をつぶやいた。

この日の午前中、すすむがどんなに苦勞して秘密を守ったか、春香は分かってくれるだろうか？

おばあちゃんにまわりつきながらも、すすむの口はじっと閉じている。そんな時間の秒刻みの長さを春香は感じてくれるだろうか？

すすむの生活の中で、春香との時間の比重が増して、すすむの心が一杯だ。すすむの心は、春香との秘密に膨れ上がって、今にも爆発しそうだ。しかも、おばあちゃんが、隙あらば秘密を暴こうと狙っているのだった。

しかし、今日のおばあちゃんはそんな暇はなさそうだ。おばあちゃんは昼から電話で忙しい。その口調からみて、電話の相手は、すすむのお父さんやお母さんらしい。すすむは何も聞かなかった。すすむは期待することの恐さをよく知っている。すすむは数日ぶりに、窓辺の部屋で一人黙って過ごした。

すすむは一人で色々考えたが、やがて泣きつかれて眠ってしまった。すすむが目覚めたのはおばあちゃんがオヤツを持ってきたからだ。いつもよりおそいオヤツだ。すでに、いつもの外出の時間を過ぎている。

今日こそは、すすむに付き添うつもりで着替えるおばあちゃんに、すすむは拒絶した。

「いやっ！」

それは敵意に近い口調だった。こういう口調をすると大人への仕返しになる。すすむはそういうことを身に着けている。おば

あちゃんはしぶしぶ、すすむについていくのを諦めた。

アパートを飛び出して、すすむは公園に駆け出した。余計なことを考えないですむように、一生懸命に駆けた。この瞬間から、この世界は、すすむと春香だけの世界だ。道路に飛び出したすすむに接触しかけた車がクラクションを鳴らしたのだが、すすむにはちっとも気にならない。

公園の入口にたどり着いて息を整えていると、右手がいつもより手持ちぶさただ。今日は砂遊びのバケツとスコップを持って来るのを忘れたのである。

春香はいつものように姿を現したという表現が、今日は似つかわしくない。いつもはすすむを包み込む優しさに、今日は不安感が混じってすすむに伝わってくるのである。

すすむはその感情に首をかしげた。昨日、春香のことを少し知った。春香の学校や家族のこと。どうやら、それが春香の不安であるらしい。

すすむが観察する春香は、今日はちゃんとスケッチブックとバスケットを持っている。

春香は、春香だ。

すすむはそう思った。春香の優しさに変わりはない。そう考えると、春香から伝わる不安がするすると融けて優しさに変わった。

春香も、すすむの寛容性に触れてみると、凝り固まっていた感情がほぐれるように和らいでいる。あの女や教師が発する鋭くどす黒い感情から距離を置くために学校を飛び出して帰宅し、手近なものをまとめて家を出てきた。すすむと繋ぐ手から信頼感や安心感が伝わって心の中のもつれた糸が解きほぐされてしまうと、もつれた原因など、進路を話し合う親子面談に友人が出来ない春香の協調性のなさが話題に上っただけと言っても良い。

複雑にもつれてから見合った感情がほどけない。そういう苛立



ちが冷めてしまうと、トラブルの原因が自分自身であるかのような罪悪感を刺激する。

春香はため息で感情を振り払い、ちょっと観察する目付きをして微笑んで言った。

「すすむくん、今日のダウンジャケットは可愛いね。」

すすむは自分の頭を抱いて照れた。すすむが着ているダウンジャケットは、すすむのお気に入りの1つだ。温かなオレンジ色で、小犬みたいにふかふかで、胸の所に仔熊の刺繍が付いている。ポケットの角度が手をしまうのにちょうど良い。

二人は手をつないで、いつもの指定席に行き、いつものように語り合った。

春香は魔法のバスケットから筆箱を出した。色鉛筆も出した。春香は、すすむがじっとバスケットをにらむのに気づいて、バスケットを手渡した。すすむはバスケットを振った。開けて中を覗いてもみた。バスケットを逆さにしてもみた。ただのバスケットだ。でも、このバスケットが後でお菓子を生じるに違いなかった。

春香は、バスケットを振るすすむの仕草がいつもより元気が無いのに気付いて、すすむをじっと見つめていたが、やがて悟ったように、すすむの肩を優しく抱いた。

春香はスケッチブックの表紙を開けた。懐かしい顔だ、麒麟のテムである。すすむにとって春香の次に出来た友達だ。結局、テムの故郷は見ることは出来なかった。

(いつでも遊びにおいで)

テムの笑顔はそんなふうに、すすむを誘っているのである。テムの満ち足りた笑顔は、彼を待っていた恋人と結婚して家庭を持ったせいかもしれなかった。

一枚、ページをめくると、クマのクリックさんが現れた。すすむウサギはクリックさんと仲良く並んで椅子に座って、春香ウサギが蜂蜜たっぷりのホットケーキを焼き上げるのを待っている。

ページをめくってゆくと、メウ、ハリー、キィ、フィニの仲間が次々と現れて四季が移ろい変わった。たぶん、いまでも何処かで、すすむをじっと見守ってくれているのだ。

ページの絵は子狐に変わった。子狐のコンが画用紙の中で正面からすすむを見据えて、大きな尻尾をふって見せている。嬉しそうに尻尾を振る様子からみると、ついに仲間に出会えたのかもしれない。

次のページをめくってゆくと、カンガルーのアニス、ペンギンのルーファ、鯨のカナーン、一緒に旅をした仲間がいて、アニスは画用紙から飛び出す勢いではね回っているし、ルーファは日傘をくるくる回しながら、すすむに向かって手を振っている。そのルーファのバックでカナーンは虹の潮を噴き上げている。すすむは、もう一度、カナーンの背にのって旅がしたいと思った。

すすむと同様に孤独感を抱えてい仲間が、今は満ち足りてすすむを見守っているのである。自分もそうなれるかも知れない。そういう期待感で、すすむは春香の顔を振り仰いだ。

春香はやや寂しそうに微笑んで、新しいページを開いた。スケ

ッチブックの新たなページの四角く真っ白な空間は、雪が降り積もっているようにも見受けられるのである。

「さあ、今日は『北の国の魔法使い』のお話」

春香はスケッチブックの新たなページを見つめて、いつもより、ちょっと真剣味を加えて、神様と4人の天使を描いた。

すすむはバスケットを抱いたまま、自分から目をつむった。春香の中に入れていくコツをつかんだらしい。

春香の話が始まった。

秋も深まって冬が始まる寒い日のことでした。

神様はね、雲の切れ目から下界をご覧になって、ふとお考えになったの。今年の冬は、雪に色をつけて降らせてやろうって」  
すすむは目をつむったまま尋ねた。

「あか？ あお？ みどり！！」

すすむの頭の中に、春香の返事がナレーションのように響いた。  
。

「雪の色は下界に住む人々にふさわしい色でなくてはなりません。神様は大きな声で、一人目の天使をお呼びになりました。

『メピム。おいで、用事がある』

大きな声で呼ばないと来ないだろうとお考えになったのです。メピムはいたずら好きの天使でした。メピムは恐る恐る飛んで来ました。何か、叱られるような心当たりがあったのかもしれませんが。

神様はメピムの姿を見ると、次の天使の名を呼びました。

『ピウス。起きているかい？ 』

ピウスはのんびり屋の天使です。ピウスは小さな雲にくるまって、ぬくぬく眠っていましたが、突然に、自分の名が呼ばれたので、驚いて寝ぼけ眼で飛び回って、星だのお月様にぶつかって泣きべそをかいてしまいました。

神様はなきべそをかいているピウスの頭を撫でながら、次の天使の名を呼びました。

『ウナ。ゆっくりでいいから、落ち着いて来なさい』

ウナは頭の良い、でも、慌て者の天使でした。ウナはいつもどうり赤ちゃんを下界へ運ぶ仕事を命じられるのだろうと考えて、赤ちゃんを入れる籠を下げて、もう一つ、気をきかせたつもりで、赤ちゃんのおしゃぶりまで持って飛んで来ました。

神様は苦笑しながら、4人目の天使をお呼びになりました。

『ナルル。お前の初仕事だよ』

ナルルはおとなしいけれど好奇心豊かな天使でした。ナルルは単調な生活にすっかり飽きて、何か面白いことでもないかと喜んで飛んで来て、あんまり急いだので神様にぶつかる場所でした。

神様は4人の天使を集めて、自分の思い付きをお話になりました。今年降らせる雪に、人にふさわしい色をつけたいって……。

天使のメピムは言いました。

『赤ですよ。絶対に赤。赤い雪が降ったら、人間はきっと驚くと思うな。うふふふ』

天使のウナが言いました。

『私は黄色がいいと思います。だって、お日様と同じ色ですもん』

のんびり者のピウスが言いました。

『ボクは緑色がいい。だって、僕は緑色がすきなんだ』

でも、ナルルは黙ったままでした。ナルルも何か提案したいのですが、ナルルはまだ人間や、下界を見たことが無いのでよく分からないのです。

『さあさあ、それをおまえ達で調べておいで』

神様は4人を下界に送り出しましたが、一人ずつに言葉をかけてやるのも忘れておられません。

『メピム。いたずらをするんじゃないよ』

神様は、更に、飛んで行くメビムを引き留めて、（分かったね）と念を押しました。

『ピウス。なまけないで、ちゃんと隅から隅まで見るんだよ』

神様はピウスに、風の香りや、人々の表情など見るべきものを細かく指示しました。神様は言葉をゆっくり、ウナが聞き逃さないようにして言葉を続けました。

『ウナ。おちついて、ゆっくりと、見るんだよ。落ち着けば、お前の仕事は完璧だ』

3人の天使は下界に降りて行って、ナルルが残りました。神様は優しく指示しました。

『それから、ナルル。おまえは下界が初めてだ。色々なものを見て、色々なことを考えておいで、でも偏見を持ってはいけないよ、目に見えるものを素直に受け入れておいで』

ナルルはうなづいて、他の天使のあとを追って下界へ向かいました。神様は、下界に降りて行く天使たちを見守っていました。神様もまた、天使と同じくどんな色の雪を降らせることが出来るのかと、わくわくしていたのです。」

すすむは春香がすすむと額をくっつける感触を感じて、春香の温かさの中に溶けていった。



その後、すすむはその4人の天使の一人一人だった。

最初、すすむは天使のメピムだった。天使のメピムは東の大地にやって来た。東の風に乗ってふわふわと飛んでいると大きな町が見えた。

(豊かでお金持ちが住む町だ)

すすむのメピムは思った。人々の服装がきれいだ、男も女も年寄りも子供も。時々、自動車の起こすつむじ風に巻き込まれるほど低く飛んで、コートを着た紳士や美しく着飾った女の人を見た。女の人を押す乳母車の中の赤ちゃんまで、おしゃれな産着を着て笑っている。メピムの見る人全てが満足そうに笑っていて、メピムはすっかり嬉しくなった。

しばらく行くと、近代的なビルディングがある。近代的なビルディングの群れは、人間達の英知を思わせる。メピムはすっかり陽気になって、笛でも吹きたい気分だ。首の所に手をやったが、いつも首に掛けている笛がない。天国に忘れてきたのだった。メピムがふと見ると、ビルディングの裏に金属製の円筒形のゴミ箱が幾つもあって、太鼓のようだ。メピムは自分の思い付きに嬉しくなった。

パンッ、パコン、プコッ。

試しに叩くと、大きないい音に響く。今のメピムの陽気な気持ちにぴったりだ。メピムが気持ち良く太鼓を叩いていると、突然、裏戸が開いたかと思うと、怒鳴り声が出て、きょとんとしているメピムに空缶が飛んで来た。天使のメピムは残飯あさりのノラ犬と間違われたのだ。ふと気が付くと、驚いて逃げるメピムの

横に、やはり一生懸命逃げているノラ猫がいる。痩せこけた猫だ。更に、しばらく飛ぶと、顔つきの冴えない犬が公園の隅にいます。犬の目は目ヤニでくっついたようにふさがっていて、あちこち毛が抜けかかっている。そのまわりに子犬が3匹寄り添っている。母犬は何かの病気なのだ。子犬は母親を助けてくれと叫んでいるのだ。公園にはさっきと同じ裕福で笑顔の絶えない人々がいる。人々は汚れた物でも見るように母犬を見るだけだ。

メピムはこの汚い街を離れる事にした。犬やネコじゃない。人の心が汚い町だと思ったのである。

街外れに来ると、そこでは山を削ったり、湖を埋めたりして、新しい街、新しいビルディングを作っている。山ではリスの親子が引越しの相談をしていたし、キツネの夫婦は実際に子ギツネの首筋をくわえて引越しの最中だ。湖では水鳥が次のエサ場の相談をしているし、湖を離れられない生き物達は、毎日小さくなる湖の中で恐怖に震えている。

「いったい、いつのことだったんだろう」

メピムはそう思った。この街の人たちは、身の回りの生き物の、ほんのわずかな仕草の一つづつに、自分の命を重ねて学ぶことを止めてしまった。

天に戻りかけたメピムがふと下界を振り返ると街が森や野原や海や山、どんどん広がっているのが見えた。メピムはみんなと一緒に幸せになりたいと考えることの出来ない人々の群れが、まるで真っ暗な暗闇の中でさまよっているように思えた。

次に、すすむはウナという名の天使だった。ウナは仲のよい南

風に頼んで南の大地に運んでもらった。暖かい大地だ。一面の森林で地面がほとんど見えない。川辺や泉のほとりの僅かに開けた部分に人間が街を作っている。ウナは街の1つに降りて行った。賑やかな街だ。人々は貧しいらしい、でも働き者だ。機械工はグリスにまみれているし、ペンキ屋は赤や青に染まっている、パン屋は小麦粉をかぶった様に真っ白だ。彼らは大声で怒鳴り合っているが、喧嘩をしているわけではない、声が大きくて荒っぽいのは親譲りの地声だ。ウナはこの大地がすっかり気に入った。ウナは人々の衣服に頬が触れるぐらい低く飛んで、人混みの中に紛れ込んだ。乱暴だけれど働き者の人々。ウナは少し高度を取って上空から、この人たちの子供の代、孫の代を考えた。きっと暮らしよい明るい街になるに違いない。

突然、ウナの目の前が真っ暗になった。煙突の煙の中に突っ込んでしまったのだ。ウナの体は真っ黒だ。それは勢い良く煙を吹き上げる無数の煙突の1つだ。ウナはその煙突があちらの大きな煙突でなかったのは不幸中の幸いだったと自分を慰めて、体のススを払った。

ウナは神様の声を思いだした。

「おちついてゆっくり見るんだよ」

ウナは落ち着かなければいけないと、自分自身に言い聞かせて、落ち着つくために街外れまでやってきた。一本の老木の頂上に腰を下ろした。そうやってキョロキョロあたりを見回すと、街も人もよく見渡せる。そんな道のあちこちに。機械工のグリスの色に始まって、様々な職業の色に染まった人たちが、せわしなく行き交っていて活気がある。

太陽の光を反射して、赤や緑や青い屋根が広がってきれいだ。幾本もの石畳の道がそんな屋根を縫って走っている。なにより目だつのは、おおきいのやちいさいの、太いのや細いの色々な煙突から勢い良く吹き出される色や黒や灰色の煙だ。

この街はこうやって開けてきたのだろう。そして、この街で生まれた子供達は大人達そのままに、順調に確実に街を広げて行くのだ。

「いいな、いいな。いい土地だ」

「何がそんなに良いもんか」

ウナのお尻の下で、木の葉ががさがさ揺すって老木は、そう言った。悲しげな声だ。ウナが首を傾げて黙っていると、老木が続けた。

「あの人々のじいさんの代には、私を囲んで毎年祭りをしたものさ。大人や子供の賑やかな輪が私を囲んだんだ。ひいじいさんの代には、村の人々が私を前に結婚の誓いををしたもんだ。私も幾つもの夫婦が出来る度に心から嬉しく思ったんだ。そのじいさんの代にはね、集落の人々は天に一番近い私に向かって作物の実りを祈ったもんだ。私も一緒に祈ったんだよ。」

ウナは黙ったまま、さっきの街の中にちっとも花や木立が無かったのを思いだした。老木が続けた。

「ああ、でも今度は私の番なんだ。今日こそ私の番なんだ」

ウナは老木の叫びを首を傾げて聞いていたが、チェーンソーを持った人々が老木の方へやって来るのを見て事態を察した。ウナは必死で人々の手を引いたり、大声で叫んだりしたが気づく人

はいない。ウナの姿は人間には見えないのだ。

チェーンソーが回って老木の樹皮に喰い込んだ。老木は嘆きとも叫びともつかない声を上げた。ウナも老木と恐怖を同じにして叫びを上げている。何もできずにただ飛び回っているのだ。

老木は倒れた。

老木を倒した人々は自慢気に、今度建てる工場の話をした。でも人々は失った物の重さには気づかないのだ。

ウナは天に戻った。老木の思い出話を抱えて。

三番目に、すすむは天使のピウスだった。ピウスは小さな雲を枕代わりに抱きしめて、すやすや眠りながら西の大地へ流されて行った。

突然、ピウスの耳元を頭の中に響きわたるような金切り声があったので、ピウスはうっすらと目を開けた。ピウスはじゃまくさ気に視線だけ動かしたが、金切り声の主は見えない。ピウスはまた大きなあくびをして枕の雲に頬を擦りつけると気持ちのよい寝息を立て始めた。

再び、金切り声が響いたかと思うと、ピウスのお尻の辺りを突風が通り過ぎて行った。ピウスはくすぐったさに目を覚ました。ピウスはお尻を撫でながらあくびを1つして、金切り声の主を捜して東の空を見た。迷惑な音は東の空高く消えて行った。でも、わざわざそんなものを捜す必要はなかった。すぐに、次のが飛んで来たのだ。今度のは親切にもピウスの目の前にゆっくり飛んで来たかと思うと、放物線を描いて地上に落ちて行った。

砲弾だ。良くみると、大きいのも小さいのも、早いのもゆっくり

したの、形も色も様々な砲弾が空のあちこちを飛び交っているのだ。地上を見ると、砲煙の層に覆われて地面が見えない。その真っ黒な砲煙のあちこちで閃光が輝いている。

(きれいだな)

ピウスは寝ぼけたままそう思った。次の瞬間、ピウスはやっと目が覚めて気が付いた。

これは戦争だ。

ピウスは砲弾の嵐のまっただ中にあるのだ。ピウスは泣きたいほど恐くなって天に戻りかけた時、神様の声を思いだした。

「ちゃんと隅から隅まで見るんだよ」

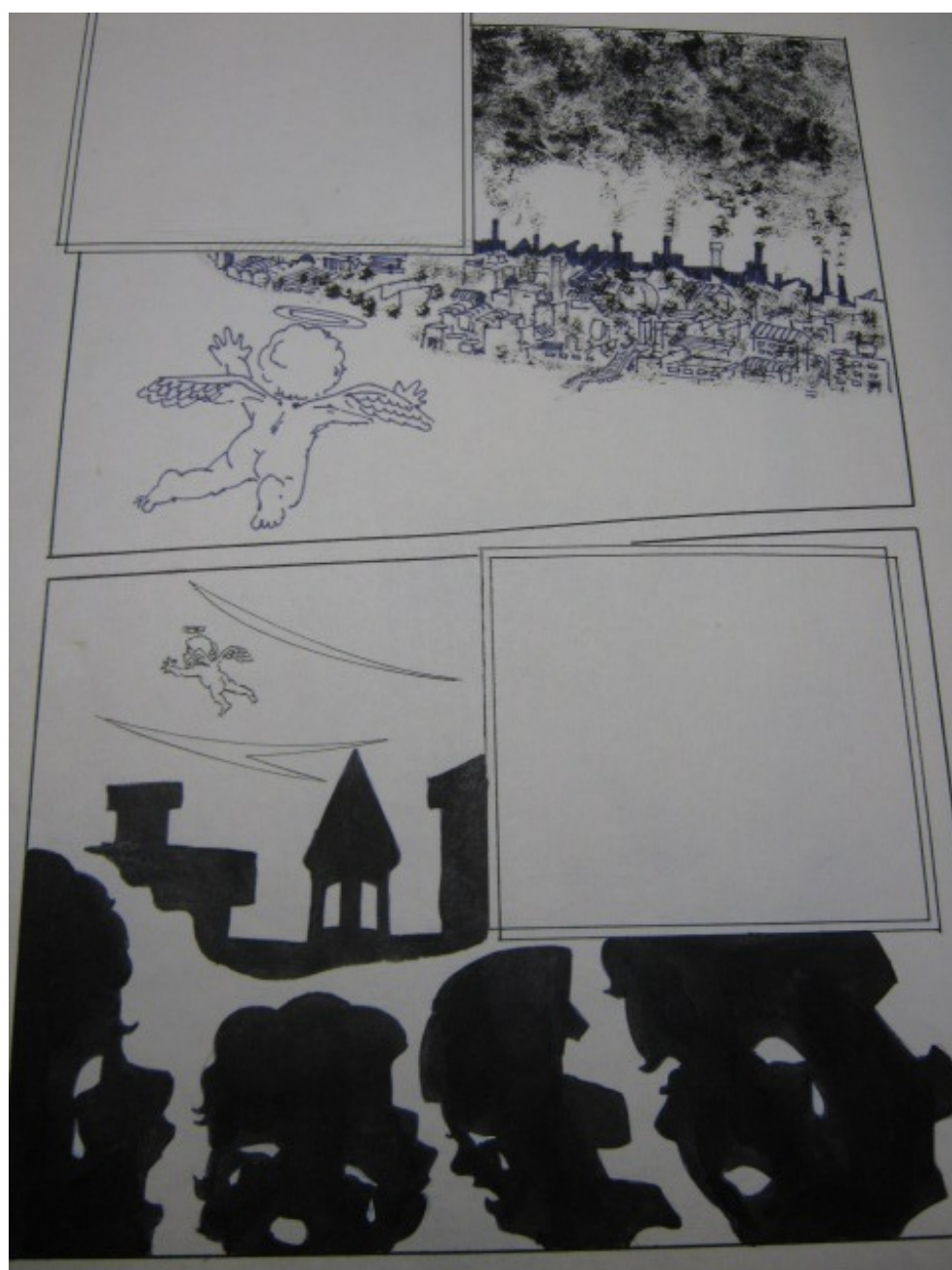
ピウスはしぶしぶ、恐る恐る、砲煙の層を抜けた。地面と砲煙の空。薄い空間の中で人々が、銃を撃ったり、大砲の弾を詰めたり、銃剣で突き刺したりしている。ピウスのお腹に響く大砲の音に混じって、かん高い悲鳴や、低く途切れそうなるうめきが聞こえる。べっとりと汗の臭いや血の臭いがピウスを覆っていて、ピウスも耳を覆って悲鳴を上げたいくらいだ。ふと、ピウスは一軒の廃屋を見つけた。ピウスは慌ててガラスの割れた窓から中に逃げ込んだ。

廃屋には先客がいる。5人の子供達だ。大人達からその存在を忘れられた子供達だった。5人は壁の側で子犬みたいに一塊になって、恐ろしさにふるえている。男の子が3人。女の子が2人。何れの子も、ほこりまみれ、汗まみれだ。男の子の一人は胸の当たりに、真っ赤に血でにじませている。女の子の一人は火傷に痛む左腕を押さえている。別の男の子は足を痛めているらしく歩く



のに足を引いている。残った二人は兄妹らしい。お兄さんらしい男の子が妹をかばって抱いている。妹の方はお兄さんの腕の中で眠っている。

ピウスはただ羽ばたきしただけだ。ピウスはこの子どもたちを救いたい。でも、ピウスにはこの子供たちを救う力はない。ピウスはお詫びに子供たちの一人一人にキスをした。



すぐに胸のキズが直りますように。

火傷の痛みが和らぎますように。

傷ついた足が元の通りに動きますように。

可愛い妹をずっと守ってやれますように。

最後にピウスは妹の女の子にキスをした。お兄さんがかばうように押さえる妹の額に、この幼子を苦しめる傷があるに違いなかった。ピウスがキスをするために顔を近づけると、血にまみれた兄の指の間にのぞいた妹の額の部分には、銃弾の痕が見えて、血は半ば干からびかけて止まっている。

ピウスは最後のキスがおわると天に帰った。自分の無力さに泣きじゃくりながら。

四番目に、すすむは天使のナルルになった。ナルルは下界でどんなものが見られるのかと、わくわくしながら北の国に飛んできた。ナルルは数え切れないほどの生き物を想像していたのだ。街にはたくさんの家があって、仲の良い家族も住んでいるだろうし、温かな空には鳥や蝶が飛び交っているに決まっている。大きな森には幾種類もの動物の寝ぐらがあって、森の泉は噴水みたいに虹を作っていて、吹き出した水は流れる小川になって、鱒がぴちぴち跳ねている。ナルルそんな想像をして、雲を抜けた。



しかし、ナルルが最初に見たものは地平線まで広がる荒れ地だ。くすんだ薄茶の地面のあちこちに岩や石ころがころがっていて、その間をつむじ風が幾筋にも分かれて、砂ぼこりを上げている。ナルルは物寂しい砂ぼこりを振り払うように身震いをした。街なんか見えない、地平線が見える。空は暖かくない、冷たい風が音もなく吹いている。木立も動物も見えない、岩や石ころが単調な色の地面に変化を与えている。ナルルは寂しさを振り払うように、力強く羽ばたいた、でも、ナルルは涙ぐんでいる。

「いろいろな物を見て、いろいろな事を考えておいで。」

神様はそう言ったのだ。ナルルは何も考えずに、ただ力強く羽ばたいた。こんな場所で何かを考えると泣きだしそうだ。

ふと、ナルルは単調な景色の中に、一筋の小川を見つけた。川底が透けて見えるほど、澄んだ冷たい流れだ。所々に水晶が尖った冷たい光を放っている。ナルルは流れを逆上り始めた。

しかし、森は無かった。水晶の谷間があって、そこから水がわき出しているのだ。美しいけれど冷たい光景である。ナルルは一軒の小屋を見つけた。恐る恐るのぞき込むと、一人の魔法使いである。若い女の魔法使いで、ここだけは暖かそうな暖炉の前で、ぽつん、と一人座っているのだ。来ることがナイト分かっているお客をずっと待っているかのよう。人と一緒に住みたいと考えている魔法使いだ。彼女が魔法の水晶に映している映像にそれが現れている。

彼女は昔の映像を水晶に映して心を慰めているのだ。昔、彼女は人の街に住んでいたらしい。水晶の中の彼女の明るい笑顔の横に、大勢の人が見える。もっとずっと温かな所に住んでいた頃の事だ。でも人々の魔法使いを見る目が異邦人を見る目付きに変わっていくのが分かる。彼女が人々に無い力を使ってみせたからだ。

彼女は人と一緒に住むために、彼女の不思議な力を使って人の役に立ってみせたのだ。

でも、人はそんな彼女を、恐れ、嫌う。

彼女は人と友達になりたいので、他人と心を一つにする。でも

、人は彼女に心を許さないのだ。

この大地の景色を見ていると、彼女の心がよく分かる。彼女はお腹をすかせた動物に食べ物を出してやる魔法を使えるらしい、木や花と心を通じ合ってその美しさを受け入れてやることも出来るらしい、たぶん、父母のいない子供に夢を見せてやることだって出来るのだ。

でもただ一つ、彼女は自分を人間にする魔法を知らないのだ。だから彼女は、毎日、毎日、ひっそりした小屋の中、暖かいけれど物寂しい部屋の中で、水晶に昔の思い出や自分の友達になってくれそうな人々を映して心を慰めているのだ。

水晶に映る光景が揺らめいて、ゆっくり消えた。魔法使いは暖炉の前で眠ってしまったのだった。ナルルのいる位置から、彼女の横顔が見える。涙がにじんでいるけれど、口元が僅かに微笑んでいるのは、幸せな夢を見ている証拠だろうとナルルは考えた。

「さみしい、さみしい、魔法使い」

窓辺のナルルは、魔法使いから視線を天に移してそう思った。そして、彼女の浅い幸せな眠りをじゃましないように、ナルルは自分の羽音を暖炉の薪のはぜる音に忍ばせてそっと天に登った。

ふと、ナルルは上空から振り返って思った。この大地には駆け回る動物が必要なんだね。動物には森や草花も必要だ。森や草花にはそれをめでる純真な子供も必要だ。

子供には子供を見守る魔法使いが必要だ。ナルルは彼女を慰める力を持たない事を悲しく思いながら、ゆっくり天国に帰って行った。



4人の天使は神様の元に戻ってきた。

神様はまずメピム話を聞いて、がっかりした。メピムは大地に黒い闇のイメージを抱いたのだ。

次に、ピウス話を聞いてもっとがっかりして肩を落とした。ピウスは煙突から吹き出すススだらけの黒の煙のイメージを話したのだ。

神様は3番目のウナ話を聴くと、普段は立派な髭までだらりと元気に垂れてしょんぼりしてしまった。ウナは砲煙の黒をイメージしたのだ。このままでは黒い雪が降りそうだ。

最後にナルルが北の魔法使いの話をした。神様はナルルに優しく尋ねた。

「それでは、お前はどんな色が下界にふさわしいと思うのかな？」

ナルルは少し遠慮がちにもじもじしていたが、やがて意を決したように、でもきっぱりと言った。

「やっぱり、白のままがいいの。一番きれいで、優しい色なの」

その年の冬も白い雪が降った。雪と共に、いくつかの大地で変化が起きた。小さな変化と大きな変化。

東の大地ではまるで動物がみんな揃って冬眠に入ったかのように、姿を見せなくなった。

街の動物も、森の動物も。

南の大地では、初めての雪に驚く人々の目の前で、樹木や草花が淡く揺らめいたかと思うと、雪と共に融けてしまったように姿



を消した。街はずいぶんさっぱりとしたコンクリート色になった。

西の大地では、雪が血走った人々の心を癒したが、大人達から忘れられていた子供達が、忘れられていた時そのままに、大人の記憶から姿を消した。街は何も変わらないように硝煙に埋もれて見えた。

そして雪の冷たさと同じく、この3つの大地の人々はこの小さな変化を受け入れた。

北の大地。夢から目覚めた魔法使いが、いつものように独りぼっちで小川に水汲みに行きながら、ふと足を止め首をかしげた。小川は、ずいぶん楽しく賑やかだったから。ビーバーの奥さんが器用にダムを組んでいるのだ。岸の水晶をかじり倒しては、ダムに運ぶのはお父さんビーバーだ。水辺で魚がはねた。

野うさぎが川辺で毛づくろいをしている。かわうそが川面から顔だけ出して、迷惑そうにダムを見ている。彼女の足元が柔らかく温かいのは、数匹の子犬が遊び相手を求めて擦り寄って来たからだ。この新しい仲間は、いったいどこから来たのだろう。

空には小鳥の群が空を駆けている。地平線の付近が何やら揺らめいたかと思うと、ゆっくり緑に変わった。曖昧なものがゆっくり姿を現すにつれ、それらは太い樹木の幹や柔らかかで艶やかな葉や色鮮やかな花になった。枝のあちこちにはリスがいる。木の葉を揺する風に小鳥が舞っている。ビーバーの歯の音が木をかじる音に変わったかと思うと、川辺には水晶など何処にもなく、それ

は灌木だ。大きな森の中央に開けた灌木と草花の小さな平原だ。

もう豊かな木々に遮られて地平線は見えない。足元にはビーバーが作った小さな木の切株が幾つもある。ビーバーは作ったばかりのその椅子に彼女に座れと勧めた。もう一匹のビーバーが彼女の足元をすり抜けて新しい木をかじり始めた。新たなお客のための椅子。木立の幾つかに隠れるように小さな人影。人間の子供達だ。子供達は彼女が保護者であることを知っていて、恥ずかしそうにそっと彼女との距離を詰めてきている。

「あ、あ、あ、」

魔法使いは声にならない叫びを上げた。天を振り仰いだのは、涙を押さえるためだ。動物も小鳥も子供達も揃って空を見た。白い雪がふわふわ降って来る。雲が細かくちぎれて落ちて来るように柔らかだ。

いつもと同じ白い雪。でも、北の大地の生き物には、その雪がいつもよりずっと白く輝いているのが分かった。



パタン。

いつもよりスケッチブックを閉じる音が緩やかで、両の手の平に包み込んで、自らの居場所を守っているかのよう。

すすむはゆっくり目を開けた。いつもと違って春香は黙ったままだった。春香が黙ったままなので、すすむも春香を見上げたまま黙っていた。まるで、死を予感させるほど感情が絶たれた沈黙である。

すすむにも春香が今の童話に託して自分の気持ちをすすむに伝えようとしたのが分かる。

(分かってくれたかしら？ )

春香が伝えたいのはそんな問いかけだ。すすむが黙っているのは、上手に春香を慰める返事を考えているのだ。すすむはしばらく考えていて

「春香さんも寂しいの？」

すすむはそう言って笑った。あまり悲しい声で言うてはいけない言葉だと考えたのである。すすむは幼い心で感じ取ったことがある。すすむは、お父さんやお母さんに捨てられて他に居場所がない。春香も同じなのではないかと感じ取ったのである。

すすむはぴょんと跳ねるように立ち上がって、春香の正面に向かって見つめ合った。

「でも、ボクは魔法使いが好きだよ」

それから、すすむは照れたように春香に背を向けて駆け出した。前方のコンクリートの小山まで駆けた。すすむは振り返って、

照れくささに少し戸惑いつつ、言葉が続けた。

「春香さんのことも、好き」

すすむはそのまま山の側面に刻まれた階段を勢いよく駆け登った。すすむが頂上で振り返ると、春香が腰掛けから立ち上がって、ゆっくりと、すすむを追って来るのが見える。

「魔法使いって、いいな。いつでもお菓子が食べられるでしょ。ニンジンだって食べなくていいんだ」

すすむは頂上からすべり台を降りた。すべり台は小山を螺旋に回って春香の姿が見えなくなった。すすむは少し心配になって小山をぐるりと駆けて、春香の姿を求めると、駆け寄って続けた。

「おかずのニンジンが出てきたら、アイスクリームに変えてしまおうんだ」

すすむは春香を見上げたが、春香は黙ったままだ。すすむは幼い工夫をして、話の観点を変えてみた。

「魔法使いなら、動物とお話して、動物を助けて上げられるでしょう？」

すすむは一生懸命だ。すすむはブランコまで駆けて行って、支柱に両手でつかまってくるくる回った。春香は、すすむについて歩いて来るけれど、黙ったまま微笑みを崩さない。

ブランコのそばにタイヤが列を作って並んでいる。タイヤは下半分を地面に埋めて全体としてみると、芋虫の背中のような。すすむは芋虫の背中に乗かった。そうすると、すすむの目の高さは春香と同じ位になる。すすむは春香の見上げるのではなく真横

から春香の顔を見た。角度を変えても春香の表情は変わらない。

「魔法使いなら、子供達のお母さんになってあげられるでしょう？」

すすむは駆けて行ったかと思うと立ち止まって、足の間から春香を見た。春香の姿が逆に見える、でも春香の表情は変わらない。春香は、すすむが一生懸命なのを知っている。春香がすすむを包み込む雰囲気の中に、すすむに対する感謝の念が混じっている、でも春香の寂しさはそれ以上だ。

「あのね、あのね、」

すすむは次の慰めを考えて、駆け出そうとした、しかし、すすむの顔は春香の方を向いたままだ。

「あぶない！」

春香が叫ぶように言い、何かを抱き上げるように腕を動かした。駆け出したすすむの足元に、土だけの花壇があって、すすむはそれにつまづいたのだった。花壇の向こうの尖った木の枝に頭をぶつけそうになって、すすむは悲鳴を上げた。

そのまま、すすむは自分の体が凍り付いた様に感じた、次いで、すすむの心が空気の中に融けて行った。すすむにはそういうことがずいぶんゆっくりしたものを感じられたが、実際にはごく一瞬の出来事であったに違いない。

すすむの心は、まず暖かさを感じて再生した。すすむの体は花壇のところで消滅し、今は春香の腕の中だった。ちょうど何もなかったバスケットの中にクッキーが現れるように、すすむは春香の腕の上にいるのだ。春香は魔法で、木にぶつかって怪我をしかけたすすむを救ったのだった。春香が花の女神を演じた日、椅

子に腰掛けていたすすむがいつの間にかコンクリートの山の上に移動していた。あの時と同じ。物や生き物を瞬時に移動させるのは春香の不思議な能力の1つである。

目を開けると春香の顔がすぐ目の前だ。すすむは春香の腕の中でお母さんの胸の温みを思いだした。

今まで、すすむが心の奥底に堅く仕舞い込んでいたものが、じんわり融けて沸き上がってきた。すすむは春香の頬に顔をつけてすすり泣いた。春香はゆっくりとすすむを下ろして言った。

「すすむクンの言う通りよね。魔法使いは魔法でお菓子が出せるのよ」

春香はすすむの前にしゃがんで、すすむの衣服の乱れを直した。

「動物たちとも話せるの」

春香はすすむの髪の手を直した。

「それにね、寂しい人と心を一緒にして、慰めてあげる事も出来るのよ」

春香は、すすむの背後に回って、すすむの衣服の乱れを確認し、すすむのお尻に付いた砂を払った。すすむはずっとベソをかいていたが、春香がすすむの背後から、ぎゅっと苦しいほどの強さで抱きしめたので、すすむは驚いて泣くのをやめた。春香は震えているのだ。春香の凍り付いた寂しさが、じんわり融けて、すすむの寂しさに混じり込んだ。

「でもね、すすむクンには分かるでしょ？」

春香は言い、少し間を置いて続けた。



「たったひとは、さびしいの」

夕方なのだが空は赤くなく、全ての物に影が無い。空はどんより重たく曇っていて薄暗いだけだ。公園から帰って行く二人の吐く息が白い。指先はかじかんで凍り付きそうだ。今夜はもっと寒くなるかも知れない。

すすむの涙がおさまるのを待って、すすむを公園の入り口まで手を引いて導いて、横断歩道を渡り終えるまで、寂しげな笑顔で見送った。

(頑張るのよ)

春香はそんな言葉を、すすむと自分にかけて。

言葉と裏腹に、心が疲れ切って、普段は封じている心の扉を閉じる気力すら失って、失望を乗り越えたあきらめの感情がすすむに伝わった。残された居場所を守ろうとする気概も失われて張り詰めた精神が緩んで、肩に背負った荷を降ろしたような脱力感がむなしさに変わって彼女を支配している。

心にわだかまっていた熱い感情の一部を吐き出して、心が芯から冷えている。

(もう、私の居場所じゃない)

自分の部屋や教室を思いだしてそう思った。普通なら感じるはずの不安感すらぼんやりかすんでいる。



すすむは色々考えながら帰宅した。春香と会ってから今までの事を、1つずつ思いだしているところだ。春香と二人だけで心の声でお話をしたこと。大勢の人たちの間で春香の耳に響く声を聞いたこと。カンガルーのアニスのこと。熊のクリックさんのこと。ペンギンのルーファや鯨のカナーンのこと。

春香とブランコに乗ったこと。春香の一人ぼっちの学校生活のこと。北の大地の寂しい魔法使いのこと。

出会った日の春香は、帰ってこない麒麟のテムを待ち続ける恋人で、

2日目の春香は、怖いクマを偏見で見ると叫ぶお姉さんウサギで、

3日目の春香は、途絶えてしまった希望の中で、一縷の明るさを願う花の女神さま。

4日目の春香は、自分の本当の姿に気付いて、森に寂しく去っていくキツネのコンで

5日目の春香は、寂しいカンガルーのアニスで、独りぼっちのルーファで、仲間のいない鯨のカナーン。そして、そんな姿を客観的に見つめる彼女自身。

6日目の春香は、普通の女子高生で

そして、

今日の春香は、魔法使いになりたいと願っているのに、願いが果たされない少女。

おぼろげながら、すすむの頭の中で春香の姿が物語の登場人物と重なりつつもすれ違う。時間の前後や現実と空想がごっちゃになって分類できない。しかし、逆にそれらが融合して1つになると、春香の秘密に入り込んでもっと親しくなれそうな気がするのである。夕食の香りが漂う時間まで、すすむは絵本を抱え込んでいたが、考えはまとまらない。

やがて、すすむはおばあちゃんと向かい合わせに食事のテーブルに付いた。先ほどかかってきた電話では、今日のおじいちゃんはいつ帰るか分からない。おばあちゃんは先に孫に食事をさせようとしたのである。

「どうしたの？」

おばあちゃんは箸が止まった孫にそう問いかけた。

(ほうれんそう、嫌い)

どこかに無くなっちゃえというすすむの思いは果たされない。きっと、春香ならそんな思いを察して願いを叶えてくれるはずだ。

「好き嫌いは大きくなれないわよ」

おばあちゃんの言葉に、すすむは心の中で返事をした。

(おばあちゃんって、お母さんみたいに言うね)

「どうしたの、お腹は空いてないの？」

(おじいちゃんはどうしたの？ お父さんのところへ行っただけでしょう)

食事をしながら、テレビを見ながら、布団の傍らで絵本を読んでもらいながら、すすむの心は、おばあちゃんとすれ違う。

(もし、ボクが春香さんみたいだったら、みんなぼくの気持ちを分かってくれるのかな)

でも、春香の心から伝わってくる寂しさは、すすむの想像を否定する。

すすむは色々考えすぎて寝息を立て始めた。

おばあちゃんはおじいちゃんの帰宅を待ちながら、膝の上で眠ってしまった孫の頭を撫でて

「子はかすがいっていうのにね」

そう呟いて息子と義娘の事を考えた。そして、夫が息子夫婦のわだかまりを、うまく解くことができればと願った。

すすむが目を覚ました。窓の外はどんよりと薄暗いのに輝いてもいる。好奇心や期待をかき立てる矛盾だった。すすむは身震いを1つしてサッシの窓に歩み寄った。窓は台所から流れて来る湯気に曇っていて、ようやくまん中のあたりが楕円形に透明だ。

「あ、あっ、・・・・・・・・、ゆ・き」

すすむは大急ぎで窓を擦って視界を広げた。家の外は雪景色だった。残念なことに、雪は降り止んでいるが、それでも、夜半に地面を隠すほどに降ったらしい。すすむは雪が積もるのを見たのは初めてだった。地面は雪に隠れているし、自動車や自転車、地面に在るもの全てが冷たく覆われている。そして、目の前の樹木にも、太い枝には太い雪、細い枝には細い雪。昨日、北の国にやって来た生き物と北の国の寂しい魔法使いに降り注ぎ祝福の光で包んだ雪の輝きを思い起こさせた。

すすむは、おじいちゃんとおばあちゃんに報告に行くことに決めた。すすむが台所に飛び込んで行くと、おじいちゃんがいつもより落ち着いて新聞を読んでいる。おじいちゃんは眼鏡を鼻の頭までずらしてすすむを見た。すすむは挨拶代わりに部屋の窓を指さして言った。

「ゆき」

すすむはおばあちゃんにまわりついて、地面の事、自動車の事、木の枝の事を話して、地面には色々な足跡が付いていたことまで付け加えた。おばあちゃんは笑って聞いていたが、孫の冷たい手に温かなミルクの入ったコップを握らせた。すすむはお



じいちゃんの横までミルクを運んで、自分の椅子に座るとミルクをなめた。しかし、視線は台所の窓に釘付けだった。

すすむを嬉しくさせた原因はもう一つあった。今日は大人が休みの日なのである。おじいちゃんがこの時間まで家でくつろいでいるのを見るとそれが分かる。

すすむが春香と朝から遊べる日である。春香にもさっきの光景を報告しなければならない。

すすむがコップの縁の最後の一滴を嘗めていると、おじいちゃんが言った。

「おじいちゃんの家に住む間、すすむもいい子にしていたな」

すすむはしばらくその言葉の意味を考えていたが、一つの判断をして尋ねた。家に帰れるという事かも知れないということだ

「お父さんとお母さんは、また仲良しになったの？」

おばあちゃんはスクランブルドエッグを朝食の皿に盛りつける手を止めた。おじいちゃんは新聞のページをめくる手を止めて、ずり落ちためがねを直しもせず黙りこくった。

お母さんは入院していると聞かされていたすすむが、こういう表現を使うのは初めてだ。

テーブルまで食事を運んで来たおばあちゃんが、おじいちゃんと顔を見合わせて、凍り付いたようになったが、おじいちゃんはずり笑いをして言った。

「そうだよ」

すすむはゆっくり、その言葉を噛みしめた。なにかほっと荷物を下ろすような感じだ。すすむはふと、これも春香の魔法のおかげ

げかも知れないと考えた。

「あのね」

すすむは春香の魔法の事を二人にも話して一緒に感謝して欲しいと考えたのだ。すすむは最近何でも魔法に結びつけて考える癖がある。

「ううん」

すすむは首を振ってやっぱり黙っていることにした。報告をしようにも、まだ、すすむは春香の寂しさの秘密を解き明かしていない。そのまま、3人は黙っていた。みんな言葉を搜しているのだが、この場を表す上手な言葉が見つからない。

おじいちゃんはこの幼い孫の心をどうやって癒してやれば良いのだろう。

おばあちゃんはちぎれてしまった孫の心をどんな言葉で繋合わせれば良いのだろう。

すすむは今の心をどう表現すれば良いのだろう。希望、不安、温かな思い出、冷たい思い出、色々なものがすすむの心に同居して区別が付かない。

お父さんがすすむを背負う背中は大きくて柔らかだろうか。

お母さんがすすむを抱く腕はしなやかで暖かだろうか。

お母さんは笑うだろうか。お父さんに笑うだろうか。

お父さんは何かおしゃべりするだろうか。

お母さんに冗談を言って笑わせるだろうか。

そして、幼いすすむを二人は受け入れるだろうか。

すすむは両親の間を駆け回れるだろうか。

家の中は落ち着いているだろうか。

家の中はずっと暖かに、すすむを包んでいてくれるだろうか。

色々な希望が浮かんだが、それはどれも不安を伴っていて沈んで行った。すすむの心の中は色々な考えで一杯で、すすむはご飯を食べる手を止めて言った。

「ごちそうさま」

すすむはテーブルを離れた。

おじいちゃんも、おばあちゃんも、何も言わなかった。おばあちゃんはすすむがお腹をすかせた時の用心に、孫の食べ残しをラップでくるんだ。

すすむはズボンをはき替えた。昨日はいていたズボンだ。すすむはシャツも一人で着替えて、ダウンジャケットを身にまとった。オレンジ色のダウンジャケットだ。おばあちゃんは、すすむが外出支度をしているのに気づいた。

今日は雪だ。昨日と同じは寒すぎる。

おばあちゃんは、すすむにフードのついたジャンパーに着替えなさいと命じたが、すすむは譲らなかった。このダウンジャケットは昨日、春香に可愛いと誉めてもらったものなのだ。おばあちゃんは久しぶりに頑固なすすむに負けて、マフラーと手袋をすすむに渡して譲歩した。

すすむは砂遊びのバケツとスコップを手にとった。別に砂遊びをする気はないのだが、手にしっくり馴染んで落ち着くのだ。

ドアを開けて出て行った孫の姿を見送って、老夫婦は考えた。子どもの心は複雑だ。うかつに入り込まない方が良い。

すすむは階段の手すりを、手袋をした手で叩いた。すすむが始めて経験する音と感触だ。屋外に突出した階段の手すりにも雪が積もっているのだ。階段の1段毎にも積もっているが、先に誰かが通ったらしい。大人の足跡が付いている。すすむはその足跡を自分の小さな足跡と比べながら慎重に降りて行った。堅く凍り付いた雪は、すすむの予想外に滑り易いのだ。

すすむは地面のあちこちで足踏みをした。雪の堅い表面を踏み抜くと、きゅっと耳に心地よい音がして、すすむの体は安定するのだ。表面のかげさと内側の脆さ、安定そうで不安定な表面と不安定なのに安定する中身。すすむは雪の感触を足で味わっているのだ。朝日に照らされて、雪の結晶の1粒1粒が輝いて、自分を覆っているように思った。

すすむは手袋をポケットにしまい込んだ。ひんやり外気が心地よい。すすむはアパート脇に駐車している車のボンネットを撫でた。ここの雪は地面の物よりサラサラだ。地面の物より光沢が柔らかい。指先がじんとするほど心地よい。すすむはこの雪が気に入って、サンプルを少々、彼のプラスチックのバケツに採取した。

こうやって、すすむは歩道の所までやってきた。すすむはちょっと失望した。歩道は人通りが激しいのだ。大勢の人の足跡がつながって、下の石畳が顔をのぞかせている。

車道はもっと失望する光景だ。白の雪の上に二車線の4本の夕

イヤの真っ黒な轍があって興ざめだった。自動車がひっきりなしに通って、深い意味もなく轍を広げて行くのだった。

すすむはさっきから何度か歩行者にぶつかりそうになって、ぶつかりそうになる大人を不満気に見上げながらガードレールまで避難した。すすむは外出の目的を思いだした。すすむにはこんな所で大人とぶつかっている暇なんか無い。もっと広い所、公園の中で、大きな雪だるまを作って、後からやってきた春香をびっくりさせる予定だった。

しかし、すすむの予定は脆くも崩れさってしまった。車道を夾んで向こうの歩道に春香の姿を見つけたのである。フードの付いた赤のコートを身にまとっていて、すすむを見つけるとフードを取って顔を出した。フードつきのゆったりしたコートは魔法使いを思い起こさせた。

春香がすすむの気配に気づいて手を振ったので、すすむも手を振り返した。道幅が広く、行き交う車のエンジンの音に遮られて声が届かない。でも、二人は手を振るだけで、心を通わせるのに十分だった横断歩道までの10メートルを、すすむと春香は車道の両側に別れて歩いた。

すすむはスコップでガードレールをぽこぽこ叩いて歩いた。今日は春香とどんな遊びをしようか、あれこれ楽しく考えているのだ。春香も通行人を避けながら、すすむに歩調を合わせて、向こう岸の歩道を歩いている。

ガードレールが途絶え、目の前には公園の入口。横断歩道がす



すすむと春香を結ぶように伸びている。すすむは春香に向かって駆け出した。

「危ない！」

春香の声が響いた。思わず口から発した言葉の叫びだ。

トラックの腹に響くクラクション。

耳を貫くトラックのブレーキ音。

すすむは道路のまん中で凍り付いた。恐怖はなく、ただ冷静に、思った。

(死ぬのかもしれない)

ただ、春香に対する信頼感があって死の予感を否定する。春香なら魔法を使って助けてくれる。そんな信頼である。

この後の出来事は、ほんの一瞬に違いないのだが、すすむは多くの物を見、多くの事を考えた、そして多くを経験した。

言葉で綴れば、これらには順序が生じるが、実際にはこれらの事は、ほぼ同時に、一瞬のうちに並行して存在したのだ。

まず、家族が仲良く暮らしていたときの事が、すすむの心の中に記憶の数だけ浮かんだ。お父さんの笑顔、お母さんの笑顔の1つ1つを鮮明にだ。

すすむはトラックから目を移して春香を見た。春香なら魔法で、昨日みたいに、一瞬のうちに、すすむを腕に抱きとめてくれるに違いない。春香は実際にそういう力を持っている。

春香の心が、すすむに伝わった。春香の躊躇の感情。魔法を使うことを戸惑っている。

トラックのタイヤが地面を滑ってきしんでいる。すすむはまだ凍り付いたままだ。

すすむは春香が道路に飛び出して来るのを見た。

ちょうどすすむが家族の思い出を振り返ったように、春香はこの一瞬に春香の一生を振り返った。

春香とすすむは、心を共有した。すすむには春香の一生が見えたのだった。

ちょうど、すすむと同じ年頃で、春香は自分の力に気づいた。自分が他の人と心を共有できること。最初、彼女は自分の力が嬉しく面白かったのだ。回りの人々も彼女の力を不思議がり、面白がったのだ。

しかし、彼女はふと気が付いた。彼女は一人ぼっちだ。いつの間にか回りの人々は、彼女に心を閉ざしてしまったのである。そして、もっと寂しいのは、心を閉ざしてしまった人々の心が、彼女には伝わるたびに、自分の存在が受け入れてもらえないことに気づかされることである。

彼女はそんな経験を数え切れないほどして、普通の人間を装う事を身につけたのである。家庭でも学校でも、ありとあらゆる場所で。

しかし、人間を演じれば演じるほど、自分が普通の人間ではないということ、大勢の人々の中で、自分の存在がこんなにも孤独なものだということが身に凍みるのだ。

そして、その中で人々に自分の正体を知られることを恐れて、童話を書いたり、スケッチをしたりして一人遊んでいたのだ。ちょうど、すすむの砂遊びと同じだった。

すすむは春香が知り合った人々の、不審、不安、恐れ表情の1つ1つを自分の経験にした。

春香の心には、すすむの姿も存在した。

春香の心に浮かんだのは2人が初めて会った日の光景だ。

春香は一人で、スケッチの遊びをしている時に、すすむを見つけたのだ。春香は初めて、自分と同じ様な寂しさを持った存在と出会ったのだ。その驚き、一種の嬉しさ、いたわりが、すすむに伝わってきた。すすむの存在は春香にとって保護すべき存在であり、また、初めて彼女をそのまま受け入れてくれる存在でもあった。

春香にとって、すすむの動作の1つ1つが新鮮に素直に、彼女の中に入り込んでくるのだ。すすむの言葉の1つ1つが、彼女の凍てついた心を融かすのである。

次の瞬間、それらの記憶はぱっくり途切れてしまった。

すすむはまるで映画の場面が切り替わるような感覚で、自分が春香の記憶から放り出されて歩道の上に転がっているのを知った。

春香が、すすむを突き飛ばすように歩道に戻したのだ。

クラクションの音とブレーキのきしむ音が耳に響いているが、これらはさっきから響いていたらしい。

そして、つい今しがた、

どすん。と、鈍い音が加わった。

すすむの側に春香の鞆が、高い空から落ちてきて、雪の上に転がった。鞆の蓋が開いて、いくつか魔法の道具が見える。スケッチブックが大きく開いて、ページが1枚ずつ羽ばたくように落ちてきた。

すすむがスケッチブックを拾って立ち上がると、春香が、すすむと同じ歩道上、すすむと7、8メートル離れた場所にうつ伏せに倒れているのが見えた。

（何故、春香さんは魔法でボクを救ってくれなかったんだろう？）

すすむはそう思った。

事実、春香には公園で転びかけたすすむを一瞬に自分の腕の中に引き寄せられる力があるはずだ。どうして、その力を使わなかったのかと思うのである。

すすむは一步春香に近づいた。春香から感じた暖かい雰囲気が無い。

すすむはもう一步近づいた。春香は、すすむに何も語りかけない。



(何故、春香さんは魔法を使わなかったんだろう？ )

すすむは、もう一度そう思った。

突然、降って湧いた様にと、すすむは感じたのだが、大勢の大人が二人の所に駆け寄って来た。

「あ、あ、あ」

すすむは人々に声を上げた。すすむは自分を取り囲む大人の群れに、ようやく悟ったのである。

魔法を使えば自分が普通の人間ではないことが知られてしまう。春香はこの大勢の人の中で、普通の人間の演技を続けたのである。

白い雪の上に赤いコートの春香が横たわっていて、その春香を中心にどくどく赤い染みが広がっている。

春香は普通の人間でいたいと考えたのだ。

(あっ？ )

すすむは僅かながら、春香の意識を感じたのである。春香は僅かに意識を取り戻したらしい。

「春香さん」

その声で、春香はすすむがそばにいる事に気付いた。すすむが無事だった、それを喜ぶ感覚が途切れ途切れにすすむに届いた。そして、春香が薄れ行く意識の中で、自分の命が尽きることを悟ったことも。再び、すすむに伝わる意識が途絶え、二度と春香の意識を感じることは無かった。

わずかに微笑んだ表情のまま、春香は冷たく凍りついたので

ある。

見知らぬ人が、すすむを囲んで、1人がすすむを抱き上げて、子供に怪我かないかを調べた。見知らぬ人が春香を囲んで、春香がすでに息もしていないのを知った。

すすむは大人の腕をふり解いて、春香に駆け寄った。すすむが頬を付けると、春香の横顔は雪のように白くて冷たかった。すすむは泣きじゃくって、春香の持っていた寂しさを吐き出した。

昼過ぎ、すすむはもう泣きつかれたように黙っていた。

お父さんが運転する迎いの車が来て、お母さんに抱かれながら、後部座席に乗り込んだ。

お母さんは、すすむの顔を抱いて見せまいとしたが、すすむは大きく頭を振って外を見た。トラックがまだ止まっている。警官がその回りを囲んで何か調べているところだ。春香の体は見えない。春香の心もすでにない。

お父さんも、すすむに見せまいとしてアクセルを踏んだ。事故の景色が遠ざかる。

お母さんは、すすむが何かを言いた気な様子をしたのに気づいたが、すすむはそれを思いとどまった。

寂しい、寂しい、魔法使い。

人間になりたかった、魔法使い。

でも、それは春香と、すすむ、二人だけの秘密。



永遠に。

おしまい

## あとがき

---

最後まで読んでいただきありがとうございました。実は、この物語にはもう一つのラストシーンがあります。（後書きの一番さいごに、2013年度に改稿）したときのハッピーエンドラストのあらすじを記載してます

事故で意識を失った春香が病室で目覚めた時、春香の家族と、すすむがベッドの傍らにいました。すすむが胸に抱いていたスケッチブックを春香に返そうとして差し出すのですが、春香は微笑むばかりで、すすむに春香の意識が伝わってきません。春香もそれに気付きます。そう、事故のショックで春香は今まで持っていた特殊な能力を失って、普通の人になっていました。

心配そうに彼女の顔をのぞき込む父や義母義兄の顔に、この人たちが自分を家族として心配してくれていたことを知ります。そして、今の普通の人間の自分なら、孤立せず他の人々に溶けこんで生きていけそうな気がします。最後に、春香はすすむと二人でした旅の思い出になるスケッチブックを、すすむに託しました。旅の中の出来事や二人の思いは全てこのスケッチブックの中にしまわれて二人の秘密になりました。

さて、

本編の悲しい結末と、このハッピーエンド、どちらが二人の主人公にふさわしいでしょう？  
皆さまの意見をお聞かせ下さい。

また、この物語には姉妹編とも呼ぶべき物語があります。  
孤独な女性と子供の心の触れあいというテーマが、1つはすすむと春香の旅の物語として、もう一つは、子供を思うお母さんの物語『悲翔』となりました。  
よろしければ、その物語もご覧下さい。

「悲翔」

<http://p.booklog.jp/book/23568>

2012.01.02

文字をもう少し大きくした方が読みやすいというアドバイスを頂きましたので、文字サイズを変更しました。文字に関わらずお気づきの点いろいろとお聞かせください。

2012.02.28

この作品を全面的に改稿してハッピーエンドの物語に書き直した作品を、某新人賞に応募したんですが力及ばず落選しました。ネットで公開しようかと考えていた矢先、ファイルを保管していたUSBメモリが壊れて、改稿策が消失（涙）。でも、いつかまた、ハッピーエンドのラストでも書き直したい思います。その時のために、改稿作の最後を忘れないうちに記憶をたどって

、改稿作のラストをあらすじで記録しておきたいと思います。

\*\*\*\*\* ハッピーエンド版ラストのあらすじ \*\*\*\*\*

事故の直後、すすむは駆けつけてきた周囲の大人に囲まれながらも、春香と二人だけのような孤独感を感じました。二人は救急車で病院に運ばれます。

すすむには大きな怪我はなく、入院から三日目に両親に付き添われて退院します。両親は今回の事故をきっかけに、すすむの両親として1つの家でともに生活することに決めたようでした。でも、すすむはそんな両親を眺めながら、本当に元の明るい家族が再生できるのか不安を抱いています。そして、何よりも、春香は意識不明のままです。

十日目に春香の意識が戻ったという連絡を受けて、すすむは両親とともに春香をお見舞いに行きます。すすむは、病院の入り口から出てきた男性と三人の少女に気づきました。その人たちは、すすむのことを知らないはずですが、すすむはよく知っている人たちでした。そう、春香がイメージで見せてくれた学校の担任の先生と同級生です。彼らは、すすむに気づかないまま、春香の回復を祈るような会話をしつつ立ち去っていきます。すすむは春香が決してひとりぼっちではなかったことを知ります。

すすむは病室の春香のベッドの傍らで出会った人のことも知っていました。春香のお父さんと、血のつながらないお母さんとお兄さん。検査中の春香が医師に車椅子を押されて何かを話しながら病室に戻ってきました。あのスケッチブックを胸に抱えています。でも、春香は駆け寄ってきたすすむのことを忘れていました。事故の衝撃で記憶を失っていたんです。スケッチブックを抱えていたのも、スケッチブックの内容を見れば、春香の過去の記憶を取り戻すきっかけになるのではないかと医師が考えたからでした。医師はふと気づいて、春香がスケッチブックの内容を読み聞かせていた幼児とともに話をしていれば、記憶を取り戻すのではと、二人だけで話をするのを勧めます。

病院の最上階6階のホールから、窓越しに冬の町の光景が見えました。あの中に、春香の自宅や学校、二人が語り合った公園が見えるはずです。広げたスケッチブックを広げて、その内容を説明するすすむでしたが、春香は一生懸命に語るすすむを優しい笑顔で見守るだけで記憶を回復する様子はありません。何より、心で話をする能力も失っていました。この時、春香のお兄さんが姿

を見せて、持ってきたカーディガンを春香の肩から羽織らせて戻っていきました。それは妹を気遣い優しいお兄さんの手つきでした。そして、春香が肌寒くて寒ければかわいそうだからとカーディガンを持って行けと指示したのはお母さん。今の春香は優しい家族に包まれているようでした。

春香はもう自分には無用だからと、二人の記念にスケッチブックをすすむに託します。すすむは、ふと、本当は春香が記憶を取り戻していて、周囲にも自分にも記憶を失った演技をしているのではないかとも感じますが、本当のことはわかりません。でも、今、本当の家族に包まれた春香にとって、どちらでもいいことのようにでした。

病院帰りの車の中、すすむはスケッチブックを大切に抱いて、お父さんとお母さんを眺めます。幼いながら、明るい家族が再生するといいなと願って……。スケッチブックの中の7つの物語が紡ぎ出したものは、二人の心に秘められて、永遠の秘密になりました。

## おわり

20141012

この物語にまつわる少し不思議な実話です。

実はこの物語の舞台になった町は、私が生まれ育った町をイメージして描きました。この物語を改稿するとき、その町を訪れたことがあります。最寄りのJRの駅から10分ほどバスに乗ったところでした。

その日、JRの最寄り駅で下車したのが午前11時ぐらい。バス停に向かうと、バスの到着まで20分ほどの時間が空いていました。現地で食事をする店があるかどうか不明で、食事に時間をつぶすのももったいなかったので、昼食は現地の公園でパンを食べることにして、近くにあったコンビニに立ち寄りしました。バスが来るのも気になっていたのもので、コンビニの店内の時計も眺めながら買い物をしてバス停に戻りました。この時は、もちろん、JRの駅の時計、バス停にあった時計、コンビニの時計、そして私の腕時計の時計の時間はぴたりと一致していました。

現地に到着し、公園を中心に最寄りの商店街や消防署、学校の周囲など、懐かしさと共に回りつつ、同時に小説の取材という目的も忘れて居らず、子供の移動速度を腕時計で意識しながら歩いていました。

どんな順路をとったのかは思い出せませんが、メモをとりながら腕時計で5時過ぎまで歩き回って、帰りのバスを待つために公園近くのバス停に行きました。バス停に時計があったのですが、示していた時間は午後4時。腕時計の時間と約1時間の差がありました。その近辺を回っている間、常に腕時計をチェックしていましたから、自分の腕時計が狂っているとは考えず、バス停

の時計が狂っていると思いました。ところが、JRの最寄り駅のバス停で下車するとそのバス停の時計も、JRの駅の時計も、腕時計が示す時間と1時間のズレがありました。そう、狂っていたのは私の腕時計でした。その後、腕時計の時間を合わせなおしました。腕時計はその後数年間使い続けましたが時間が狂う様子もなく正常に動き続けていました。

腕時計によると、私が現地で過ごしたのは、約5時間半。でも、実際の時間の流れは4時間半でした。ひょっとしたら……。ひょっとしたら、その差の一時間、私はこの世界じゃない別の世界を歩き回って、戻ってきたのでしょうか？（笑）

いまでも、よくわからない出来事です。

20141102

編集の時に、「7日目、冬の魔法使い」のページが入れ替わっていたミスを修正しました

20141230

年末から勧めていた改稿を完了して、電子書籍も作成し直しました。

現在、14100アクセス、電子小説のダウンロードは510件に達しました。

読んでいただいた方に感謝します。

20150107

この物語は、最初は手塚賞に応募するつもりで描いていたマンガ「さびしい魔法使い」でした。一部のコマを挿絵に使っています

。

よろしければ、残っている半分ペン入れした未完成の原稿の中から、他のページも一部ご覧ください。



# さみしい 魔法使い



魔法のすゝめは  
此の国へ行きました。  
でもさみしいさみしい此の  
国、人はおれもいません  
さみしい魔法使いでした。  
人といふに似てもいそ  
まかしては魔法使いで  
し。

塚越広治









Handwritten text in a box, likely a poem or story related to the illustrations. The text is faint and difficult to read but appears to be in Chinese characters.

Handwritten text in a box, likely a poem or story related to the illustrations. The text is faint and difficult to read but appears to be in Chinese characters.







Handwritten notes in the upper right corner, including the word "Pencil" and other illegible scribbles.





Handwritten text in a circular arrangement, possibly a signature or a title, written in a stylized script.



冬の魔法使い　　すすむと春香の7つの旅

<http://p.booklog.jp/book/16505>

著者：塚越広治

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ken19570420/profile>

著者連絡先（メール）：[muatr2004@yahoo.co.jp](mailto:muatr2004@yahoo.co.jp)

お気軽にご連絡ください

発行所：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/16505>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/16505>